

方ニ專屬ヒシメス行政部及ヒ立法部ヲシテ共ニ此權利ヲ有セシムルヲ以テ最モ適當ナリト信ス何トナレハ如何ナル法律カ國家ニ必要ナリヤ否ヲ認定スルニ最モ良地位ヲ占ムルモノハ實際國家ノ政治ニ與カル所ノ者即チ行政部ノ人々ナリ故ニ行政部ニ法律案提出權ヲ與ヘサルハ實際國家ノ爲メニ甚々不利益タリ又前示佛國千八百十四年及ヒ千八百五十二年ノ憲法ノ如ク法律案提出權ヲ唯政府ノミニニ制限スルハ固ヨリ其當ヲ得ス何トナレハ前述ノ如ク其權政府ノミニ屬スルトキハ議會ニ於テ如何ナル法律ヲ制定セント欲スルモ其望ム所ノ法律案ヲ議會ノ議ニ付スルコトヲ得サレハナリ

我帝國憲法ニ依レハ法律案提出權ハ議會及ヒ政府共ニ之ヲ有セリ其第三十八條ニ曰ク

兩議院ハ政府ノ提出スル法律案ヲ議決シ及ヒ各法律案ヲ提出スルコトヲ得ト是ニ由テ觀レハ我憲法ハ彼ノ佛國ニ於テ欽定憲法ノ行ハレタル時代ニ比スレバ大ニ自由制度ニ近キモノナリト評セサルヲ得ス

第二 法律案修正權

法律案修正權

法律案修正權モ憲法ノ精神如何ニ因テ種々相異ナレリ即チ憲法ノ精神ニシテ若シ議會ノ權利ヲ擴張セントスルニアレハ自由ニ法律案ヲ修正スルノ權利ヲ議會ニ附與シ又議會ノ權利ヲ可及的狹縮セントスル憲法ニ在テハ法律案修正權モ尙ホ之ヲ制限シタリ

佛國千八百十四年ノ憲法ニ於テハ政府ヨリ提出シタル法律案ヲ修正セント欲スルトキハ豫メ君主ノ同意ヲ得ルニ非サレハ之ヲ議會ノ議ニ付スルコトヲ得サリキ又千八百五十二年ノ憲法ニ於テハ修正案アルトキハ先ツ之ヲ委員會ノ議ニ付シ若シ委員會ニ於テ可決シタレトキハ次ニ之ヲ參事院ニ廻シ而シテ參事院ニ於テ之ヲ可決シタル上ニ非サレハ議會ノ問題ト爲スコトヲ得サルノ規定ナリシナリ

我帝國憲法ニ於テハ法律案修正權ノ事ニ關シテハ特別ノ規定ナキモ議院法ニ依レハ議會ニ此權利アルコト瞭然タリ其第二十九條ニ曰ク凡テ議案ヲ發議シ及ヒ議院ノ會議ニ於テ議案ニ對シ修正ノ動議ヲ發スル者ハ二十人以上ノ贊成アルニ非サレハ議題ト爲スコトヲ得スト是ニ由テ觀レハ贊成者二十人以上ア

法律案
定權ヲ實
行スルニ
付テノ原
則如何

ルニ於テハ修正案ヲ提出シテ之ヲ議會ノ議ニ付スルコトヲ得
第二問 議會ハ如何ナル原則ニ依テ法律案議定權ヲ實行スルヤ
此問題ニ付テハ先ツ法律案ヲ議會ノ議ニ付スルマテノ手續ト既ニ議事ニ着手
シタル以後ノ事トヲ説明セサルヘカラス凡テ法律案ハ議會ノ議ニ付スルノ前
豫メ委員ニ於テ之ヲ審査スルコトヲ要ス議院法第二十八條ニ曰ク政府ヨリ提
出シタル議案ハ委員ノ審査ヲ經スシテ之ヲ議決スルコトヲ得ス但シ緊急ノ場
合ニ於テ政府ノ要求ニ由ルモノハ此限ニ在ラスト此條ニ依レハ委員ノ審査ヲ
經ヘキモノハ單ニ政府ヨリ提出シタル議案ノミニ限ルカ如シト雖トモ然ラス
議員ヨリ提出シタル議案ニ付テモ猶ホ政府提出ノ議案ニ於ケルカ如ク概シテ
委員ノ審査ニ付シ委員會ニ於テ之ヲ審査シタル後委員長ヨリ委員會ノ經過ト
其結果トヲ議會ニ報告シ議會ハ其報告アリタル後議事ニ着手スルヲ例トス但
シ政府提出ノ案ニ付テハ議院法第二十八條ニ云ヘルカ如ク緊急ノ場合ニ於テ
ハ委員ノ審査ヲ經サルコトアリト知ルヘシ自由ニ其議案ヲ審議スルコトヲ得
右委員會ニ關スル大體ノ規則ハ委員會ハ議員以外傍聽ヲ許さず又或ハ場合ニ

公開

於テハ議員ト雖トモ尙ホ傍聽ヲ禁スルコトアリ議院法第二十三條及ヒ第二十
四條此他委員會ニハ全院委員、常任委員、特別委員等ノ別アレトモ其詳細ハ之ヲ
畧ス
次ニ議事ニ着手シテヨリ以後ノ原則ニ付キ一言セン
第一 帝國議會ノ議事ハ必ス之ヲ公開セサルヘカラス憲法第四十八條ニ曰ク
兩議院ノ會議ハ公開ス但シ政府ノ要求又ハ其院ノ決議ニ依リ秘密會ト爲ス
コトヲ得
ト此原則モ亦自由制度ヲ採用スルノ精神ヨリ出テタルモノナリ蓋シ代議政体
ノ行ハレタル初メニ在リテヤ往々議會ハ之ヲ公開セサリシカ漸ク代議政体ノ
發達スルニ隨ヒ可及的國家ノ秩序安寧ノ許ス限リハ公ケニ國家ノ事務ヲ議定
スルノ趣旨ヨリシテ議會ノ議事モ亦必ス之ヲ公開セサルヘカラストノ説行ハ
レ今日ニ在テハ何レノ國ニ於テモ概シテ議會ノ議事ハ之ヲ公開ス本邦ハ即チ
此原則ヲ採用シタルナリ
然レトモ或ル議事ニ付キ之ヲ公開スルトキハ或ハ國家ノ秩序安寧ニ或ハ風俗

ニ害アルコトアリ而シテ此等ノ場合ニ於テハ必ス秘密會ヲ開クノ方法ヲ設ケサルヘカラス所謂國家ノ秩序安寧ニ關スルモノトハ例ヘハ外交問題ノ如キ是ナリ即チ此種ノ議事ヲ公開スルトキハ秘密漏洩シ國家ノ爲メニ甚タ有害ナルカ故ニ必スヤ其議事ヲ秘密ニセサルヲ得ヌ又或ル種ノ法律案ニ至リテハ其議事ヲ公ニスルトキハ却テ風俗ヲ害スルノ恐アルコトアリ現ニ第一期ノ議會ニ於ケル海外出稼醜業婦女ニ關スル法律案ノ如キハ議事頗ル猥褻ニ涉ルノ恐レアリシカ故ニ之ヲ秘密會ニセリ右憲法第四十八條ノ但書ハ蓋シ之カ爲メナリ

第二 法律ノ議案ハ必ス三讀會ヲ經ルヲ要ス(議院法第二十七條)

此原則ヲ規定シタル所以ノモノハ他ナシ議事ヲ鄭重ニシ可及的法律ヲ完全ニ制定センカ爲メナリ然レトモ或ル場合ニ於テ三讀會ヲ經ルトキハ爲メニ緊急ノ必要ニ應スルコト能ハサルノ恐レアルヲ以テ時ニ之ヲ省畧スルコトヲ得サルヘカラス同條但書ニ政府ノ要求若クハ議員十人以上ノ要求ニ由リ議院ニ於テ出席議員三分ノ二以上ノ多數ヲ以テ可決シタルトキハ三讀會ノ順序ヲ省畧スルコトヲ得トアルハ即チ此理由ニ出ツ

三讀會

過半数決

第三 議會ノ議事ハ必ス出席員ノ過半数ヲ以テ決メルヲ要ス

是レ憲法ノ原則ニシテ法律ヲ以テ之ヲ動かスヘカラス憲法第四十七條ニ曰ク兩議院ノ議事ハ過半数ヲ以テ決ス可否同數ナル時ハ議長ハ決スル所ニ依ルト此原則モ亦多辯ヲ俟タスシテ明カナラン凡ソ議決ノ方法ニ種々アリ或ル一ノ議題ニ付キ數説出テタルトキ或ハ過半数ヲ以テスルコトアリ或ハ最多數制ヲ用フルコトアリ而シテ我憲法ニ於テ過半数制ヲ採用シタルハ蓋シ議會ノ議事ヲ鄭重ニスルノ精神ニ出ツ

貴族院ト衆議院トノ關係

議事ニ關シ猶ホ少シク論究スヘキモノアリ貴族院ト衆議院トノ關係是ナリ今茲ニ一ノ法律案ヲ政府又ハ議員ヨリ提出シ而シテ前段既ニ述ヘタル手續ニ依テ議事ニ着手シタルトキハ法律案ノ結局如何

第一 法律案ノ提出セラレタル議院ニ於テ其法律案ヲ否決シタルトキハ乃チ廢案トナルカ故ニ此場合ニ於テハ他ノ議院ニ通知スルニ及ハサルハ勿論其法律案ハ同會期中再ヒ提出スルコトヲ得ヌ是レ憲法第三十九條ノ明定スル所ナリ曰ク

兩議院ハ一ニ於テ否決シタル法律案ハ同會期中ニ於テ再ヒ提出スルコトヲ得ス

第二 若シ法律案ヲ提出セラレタル議院ニ於テ可決シタルトキハ之ヲ他ノ議院ニ移シ而シテ其議院ニ於テ更ニ之ヲ討議セサルヘカラス
第三 此ノ如ク甲議院ニ於テ可決シタル一ノ法律案ヲ乙議院ニ移シタル場合ニ於テ乙議院ニ於テ全ク甲議院ノ議決ニ同意シタルトキハ乙議院ヨリ其旨ヲ上奏スヘク若シ又乙議院ニ於テ政府ヨリ提出シタル議案ヲ否決シタルトキハ其旨ヲ上奏スルト同時ニ最初ニ議決シタル甲議院ニ通知スヘキナリ(議院法第五十四條)

右ノ如ク甲議院ニ於テ議決シタル法律案ヲ乙議院ニ於テ全ク可決シ又否決シタルトキハ別ニ論スヘキ所ナシト雖トモ一ノ法律案ニ付キ貴衆兩院ノ職權ハ同一ナルヲ以テ或ハ甲議院ニ於テ可決シタル法律案ヲ乙議院ニ於テ修正スルコトアリ此場合ニ於テ其修正案ヲ乙議院ヨリ更ニ甲議院ニ回付シ而シテ甲議院ニ於テ若シ乙議院ノ修正ニ同意シタルトキハ是亦煩雜ナルコトナク即チ

兩院協議會

其修正ニ同意シタル議院ヨリ其旨ヲ上奏シ以テ陛下ノ裁可ヲ請フヘキナリ然ルニ若シ一法律案ノ修正ニ付キ貴衆兩院ノ議相協ハサルトキハ如何スヘキヤ我議院法ノ規定スル所ニ依レハ此場合ニ於テハ兩院協議會ヲ開キ以テ之ヲ調和スルモノトス(議院法第五十五條)

此兩院協議會ハ兩議院ヨリ各十名以下同數ノ委員ヲ撰擧シ其委員ノ協議案成立スルトキハ議案ヲ政府ヨリ受取リタルカ又ハ議案ヲ提出シタル甲議院ニ於テ先ツ其協議案ヲ議シ次ニ乙議院ニ移シテ之ヲ議セシムルモノトス(議院法第五十六條第一項)而シテ若シ協議會ニ於テ調成シタル議案カ甲乙兩院ニ於テ可決シタルトキハ之ヲ第二ノ議院ヨリ上奏シテ裁可ヲ請フヘク若シ又其協議案ヲ甲乙兩院ノ一ニ於テ否決シタルトキハ乃チ廢案トナルヘシ
右協議會ニ於テ調成シタル議案ヲ甲乙兩院ニ於テ議スルニ當リ通常ノ法律案ヲ議スルト異ナル所ハ通常ノ場合ニ於テハ一ノ法律案ニ付キ如何ナル修正説ヲ提出スルモ毫モ妨ケナシト雖トモ之ニ反シテ協議案ニ對シテハ更ニ修正ノ動議ヲ爲スコトヲ得サルコト是ナリ(議院法第五十六條第二項)

法律案ノ議事規則ニ關シテハ尙ホ論究スルニ多ク今之ヲ略ス

豫算議定權

第二欸 豫算議定權

我帝國憲法第六十四條ニ依レハ乃チ曰ク豫算ニ關シテハ國家ノ歲出歲入ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘシト國民ヨリ撰出シタル議員ヲ以テ組織スル所ノ議會ニ豫算議定權ヲ附與シテ

ルハ實ニ我邦空前ノ一大美事ト謂フヘシ合憲法ノ規定ニ依レハ豫算ノ定權ニ關シ種々ノ制限アレトモ充分之ヲ利用スル曉ニハ以テ國民ノ權利ヲ伸暢スルコトヲ得ヘシト信ス

凡ソ豫算議定權ヲ議會ニ附與スル所以第一國家ノ財政ヲ整理セシカ爲メナリ第二行政官ノ行爲ヲ監督センカ爲メナリ故ニ此豫算議定權ノ國民ヨリ撰出シタル所ノ代議士ニ有ルト無キトハ實ニ專制政治ト自由政治トノ因テ以テ相分ル一所ノ境界ヲ示スルモノナリ我邦ニ於テ豫算ノ起源ハ明治六年ニ在リ即チ同年始テ豫算出入見込會計表ナ

豫算議定ニ關スル原則

ルモノ出テ其後明治七年ヨリ豫算會計ナルモノヲ作リ明治十四年ニ至リテ會計法頒布セラレ漸ク豫算整頓ニ就キシカ降テ明治十七年ニ歲出入豫算條規ナルモノ行ハレ尋テ明治十九年遂ニ勅令ヲ以テ豫算ヲ發布スルニ至レリ然リト雖トモ憲法制定以前ニ在リテヤ行政官カ自己一個ノ考案ニ由リ隨意ニ之ヲ調製スルモノカ故ニ未ダ以テ被治者タル國民ニ十分ノ安全ヲ與フルコト能ハサリキ然ルニ明治二十三年憲法實施以來此ニ始メテ眞乎タル豫算出テ以テ國民ニ安全ヲ與フルコトハナレリ豫算議定權ノ事ニ關シ論究スヘキモノ數多アレトモ今先ツ憲法其他議院法及ヒ會計法等ノ規定ヨリ出ツル所ノ最モ重要ナル二三ノ原則ヲ舉示スレハ則チ左ノ如シ

- 第一 歲出入ノ豫算ハ毎年之ヲ帝國議會ニ提出シ以テ其協贊ヲ經サレヘカラズ毎年之ヲ提出スルハ是レ豫算案ノ特質タリ
- 第二 帝國議會ノ協贊ヲ經テ確定シタル豫算ハ國務大臣ニ於テ其各項ノ金額ヲ彼此流用スルコトヲ得ス(會計法第十二條諸君モ知ラル)如ク凡ソ豫算ハ

之ヲ款項目ニ區分シテ帝國議會ノ議ニ附スルハ唯款項ハ...

第三 帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セス又ハ豫算成立ニ至ラサルト...

第四 豫算案ハ先ツ之ヲ衆議院ニ提出ス(憲法第六十五條)...

以上舉示セシ原則ニ付キ以下聊カ之ヲ論辯ヒシ...

第一 豫算ハ毎年帝國議會ニ提出シ其協賛ヲ經ルヲ要ス...

豫算ハ毎年帝國議會ノ協賛ヲ經ヘシトシ規定ヲ憲法中ニ特背...

理由ハ抑モ那邊ニ在ルカ是レ一ハ經濟上ハ必要一ハ政治上ハ必要ヨリ來...

フ之ヲ述ベシ...

其七 豫算ヲ毎年帝國議會ニ附スルハ經濟上ハ必要ヨリ來ル...

濟上ノ實勢ハ社會ノ進歩ニ共ニ日々變遷シ行クモ...

歲入ニモモ數年ニ跨リテ之ヲ豫定スルハ策ハ得ルモ...

算ヲ毎年議會ノ議ニ附スル理由ハ一ハ...

其二 豫算ヲ毎年帝國議會ニ議ニ附スルハ政治上ハ必要ヨリ來...

夫レ帝國議...

國會ハ行政官ヲ監督スルノ職權ヲ有ス然ルニ今若シ數年ノ間國家ノ財政ヲ行...

政部長放任悉ク無キハ政府監督ノ職權ハ殆ク有名無實ニ歸ス...

其共豫算ハ毎年議會ニ附スルハ原則若規定...

右如ク豫算ハ毎年帝國議會ニ議ニ附シ...

ヲ觀察スルニ於テ此原則ハ廣出テ於テ其効用最モ多シ何トナレハ歲出ニ...

豫算ハ毎年協賛ヲ要ス

二百七

憲法

二百七

又歲出歲入ノ豫算ハ毎年帝國議會ノ議ニ附セサルヘカラスト雖トモ或ル場合...

ニ於テハ數年ニ跨リ繼續費タルモノ設ケルコト憲法第六十八條ニ特別...

既。定。ノ。歳。出。ト。ハ。前。年。度。ノ。豫。算。ニ。於。テ。既。ニ。定。マ。リ。タ。ル。金。額。ヲ。指。示。ス。ル。モ。ノ。ナ。ル。ヤ。將。テ。豫。算。提。出。前。既。ニ。勅。令。ヲ。以。テ。定。メ。タ。ル。諸。般。ノ。歳。出。ナ。ル。ヤ。如。何。ノ。點。是。ナ。リ。但。シ。此。點。ニ。付。テ。ハ。後。段。第。四。問。ニ。至。リ。詳。論。ス。ヘ。シ。

法。律。ノ。結。果。ニ。由。ル。歳。出。ト。ハ。例。ヘ。ハ。帝。國。議。會。裁。判。所。及。ヒ。會。計。檢。査。院。ノ。經。費。又。ハ。徵。兵。費。若。ク。ハ。徵。稅。費。等。ノ。如。キ。モ。ノ。是。レ。ナ。リ。此。等。ノ。費。用。ハ。法。律。ノ。結。果。ト。シ。テ。生。ス。ル。所。ノ。モ。ノ。ナ。リ。

又。法。律。上。政。府。ノ。義。務。ニ。屬。ス。ル。歳。出。ト。ハ。例。ヘ。ハ。公。債。償。還。ノ。利。子。及。ヒ。手。數。料。法。律。上。ノ。賠。償。及。ヒ。訴。訟。費。預。金。ノ。利。子。又。ハ。備。外。國。人。ノ。俸。給。及。ヒ。恩。給。等。等。ノ。如。キ。モ。ノ。是。ナ。リ。此。等。ハ。實。ニ。法。律。上。政。府。ノ。義。務。ニ。屬。ス。ル。所。ノ。費。用。ナ。リ。

右。三。種。ノ。歳。出。ノ。費。目。ハ。明。治。三。十。三。年。法。律。第。五。十。七。號。會。計。法。補。則。ニ。於。テ。明。定。セ。ラ。レ。タ。ル。ガ。故。ニ。其。詳。細。ハ。同。法。ニ。就。テ。看。ル。ヘ。シ。但。シ。其。規。定。セ。ル。所。ノ。費。目。ハ。果。シ。テ。皆。憲。法。第。六。十。七。條。ノ。明。文。ニ。適。合。ス。ル。ヤ。否。ヤ。ニ。至。リ。テ。ハ。多。少。異。論。ナ。キ。ニ。非。サ。レ。ト。モ。事。細。密。ニ。涉。ル。ヲ。以。テ。之。ヲ。畧。ス。

第。二。問。本。條。ニ。規。定。セ。ル。所。ノ。歳。出。ニ。付。テ。帝。國。議。會。ハ。如。何。ナ。ル。點。ニ。マ。テ。議。及。ス。ル。コ。ト。ヲ。得。ル。ヤ。換。言。ス。レ。ハ。帝。國。議。會。ハ。唯。政。府。ノ。同。意。ヲ。得。ハ。如。何。ナ。ル。點。目。ト。雖。ト。モ。廢。除。削。減。ヲ。爲。シ。得。ル。ヤ。

諸。君。モ。尙。ホ。記。憶。セ。ラ。ル。ハ。ナ。ラ。ン。此。點。ニ。付。テ。ハ。第。一。期。ノ。議。會。ニ。於。テ。殊。ニ。議。論。ノ。囂。然。タ。リ。シ。所。ナ。ル。ヲ。而。シ。テ。或。ル。一。派。ノ。議。員。ハ。曰。ク。憲。法。第。六。十。七。條。ニ。規。定。セ。ル。所。ノ。歳。出。ハ。或。ハ。天。皇。ノ。大。權。ニ。基。キ。或。ハ。法。律。ノ。結。果。ニ。由。リ。又。ハ。法。律。上。政。府。ノ。義。務。ニ。屬。ス。ル。所。ノ。モ。ノ。ナ。ル。ヲ。以。テ。議。會。ニ。於。テ。之。ヲ。廢。除。又。ハ。削。減。セ。ン。ト。欲。セ。ハ。必。ス。先。ツ。政。府。ノ。同。意。ヲ。得。サ。ル。ヘ。カ。ラ。ス。次。ニ。政。府。ノ。同。意。ヲ。得。テ。之。ヲ。廢。除。削。減。ス。ル。ニ。當。テ。モ。亦。タ。必。ス。法。律。勅。令。ノ。範。圍。内。ニ。於。テ。セ。サ。ル。ヘ。カ。ラ。ス。換。言。ス。レ。ハ。法。律。勅。令。ノ。範。圍。内。ニ。於。テ。廢。除。削。減。ヲ。請。求。シ。得。ヘ。キ。モ。其。以。外。ノ。廢。除。削。減。ヲ。請。求。ス。ル。コ。ト。ヲ。得。ズ。如。何。ト。ナ。レ。ハ。議。會。ハ。官。制。又。ハ。俸。給。令。等。ニ。侵。入。シ。テ。議。決。ス。ル。ノ。權。利。ナ。キ。ヲ。以。テ。ナ。リ。ト。余。ハ。此。說。ニ。服。ス。ル。コ。ト。能。ハ。ス。

實。ニ。論。者。ノ。言。ヘ。ル。カ。如。ク。官。制。ヲ。定。メ。俸。給。令。ヲ。發。ス。ル。ハ。天。皇。ノ。大。權。ニ。屬。ス。ル。ヲ。以。テ。其。制。定。ニ。付。テ。ハ。議。會。ハ。毫。モ。之。レ。ニ。喙。ヲ。容。ル。コ。ト。ヲ。得。サ。ル。ヤ。勿。論。タ。リ。然。リ。ト。雖。モ。議。會。ニ。於。テ。憲。法。第。六。十。七。條。ノ。歳。出。ニ。關。シ。テ。政。府。ニ。其。廢。除。又。ハ。削。減。

ヲ請求スルハ決シテ官制俸給令其他ノ制定ニ干渉スルモノニ非ラス本條ニ曰
 ○ハズヤ上略政府ノ同意ナクシテ云々下略ト然レハ議會ハ唯政府ノ同意サヘ得
 レハ如何ナル廢除如何ナル削減ト雖モ之ヲ爲シ得ヘク其廢除削減ノ程度費用
 ノ種類ニ至リテハ毫モ制限スル所ナキナリ又此ノ如クスルモ敢テ 天皇ノ大
 權ヲ侵害スルモノニ非ス如何トナレハ其廢除削減ニ對シテ同意スルト否トハ
 全ク政府ノ權内ニ在レハナリ

憶フニ彼レ反對論者カ憲法第六十七條ニ關スル歳出ノ廢除削減ノ請求ヲ以テ違
 憲ノ所爲ナリ大權ノ侵害ナリト疾呼セシハ第一期ノ議會ニ於テハ當ニ節減額
 非常ニ巨多ナリシノミナラス豫算案ヲ議ヘルニ當リ自ラ先ツ一種ノ官制俸給令
 等ヲ擬定シ之ヲ標準トシテ諸般ノ費目ヲ節減シ而シテ議會ニ提出シテ政府ノ
 同意ヲ得ント欲セシカ故ナルヘシ實ニ一見スル所或ハ官制俸給令等ニ立入ル
 カ如キ觀アリト雖トモ之ヲ以テ違憲ノ所爲ナリ大權ノ侵害ナリト謂フヘカラス
 若シ其レ議員ノ擬定セシ所ノ官制俸給令等ヲ以テ直チニ執行スルモノタラハ
 則チ然ラン然リト雖トモ是レ徒ラ一ノ參考書ニ過キス凡ソ政府ヨリ提出シタル

所ノ豫算案ニ修正ヲ加ヘント欲セハ須ラク先ツ一ノ標準ヲ設ケ之ニ依テ査定
 セサルヘカラス一派ノ議員カ自ラ擬定シタル所ノ官制俸給令等ヲ以テ廢除削
 減ノ參考ニ供シタルハ乃チ此意ニ外ナラス且ツ其レ帝國議會ニ於テ政府提出
 ノ豫算案ニ修正ヲ加ヘンニハ必スシモ現行ノ官制俸給令等ニ遵據スルヲ要セ
 ス或ハ外國法ヲ參考トシテ査定スルモ又ハ各議員ノ腦裡ニ一ノ標準ヲ設ケテ
 査定スルモ固ヨリ憲法上毫モ制限スル所ニ非サルナリ

之ヲ要スルニ政府提出ノ豫算案ニ掲載シタル所ノ費目ヲ廢除削減スルト官制
 俸給令等ヲ制定スルトハ全ク別物ナリ而シテ官制俸給令等ヲ制定スルハ實ニ
 天皇ノ大權ニ屬シ議會ハ毫モ容喙スルコトヲ得スト雖トモ豫算案ニ掲載シ
 タル憲法第六十七條ニ關スル費目ニ至リテハ十分ニ廢除削減ヲ請求スルコト
 ヲ得ヘシ故ニ議會ハ如何ニ激烈巨額ナル廢除削減ヲ請求スルモ敢テ妨ケアル
 コトナシ是レ固ヨリ國家ノ慶事ニ非スト雖トモ之ヲ目シテ違憲ノ所爲ナリ大
 權ノ侵害ナリト謂フヘカラサルナリ

第三問 帝國議會ニ於テ憲法第六十七條ノ歳出ヲ廢除削減スルニ付テハ如

憲法

同意ヲ求ムル手續如何

何ナル手續ヲ以テ政府ニ同意ヲ求ムヘキヤ即チ兩院別個ニ爲スヘキヤ將
タ兩院合議ノ上其同意ヲ求ムヘキヤ

兩院議決ノ上ニ非サレハ政府ノ同意ヲ求ムルコトヲ得スト云ヘル論者ハ右第
六十七條ニアル帝國議會ノ語ヲ以テ其論據トセリ然レトモ憲法中所謂帝國議
會ノ語ハ兩院ノ語ト其意義ヲ同フシ此語アルカ爲メニ必スシモ兩院議決ノ上
政府ノ同意ヲ求ムルコトヲ要スト云フカ如キ理アルヘカラス加之ス凡ソ衆議
院ヨリ貴族院ニ一ノ議案ヲ移附スルニハ必ス衆議院ニ於テ確定議ヲ經タルモ
ノナルヲ要ス然ルニ憲法第六十七條ノ費目ニ付テハ衆議院ニ於テ政府ノ同意
ヲ得タル後議決シタルニ非サレハ未タ確定議ナルモノナシ斯ノ如キハ我議院
法ノ許サレ所ナリ且ツ若シ帝國議會即チ貴衆兩院合議ノ上政府ノ同意ヲ求
ムルモノトセシカ其手續上亦如何トモスルニ由ナシ何トナレハ貴族院ハ貴族
院議長之ヲ代表シ衆議院ハ衆議院議長之ヲ代表シテ其名ヲ以テ處辨スヘキモ
憲法上未タ帝國議會ヲ代表スルノ機關ヲ設ケサレハナリ然ラハ則チ憲法制定
者ガ右第六十七條ニ於テ帝國議會ノ語ヲ用井タルハ單ニ兩議院ヲ合稱シタル

ニ過キス決シテ反對論者カ云ヘルカ如キ精神ニアラサルヲ知ラン
右ニ述フルカ如キ理由アルヲ以テ憲法第六十七條ノ廢除削減スルニ付
キ政府ニ同意ヲ求ムルハ各院別個ニ爲スヘキモノト論定セサルヘカラス又此
ノ如ク論定スルトキハ衆議院ノ權利ヲシテ鞏固ナラシムル點ヨリ觀察スルモ
大ヒニ利益アリト謂フヘシ如何トナレハ帝國議會ノ各院ニ於テハ先ツ豫算案
ノ各項ヲ議決シタル後次ニ其全体ニ付テ表決セサルヘカラス是故ニ衆議院ニ
於テ憲法第六十七條ノ費目ニ付テハ先ツ政府ニ廢除削減ノ同意ヲ求ムヘク而
シテ若シ政府ニ於テ不當ニモ之ニ應セサルトキハ衆議院ハ尙ホ豫算案全体ヲ
否決スルノ權利ヲ有スルヲ以テ政府ハ已ムヲ得ス或ル點マテ歩ヲ讓リ遂ニ正
當ナル豫算案ノ成立ヲ見ルノ結果ニ至ルヘケレハナリ然ルニ圖ラサリキ第一
期ノ議會ニ於テ衆議院ノ硬派ト呼ハル、議員ハ兩院合議ノ上政府ニ同意ヲ求
ムヘシト唱ヘ政府委員ハ却テ各院毎ニ之ヲ求ムヘシト主張シタルハ實ニ奇ナ
リト謂フヘシ

第四問 憲法第六十七條ノ廢出ニ付政府ト議會ト意思相投合スルコト能ハ

憲法

同意ナキ
時ハ如何

サルトキハ政府ハ原案ヲ施行スヘキヤ將タ前年度ノ豫算ヲ施行スヘキヤ
此點ハ未タ實際ニ起ラサレトモ將來必ス生シ得ヘク且ツ最モ困難ナル問題ノ
一ナリト信ス此點ニ付キ學者及ヒ政治家ノ間ニ種々ノ議論ノレトモ先ツ余ノ
所見ヲ陳ヘ而シテ後世ニ行ハル、一二ノ說ヲ辯セントス
諸君モ知ラル、如ク憲法第六十四條ニ依レハ豫算ハ必ス帝國議會ノ協賛ヲ經
サルヘカラス故ニ豫算全体ニ付キ其成立スルニハ須ラク政府ノ意見ト議會ノ
意見トノ合致アルヲ要ス乃チ此合致アリテ始メテ豫算ノ成立スルモノトス是
レ原則ナリ此原則ニ對シ憲法第六十六條及ヒ第六十七條ニ於テ之カ例外ヲ設
ケタリ而シテ其第一ノ例外タル皇室費ニ付テハ既ニ述ヘタル如ク將來増額ヲ
要スル場合ヲ除外帝國議會ノ協賛ヲ要セス換言スレバ現在ノ定額ニ止マシ
トキハ政府單獨ノ意思ニテ其豫算成立スヘク又第二ノ例外タル憲法上ノ大權
ニ基ツケル既定ノ歳出及ヒ法律ノ結果ニ由リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル
歳出ニ付テハ政府ノ同意ナクシテ帝國議會之ヲ廢除シ又ハ削減スルコトヲ得
サルヲ以テ是レ亦政府單獨ノ意思ニテ其豫算成立スト謂ハサルヲ得ス

其レ斯ノ如ク既ニ憲法第六十七條ニ規定セル所ノ歳出ニ關スル豫算ハ政府單
獨ノ意思ヲ以テ成立スルモノトモ乃チ政府ハ原案ヲ直チニ施行スルコトヲ
得ヘキカ如ク然リト雖トモ此點ニ付テハ宜シク一ノ區別ヲ爲サレヘカラス
憲法上ノ大權ニ基ツケル歳出ニ付テハ先ツ政府ヨリ提出シタル所ノ豫算額カ
前年度ノ豫算額ニ超過スルヤ否ヤヲ觀察シ若シ之レニ超過セサルトキハ政府
ハ原案ヲ直チニ施行スルコトヲ得ヘク之ニ反シテ前年度ノ豫算額ニ超過スル
トキハ其超過額ニ對シテ議會ノ協賛ヲ經ルニ非サレハ之ヲ施行スルコトヲ得
ス故ニ例ヘハ前年度ノ豫算ニ於テ官吏ノ俸給百萬圓ナリシト假定セヨ而シテ
本年度ノ豫算額モ亦百萬圓ナルトキハ政府ハ原案ヲ直チニ施行スルコトヲ得
ヘキモ若シ本年度ノ豫算額百五十萬圓ナルトキハ其超過額即チ五十萬圓ニ對
シテハ議會ノ協賛ヲ經ルニ非ラサレハ之ヲ施行スルコトヲ得ス何トナレハ憲
法第六十七條ニ所謂既定ノ歳出トハ政府ヨリ豫算案ヲ議會ニ提出スル前既ニ
定マル所ノ歳出ヲ指ス然ルニ前例超過額即チ五十萬圓ハ豫算提出前ニ既ニ定
マレル歳出ニアラサルナリ隨テ既定歳出ノ性質ヲ有セザルナリ

之ニ反レテ法律ノ結果ニ由リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ニ至リテハ政府ハ原案ヲ直チニ施行スルコトヲ得ヘシ何トナレハ此三種ノ歳出ニ關シテハ原案ニ掲載スル金額ハ即チ六十七條ニ所謂法律ノ結果ニ因リ及ヒ政府ノ義務ニ屬スル歳出ニシテ政府單獨ノ意思ニ因リ成立スルモノナレハナリ故ニ例ヘハ前期ノ議會ニ於テ歳出ヲ要スヘキ法律案ヲ議定シ陛下之ヲ裁可シ給ヒ而シテ政府其法律ニ由テ本年度ノ豫算案ヲ編製シタルトキ其歳出ハ議會ノ協賛ナクテ成立スヘク又此種ノ歳出ニ付テハ原案ヲ直チニ施行スルヲ得何トナレハ更ニ議會ノ協賛ヲ經テ其支出ヲ爲スノ必要ナキヲ以テナリ

之ヲ要スルニ憲法第六十七條ニ關スル豫算ハ政府單獨ノ意思ヲ以テ成立スルモノナリ然レドモ所謂既定ノ歳出トハ豫算案提出前既ニ確定セシ歳出ヲ指スモノナルカ故ニ若シ豫算案ニ表記スル所ノ歳出額ニシテ豫算案提出前既ニ確定セシ所ノ歳出額ヨリモ多キトキハ其超過額ハ即チ既定ノ歳出ニ非サルヲ以テ此點ニ付テハ必ズ議會ノ協賛ヲ經サルヘカラス

右法律ノ結果ニ由ル歳出及ヒ法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ニ關シテハ敢テ

既定歳出ノ意義

異論ヲ唱フル者ナシ即チ此二種ノ歳出ニ付テハ帝國議會ヨリ廢除削減ヲ請求シ政府ノ之ニ同意セサルトキハ乃チ原案ヲ施行スルノ説行ハル然レトモ憲法上ノ大權ニ基ツケル既定ノ歳出ニ至リテハ世上種々ノ議論アリ即チ一方ニ於テハ全カ上來述フルカ如ク既定ノ歳出トハ豫算案提出前既ニ定マレル歳出ヲ謂フトノ説ニシテ伊藤伯ノ如キモ亦此説ヲ唱ヘラレタリ同伯著ノ憲法義解ニ曰ク既定ノ歳出ハ第一章ニ掲ケタル支出ニシテ憲法實施ノ前後ヲ論ヒス豫算提起ノ前既ニ定マレル經常費額ヲ爲スモノヲ謂フ云々又曰ク但シ既定ト云フトキハ其ノ憲法上ノ大權ニ基クニ拘ハラス新置及増置ノ歳出ハ尙ホ議會ニ於テ論議ノ自由ヲ有スルナリ云々(憲法義解一四二頁)

然ルニ他ノ一方ニ於テハ正反對ノ説アリ曰ク既定ノ歳出トハ大權ヲ以テ定メタル勅令及ヒ其他ノ命令ニ準據スル歳出ヲ謂フ詳言スレハ豫算提出前勅令其他ノ命令ニ依テ定マレル官制又ハ陸海軍ノ編制等ニ因リ生スル所ノ歳出ヲ謂ヒ其歳出額ヲ指スニアラス故ニ如何ナル歳出ヲ新設スルモ是レ全ク天皇ノ御隨意ナリ尙ホ換言スレハ年々歳々勅令ヲ改正シ若クハ創定シ以テ新ク

ナル制度ヲ設ケ其費額如何ニ増加スルモ議會ハ毫モ容喙スルコトヲ得ス何トナレハ是レ實ニ 天皇ノ大權ニ基ツケル既定ノ歲出ナレハナリト此說ハ文學士都築馨六君カ國家學會雜誌(第五十)ニ於テ主張シタル所ナリ而シテ其論據トスル所ハ概ネ左ノ諸點ニ歸スルモノ、如シ

- 第一 今若シ既定ノ文字ヲ豫算案提出前既ニ定マレル歲出ナリト解釋スルトキハ憲法中前後撞着ノ箇條ヲ生セシ 天皇ハ憲法第十條ニ依リ行政各部ノ官制及ヒ文武官ノ俸給ヲ定ムルノ權利ヲ有シ給フ然ルニ若シ議會ニ於テ俸給ノ増額ヲ拒ムノ權アリトセハ大權ハ俸給ヲ定メ給フノ權利ニアラスシテ單ニ前期議會ノ協贊ヲ經テ定マリタルモノヲ臆寫シ給フノ權利タルニ過キス又同第十二條ニ依リ陸海軍ノ編制及ヒ常備兵額ヲ定メ給フノ權利ニ付テモ亦然リ其レ斯ノ如クハ此等ノ諸點ヲ定ムルノ權利ハ 天皇ニ在ラスシテ其實議會ニ在リト謂ハサルヲ得サルニ至ラシ是レ豈正當ノ解ナランヤ
- 第二 若シ其レ文武官ノ俸給若シクハ常備兵額ニシテ猶ホ議會ノ協贊ヲ經テ成立スルモノトセハ右第十條及第十二條ハ實ニ空文ニ歸シ去ラシム

第三 最初政府ヨリ提出シタル豫算案中ニ存在セシ既定ノ歲出ハ抑モ何ニ因テ此性質ヲ有セシヤ是レ實ニ政府單獨ノ意思ニ因テ興ヘタルモノニ非ズヤ果シテ然ラハ爾來復々政府ノ單意ヲ以テ既定歲出ハ性質ヲ與フルコトヲ得サルノ理アルヘカラス故ニ政府ハ年々歲々其意ニ隨テ歲出ヲ増額スルモ敢テ妨ケアルコトナシ

此他尙ホ一二ノ論據ナキニ非ザレトモ其主要ナルモノハ以上ノ三點ニ過キス今ハ此說ニ服スル能ハス請フ以下逐次之ヲ辯駁セン

第一點 憲法ノ條文ニ撞着ヲ來ヌスト云ヘル論據ハ毫モ取レニ足ラス今若シ論者ノ如ク憲法第十條及ヒ第十二條ニ於テ 天皇ハ何々ヲ定ムト規定シ而シテ其第六十七條ニ至リテ自由ニ費用ヲ支出スルコトヲ得スハ即チ前後撞着スルニ非サト言ハ、右第十條及ヒ第十二條ノ規定ハ尙ホ第六十二條及ヒ第六十三條トモ撞着スト謂ハサルヲ得ヌ試ミニ想ヘ若シ政府カ單獨ノ意思ヲ以テ年々規定ノ歲出ヲ増額スルコトヲ得トセハ今日存在セル法律勅令ニ依テ徵收スル所ノ歲入ニシテ不足ナルトキハ抑モ如何スヘキヤ其レ新タニ租稅ヲ課シ

及ヒ稅率ヲ變更セシムルニハ必ス法律ヲ以テ之ヲ定メサルヘカラサルニ非スヤ又國債ヲ起シ及ヒ豫算ニ定メタルモノヲ除ク外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ノ爲スニハ亦必ス帝國議會ノ協贊ヲ經サルヘカラサルニ非スヤ是ヲ以テ一方ニ於テハ天皇ハ何々ヲ定ムト規定シ他ノ條文ニ依リテ費用ヲ支出スルニハ必ス帝國議會ノ協贊ヲ經ルヲ要スト謂フモ未タ必スシモ前後撞着ナリト斷定スヘカラス否斯、如キハ是レ實ニ立憲政體ノ真相ナリ再言スレハ或ル區域内ニ於テハ行政官隨意ニ一ノ規定ヲ設クルコトヲ得而モ之ニ關スル費用ニ至リテハ必ス議會ノ協贊ヲ經サルヘカラサルカ如キハ蓋シ立憲政體ノ本旨ナリト謂フヘキナリ

第二點 若シ君主ニ於テ自由ニ費用ヲ增加スルノ權利ヲ有シ給ハサルトキハ憲法第十條及ヒ第十二條ノ規定ハ無用ニ屬セント云ヘル論據モ亦甚ク肯諾シ難シ如何トナレハ 天皇ニ於テ國家ノ爲メニ必要ナル官制ヲ設ケ文武官ノ俸給ヲ定メ又ハ海陸軍ノ編制及ヒ常備兵額ヲ定メ給フカ如キハ既定歳出ノ範圍内ニ於テ尙ホ甚ク必要ナル權利ナレハナリ蓋シ費用ノ點ニ關シテハ帝國議會之ガ議定權ヲ有スレトモ行政各部ノ官制及ヒ文武官ノ俸給又ハ陸海軍ノ編制

及ヒ常備兵額等ニ至リテハ決シテ容喙スルコトヲ得ス否容喙スヘキニ非ス是故ニ費用ノ點ニ付テハ議會ニ其監督權ヲ與ヘ而シテ官制俸給又ハ軍制兵額等ノ如キハハ天皇ノ大權ニ屬シ奉ルコトハ決シテ無用ノ業ニ非サルナリ

第三點 帝國議會開設以來始メテ豫算案ニ於ケル既定ノ歳出ハ政府單獨ノ意思ヲ以テ之ヲ定メタルモノニ非スヤ然ラハ即チ爾後ノ既定歳出モ亦政府ノ單意ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ得サルヲ理アルヘカラスト是レ論者カ得意トスル所ノ論據ニシテ一應理アルカ如シト雖トモ尙ホ未タ罄サハル所アリ其レ帝國議會開設ノ前ニ在リテハ政府單獨ノ意思ヲ以テ既定ノ歳出ヲ定ムルカ如キハ當時適法ナル豫算ノ編制方ナリシナリ是レ當ニ既定ノ歳出ノミナラス諸般ノ歳出皆然ラサルハナク悉ク政府單意ヲ以テ成立セリ換言スレバ六十七條ニ所謂既定ノ歳出ハ政府單獨ノ意思ヲ以テ之ヲ定メタルカ故ニ既定歳出ノ性質ヲ有セルニ非ス政府ノ單意ヲ以テ既定歳出ノ成立セシハ唯當時ノ法則然ラシメタルノミ而シテ之ニ既定ノ歳出タル性質ヲ與ヘタルハ則チ議會開設ノ當時豫算案提出前既ニ確定セシカ故ナリ故ニ若シ議會開設ノ前ニ在リテモ既定歳出

ノ成立セシムルニハ或ハ元老院或ハ法制局ノ議ヲ經ルヲ要シタランカ亦必ス此等ノ條件ヲ具備スルニ非サレハ其有効ナラサルヤ勿論タリ然リト雖トモ帝國議會開設ノ後ニ至リテハ當初存在セシ費額以外ニ既定ノ歳出タル性質ヲ有セシムルニハ必スヤ議會ノ協賛ヲ經サルヘカラス

凡ソ帝國憲法上豫算ニ關スル大原則ハ載セテ第六十四條ニ在リ曰ハスヤ「國家ノ歳出歳入ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協賛ヲ經ヘント」而シテ此原則ニ最モ大ナル例外ハ皇室費即チ是ナリ是レ固定歳出ノ最モ動カスヘカラサル且最モ貴スヘキ所ノモノナリ然ルニ此皇室費ト雖トモ將來若シ増額ヲ要スル場合ニ於テハ尙ホ帝國議會ノ協賛ヲ經サルヘカラサルニ非スヤ如何ソ官吏ノ俸給ノ如キハ縱ヒ幾許増額スルモ敢テ然ルヲ要セスト謂フカ如キ理アルヘキカ必スヤ帝國議會ノ協賛ヲ經サルヘカラス是レ理ノ最モ略易キ所ナリ是故ニ憲法ノ精神ヨリ論スルモ既定ノ歳出ハ豫算案提出前既ニ定マレル費額ナリト解釋ヒサルヘカラス若シ然ラス反對論者ノ如ク第六十七條ノ歳出ヲ悉ク政府單獨ノ意思ヲ以テ成立スルモノナリトセンカ右第六十四條ノ大原則ハ殆ント有名無實

ニ歸シ去ルノ危険アルヲ奈何ヒシ

以上論シタル所ニ依レハ憲法第六十七條ニ所謂既定ノ歳出トハ豫算案提出前既ニ成立セル費額ヲ指スモノナリト解釋セサルヲ得ズ而シテ今ヤ論理上本條全体ノ規定ヲ觀察センニ余ハ斯ノ如ク制限ヲ立ツルトキハ甚ダ有益ナル條規ナリト信ス如何トナレハ第六十七條ニ定ムル所ノ歳出ハ孰レモ國家ノ存立ニ必要缺クヘカラサル費用ナレハナリ例ヘハ國債元利ヲ償還スル爲メノ費用陸海軍ノ費用官吏ノ俸給等ノ如キ之ヲ支出スルニ非スンハ國家須臾モ存立スルコト能ハス故ニ此等ノ費用ニ付テハ一度ヒ帝國議會ノ協賛ヲ經タル上ハ敢テ毎年之ヲ議セシムルノ必要殆ント無シト云フモ不可ナシ

右帝國憲法第六十七條ノ歳出ハ上述ノ如キ性質ノモノナルヲ以テ自由制度ノ生母トモ呼ハル、英國ノ如キニ於テモ亦之ニ類似ノ歳出アリ同國ニ在テハ豫算ノ中凡ソ總歳出三分ノ一ハ毎年議會ノ議ニ附セスシテ成立ス千八百八十九年ノ豫算ニ依レハ其額凡ソ七億フランク(大約我壹億七千五百萬圓)ハ既定歳出ノ性質ヲ有セリ今其内譯ヲ見レハ皇室費國債元利償還金下院議長ノ俸給或ル高等法官並

ニ外交官ノ俸給等是レナリ但シ陸海軍ノ費用其他ノ文官ノ俸給ノ如キハ即チ然ラス此他獨逸ノ或ル小國ニ於テモ亦我憲法ニ所謂既定歳出ノ性質ヲ有スルモノアリ

緊急歳出 第三 緊急歳出

帝國憲法第七十條ニ曰ク

公共ノ安全ヲ保持スル爲メ緊急ノ需用アル場合ニ於テ内外ノ情形ニ因リ政府ハ帝國議會ヲ召集スルコト能ハサルトキハ勅令ニ依リ財政上必要ノ處分ヲ爲スコトヲ得(第二項之ヲ畧ス)

本條ノ規定ハ管ニ第六十四條ノ例外タルノミナラス又第六十二條及ヒ第六十三條ノ例外ナリト謂フヘシ而シテ本條ヲ適用スルニハ如何ナル條件ヲ要スルカ本條ノ規定スル所ニ依レハ即チ左ノ二箇ノ條件ヲ必要トセリ

其條件

其一 公共ノ安全ヲ保持スル爲メ緊急ノ需用アルコト
緊急ノ需用ノ有無ヲ判定スルノ權ハ一ニ府政ニ在ルコト猶ホ恰モ緊急命令ヲ發スルニ當リ果シテ其必要アルヤ否ヤヲ判定スルノ權全ク政府ニ在ルカ

如シ

其二 内外ノ情形ニ因リ政府ハ帝國議會ヲ召集スル能ハサルコト
帝國議會ヲ召集スルコト能ハサルヤ否ヤハ全ク事實上ノ問題ニシテ茲ニ其場合ヲ豫見スルコト能ハス但シ其最モ著シキ場合ハ例ヘハ内亂ノ爲メ又ハ外國ト戰端ヲ開キ國家危急存亡ノ秋事實上議會ヲ召集スルコト能ハサルカ如キ場合即チ是レナリ

右二箇ノ條件ヲ具備シタルトキハ即チ本條ヲ適用シ政府ハ議會ノ協賛ヲ經スシテ或ハ國債ヲ起シ或ハ稅率ヲ増加スル等財政上必要ノ處分ヲ爲スコトヲ得ヘシ
然レモ右財政上必要ノ處分ヲ爲シタルトキハ政府ハ必ズ一會期ニ於テ其勅令ヲ帝國議會ニ提出シ以テ其承諾ヲ求ムルヲ要ス(第七十條第二項而シテ若シ議會ニ於テ之ヲ承諾シタルトキハ敢テ困難ナル所ナシト雖トモ之ニ反シテ議會若シ之ヲ承諾セザルトキハ實際上至難ナル問題ヲ生スヘシ例ヘハ勅令ヲ以テ百萬圓ノ支出ヲ命シ其後會期開クニ當リ既ニ五十萬圓ヲ消費シタル場

合ニ於テ議會若シ之ヲ承諾セサルトキハ果シテ如何スヘキヤ余ノ信スル所ニ依レハ既往ニ於テ効果ヲ生シタル部分ハ全ク有効ノモノト看做サ、ルヲ得ス何トナレハ政府ハ憲法第七十條ニ依リ財政上必要ノ處分ヲ爲スノ權利ヲ有スルヲ以テ猶ホ彼ノ緊急命令ノ場合ニ於ケルカ如ク其勅令ハ單ニ將來ニ向テ効力ヲ失フニ過キスト斷定セサルヘカラサレハナリ故ニ前例ニ於テ其既ニ消費シタル五十萬圓ハ之ヲ適法ノモノト看做シ唯政府ハ殘額五十萬圓ヲ支出スルノ權ナキノミ

憲法第七十條ヲ説明スルニ當リ茲ニ同第六十四條第二項ニ付キテ言セサルヘカラス同項ニ曰ク「豫算ノ款項ニ超過シ又ハ豫算ノ外ニ生シタル支出アルトキハ後日帝國議會ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス」ト其所謂豫算ノ款項ニ超過シタル支出トハ例ヘハ豫算ニ於テ外務省ノ經費ヲ百萬圓ト定メタルモ物價ノ變動等ニ因リ實際百十萬圓ヲ支出シタルトキノ如キ是ナリ但シ此場合ハ第七十條ト類似スル所ナシ唯豫算ノ外ニ生シタル支出ニ付テハ財政上必要ノ處分ト大ニ相類似スル所アリ

豫算外ノ支出

然レトモ第一豫算外ノ支出ヲ爲スニ付テハ第七十條ニ規定セルカ如キ條件ノ具備スルヲ要セス故ニ政府ニ於テ豫算外ノ支出ヲ爲スニハ收テ緊急ノ需用アル場合ナルヲ要セス又帝國議會ヲ召集スルコト能ハサル場合ナルヲ要ヒサルナリ第二余ノ見ル所ニ依レハ政府ニ於テ豫算外ノ支出ヲ爲スニハ必ス第六十九條ノ區域内ニ於テセサルヘカラスト信ズ蓋シ此第六十四條第二項ト第六十九條トハ實ニ密接ノ關係ヲ有シ而シテ此兩條ノ適用ニ付テハ會計法第七條ヲ參考セサルヘカラス憲法第六十九條ニ曰ク「避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フ爲メニ又ハ豫算ノ外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツル爲メニ豫備費ヲ設クヘシ」ト故ニ本條ニ依レハ憲法上ノ原則トシテ第六十四條第二項ノ支出ノ爲メニ必ス豫備費ヲ設ケサルヘカラス而シテ會計法第七條ニ依レハ豫算中ニ設クヘキ豫備費ハ之ヲ二種ニ分チ第一豫備金ハ避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フモノトシ第二豫備金ハ豫算外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツルモノトセリ斯ノ如ク憲法第六十九條及ヒ會計法第七條ヲ參照スルトキハ第六十四條第二項ノ支出ハ必ス豫備金ヲ以テ之ニ充ツヘキモノナリ故ニ第七十條ニ所謂財政

上必要ノ處分トハ大ニ其性質ヲ異ニス然ルニ或ル論者ノ如キハ政府ハ第六十四條第二項ニ依リ豫備金以外ノ支出ト雖トモ之ヲ爲スコトヲ得ト解セリ蓋シテ正當ノ解ト謂フ可カラス何トナレハ若シ論者ノ言ニシテ其當ヲ得タルモノトセハ憲法第六十九條ノ規定ハ全ク無用ニ歸シ了ルヘシ此點ニ付テハ諸君請フ伊藤伯ノ憲法義解ヲ參看セラレヨ

伊藤伯ハ同條ヲ解釋シテ曰ク本條ハ六十九條豫備費ノ設テ以テ豫算ノ不足及豫算ノ外ノ必要ナル費用ヲ補給スルコトヲ定ム蓋シ第六十四條ハ豫算超過及豫算外支出ニ付キ議會ノ事後承諾ヲ求ムヘキコトヲ掲ゲタリ而シテ其ノ超過及額外支出ハ何等ノ財源ニ資リテ以テ之ヲ供給スル乎ヲ指示セス此レ本條ニ豫備費ノ設テ定ムルヲ必要トスル所以ナリト豫備費ヲ設クルノ必要實ニ伊藤伯ノ說ノ如シトセハ政府ハ豫備金ヲ以テ豫算外ノ支出ニ當テサル可カテサレハ論ヲ俟タズシテ明カナリ

豫算ノ不足ヲ補ヒ又テ豫算外ノ支出ヲ爲ス事ニ付テハ各國ノ憲法ニモ種々ノ規定アリ佛國ノ如キモ古來此點ニ付テ種々ノ規定アリ英國ノ如キハ緊急止ヲ

得サル場合ニ於テ豫算ノ款項ニ超過シ又ハ豫算外ノ支出ヲ必要トスルトキハ政府ハ先ツ相當ノ處分ヲ爲シ後ニ議會ヲ承諾ヲ求ムルコトヲ爲レリ又普魯西ニ於テハ憲法ニ於テ明カニ此事ヲ規定セリ伊太利ニ於テハ帝國憲法第六十四條第二項及ヒ第六十九條ノ規定ノ如ク豫備費ヲ設ケ且ツ之ヲ第一第二ト分チ以テ豫算ノ不足ヲ補ヒ又豫算外ニ生シタル費用ニ應スルコトトセリ

佛國ニ於テハ今日ノ法律(千八百七十九年以來)ニ依レハ豫算ノ不足ヲ補テカ爲メニハ大統領ノ行政命令ニ依リテ之カ支出ヲ爲スコトヲ得但シ後日議會ノ承諾ヲ得サルヘカラサルヤ勿論タリ又豫算外ノ支出ニ付テハ聊カ之ヲ區別セサルヘカラス即チ豫算中ニ全ク議定セザリシ事業ニ關スル支出ニ付テハ大統領ノ行政命令ヲ以テ之カ支出ヲ爲スコトヲ得然レトモ既ニ豫算ニ於テ豫見シタル事業ヲ擴張スル爲メナレトキハ大統領ハ行政命令ニ依リテ之ヲ支出スルコトヲ得ヘシ但シ議會ノ開會中ニ在テハ勿論行政部ニ於テ此等ノ處分ヲ爲スコトヲ得ス是レ今日ノ規定ナリ

然レトモ佛國ニ於テモ千八百十四年ノ憲法ノ下ニ在テハ緊急ノ場合ニハ國王

ノ勅令ニ依リテ無限ノ支出ヲ爲スコトヲ得タリキ(千八百十七年三月二十五日ノ法律其後千八百三十年ノ革命ノ時聊カ改正スル所アリシト雖トモ尙ホ行政部ニ臨時處分ヲ爲スノ權利ヲ保有セリ)千八百三十一年一月二十九日ノ法律第十二條此法律ニ依リ千八百四十年當時ノ總理大臣チエール氏ハ國王ヲシテ緊急勅令ヲ以テ一億五千万圓ノ支出ヲ命セシメタルコトアリ蓋シ同年土耳其問題ニ付キ佛國ト歐洲諸國トノ間ニ葛藤ヲ生セントシタルヲ以テ急ニ軍隊ヲ増シ且ツ巴里ノ城塞ヲ築クカ爲メニ此莫大ナル支出ヲ要シタルナリ但シ幾何モナクチエール氏内閣ヲ退キ總支出ヲ爲スニ至ラスシテ止ミ又其後千八百五十二年奈翁第三世ノ憲法ノ下ニ在テハ勿論行政部ニ於テ自由ニ支出ヲ爲スコトヲ得タリシナリ

之ヲ要スルニ外國ノ例ニ徵スルモ我憲法第六十四條第二項ノ規定ニ似タルモノアリ然レトモ同第七十條ノ如キ規定ハ未ダ曾テ見サル所ナリ蓋シ此第七十條ノ規定モ猶ホ彼ノ第八條ノ緊急命令ニ於ケルカ如ク其適用ノ如何ニ依リテ或ハ有益トナリ或ハ有害トナラン行政ノ局ニ當ル者豈ニ慎ニサルヘケジヤ

豫算不成立

第四 豫算不成立ノ場合

帝國憲法第七十二條ニ曰ク

帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セス又ハ豫算成立ニ至ラサルトキハ政府ハ前年度ノ豫算ヲ施行スベシ

是レ豫算ニ關スル憲法第六十四條ノ原則ニ對シ最モ重大ナル一ノ例外ナリトス歐米諸國ニ於テモ會計年度前ニ豫算ノ成立スルニ至ラサルコトアリ今外國ノ憲法ニ依レハ議會ニ於テ豫算ヲ議定セサルトキハ政務ノ運轉概ネ止マルヲ以テ實際議會ニ於テ豫算ヲ拒絕シ之ヲ議定セサルコト甚々罕ナリト雖モ亦全ク其例ナキニ非ス蓋シ議會ニ於テ豫算ヲ拒絕スルノ狀ヲ呈スルトキハ通常議會ト政府トノ意見相合ハサルヲトスルニ足ル是故ニ内閣ノ更迭ヲ來サシメントノ目的ヲ以テ或ハ豫算ヲ議定セサルコトアリ

英國ニ於テハ千七百八十四年ノ頃當時ノ國王ジョージ三世カ二十四歳ノピットヲ以テ内閣總理大臣ニ任シタルヤ議院ハ此内閣ニ對シテ甚々不滿ヲ抱キ夫ノフオックスノ如キハ反對黨ノ首領トナリ頻リニ豫算拒絕ノ旨ヲ主唱シ爲メ

ニ屢々歳入歳出ノ豫算ヲ議定セズシテ大ニ政府ヲ箝マシメタリ但シ豫算ヲ全ク拒絶スルトキハ實際上政務ノ運轉止マルヲ以テ唯歳入ノ一部分即チ地租ニ關スル部分ノミ之ヲ可決セリ然レトモ諸君ノ知ラル、如ク大宰相畢氏ノ英靈敏腕ナル漸次議會ヲシテ自家ノ說ニ服從セシメ遂ニ相調和シ了リヌ

又議會ニ於テ豫算ヲ拒絶スルノ狀ヲ呈シタル最モ近キ實例ハ佛國是ナリ同國ニ於テハ千八百七十七年マクマオン大將カ大統領タリシ時即チ同年五月十六日議會ヲ解散シ而シテ政府ノ威力ヲ以テ自黨ノ者ヲ撰舉シ更ニ議院ヲ組織シテ憲法ヲ改正シ以テ共和政府ヲ作シ王政復古ヲ試ミントセリ然ルニ同年十月ノ總撰舉ニ於テ解散サレタル前議員カ全ク當撰シタリ而モ當時ノ内閣ハ毫モ之ニ拘ハルコトナク敢テ辭職スルノ狀ヲ呈セザリキ是ニ於テカ議院ニ於テハ既ニ政府ヨリ提出シタル豫算案ニ付キ委員會ノ調査ヲ經テ報告マテ了リタルニモ拘ハラズ之ヲ議事日程ニ登載セス當時豫算委員長ジュルフェーリー氏ノ報告中ニ曰ク責任内閣ノ實舉ヲサル間ハ吾人ハ豫算ヲ議定スルコトヲ欲セスト又當時ガンベツタ氏ハ如キモ國民ノ信任ナキ内閣ノ爲メニ豫算ヲ議定スル

コト能ハスト絶叫セリ此ノ如ク議會ニ於テ若シ内閣辭職セスンハ決シテ豫算ヲ議定セストノ狀ヲ呈シタルヲ以テ遂ニ十月十五日ニ至リ新内閣ヲ組織スルニ至レリ但シ此時ノ如キモ未ダ全ク豫算不成立ニ至ラス唯辭職ヲ脅迫シタルニ止ム

此他議會ニ於テ豫算ヲ議定セザリシ實例尙ホ二三アリ就中有名ナルハ千八百六十二年ヨリ千八百六十六年マテ普魯西ニ於テ政府ト議會トノ意見相合ハサルカ爲メニ政府ハ議會ノ拒絶ニ拘ハラズ原案ヲ施行セシコト是ナリ是レビスマーグカ始メテ宰相ト爲リ當時ノ國王ウヰルヘルム第一世ト一致シテ議會ヲ蹂躪シタル一例ナリ又千八百七十七年ハ豫算病ノ流行ニヤ米國ニ於テモ三ヶ月間陸軍ノ豫算ヲ議定セザリシカ爲メニ大ニ不都合ヲ生シタルコトアリ又同年澳斯特刺利メルホルン議會ニ於テモ其年ノ豫算ヲ拒絶シタリキ

斯ノ如ク豫算ノ不成立ハ專ラ議會ニ於テ或ハ之ヲ議定セス或ハ之ヲ否決スル等ヨリ生シ而シテ議會ニ於テ其或ハ之ヲ議定セス或ハ之ヲ否決スルハ實ニ政府ト議會トノ意見相合ハサルニ因ルト雖モ又其相調和スル場合ニ於テモ尙

本會計年度前ニ豫算ノ成立スルニ至ラサルコト往々之アリ佛國ニ於テハ會計年度ハ毎年一月一日ニ始マリ十二月三十一日ニ終ル故ニ毎年十二月三十一日マテニ必ス翌年度ノ豫算ヲ議了セサルヘカラス然ルニ實際ニ於テハ往々然ルヲ得サルコトアリ現ニ其最モ古キ例ハ千八百十六年ヨリ千八百二十二年マテハ毎年會計年度前ニ豫算ヲ議了スルニ至ラサリキ其後千八百三十一年ヨリ千八百三十三年ニ至ルマテモ亦然リ又最モ近キ例ハ千八百八十四年ヨリ千八百八十八年ニ至ルマテモ同シク會計年度前ニ豫算ヲ議了スルヲ得サリキ是レ皆政府ト議會ト相調和セサリシカ爲メニ非ス全ク他ノ原因ニ由テ然リシナリ右ノ場合ニ於テハ佛國ノ如キハ所謂'Douzieme provisoire'^{ドゥーズィエム プロヴィゾワール}ナル方法ヲ用ニ即チ此方法ハ豫算ヲ議了スルニ至ルマテ假ニ前年度ノ豫算ヲ施行スルニ在リ又英國若クハ白國等ノ如キハ故ラニ當年度ノ豫算ハ其年度内ニ至リテ之ヲ議定スルノ方法ヲ用ニ例ヘハ我明治二十五年年度ノ豫算ハ二十五年四月ニ至リテ豫算案ヲ提出シ其之ヲ議了スルニ至ルマテハ議會ニ於テ假ニ幾分ノ支出ヲ承諾シ後其全体ヲ議定スルニ當リテ之ヲ精算スルモノトス

豫算不成

帝國憲法ニ於テハ前ニ舉示セシカ如ク其第七十一條ヲ以テ帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セス又ハ豫算成立ニ至ラサルトキハ政府ハ前年度ノ豫算ヲ施行スヘシト規定セリ同條ニ所謂豫算ヲ議定セストハ果シテ如何ナル場合ナリヤ余ノ見ル所ニ依レハ帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セストハ政府ヨリ豫算案ヲ提出セルモ議會ニ於テ之ヲ議ニ附セス又ハ議ニ附スルモ故ラニ之ヲ議シ了ラサルカ又ハ之ヲ否決シタル場合等ヲ謂ヒ又豫算成立ニ至ラストハ議會閉會ニ至ルマテ兩院ノ議協ハサルカ爲メニ豫算成立セス又ハ豫算ヲ議了セサル前ニ議會解散セラル、カ又ハ停會セラル、場合等ヲ謂フ然レトモ之ヲ要スルニ立法上豫算ヲ議定セサル場合ト豫算成立ニ至ラサル場合トヲ區別スルノ必要アルヲ見ス如何トナレハ豫算ノ不成立ハ必スシモ豫算ヲ議定セサルニ因リ生スルニ非スト雖モ議會ニ於テ豫算ヲ議定セサルトキハ是レ亦豫算不成立ノ一場合ト謂ハサルヘカラサレハナリ故ニ單ニ豫算不成立ト言ハ、則チ足ル而シテ豫算ヲ議定セサル場合ノ如キハ自ラ其中ニ包含セリ

本條ニ關シ茲ニ最モ至難ナル一問題アリ政府ニ於テ議會ヲ解散シ爲メニ豫算

立ノ場合ニ於テ政府ハ豫算案ヲ提出スルノ義務アリ
府ハ次ノ豫算案ヲ提出スルノ義務アリ
議會ニ於テ豫算案ヲ提出スルノ義務アリ
出スルノ豫算案ヲ提出スルノ義務アリ
ヤ如何

成立ニ至ラサルトキハ政府ハ次ノ議會ニ豫算案ヲ提出スルノ義務アリヤ否ヤノ問題即チ是ナリ此問題ニ付テハ實際ノ決定ヲ見ルノ日蓋シ遠キニ非スト雖モ憲法ノ解釋上須ク研究ヲ要スヘキノ點ナリ諸君モ知ラル、如ク明治二十四年十二月衆議院ヲ解散セラレタリ爲メニ二十五年度ノ豫算ハ成立ニ至ラザリキ政府ハ同年五月ニ召集セラル、所ノ議會ニ此二十五年度ノ豫算ヲ提出セサルヘカラサルヤ是レ此問題ノ實例ナリ此點ニ付テハ二説アリ

第一説ニ依レハ曰ク政府ハ明治二十五年度ノ豫算ヲ其五月ニ召集セラル、議會ニ提出セサルヘカラスト而シテ其論據トスル所ヲ聞クニ曰ク帝國憲法ノ大原則トシテ豫算ハ毎年帝國議會ノ協贊ヲ經サルヘカラス是レ憲法カ國民ニ與フル所ノ一ノ擔保ナリ唯其レ然リ故ニ豫算問題ニ關シテ政府ト議會トノ意見相合ハス竟ニ議會ヲ解散シタルトキハ政府ハ必ス次ノ議會ニ再ヒ此問題ヲ提出スルノ義務アリ若シ憲法ノ精神ニシテ然ラストセハ何故ニ解散後五箇月以内ニ次ノ議會ヲ召集セサルヘカラサルヤ是レ他ナシ前ノ議會ニ於テ政府ト意見ヲ異ニシタル所ヲ次ノ議會ヲシテ其是非ヲ判定セシオンカ爲メノミ果シテ

然ラハ政府ハ必ス次ノ議會ニ再ヒ豫算ヲ提出スルノ義務アルコト勿論ナリト又此説ヲ主張スル論者ノ言ニ依レハ憲法第七十一條ニ於テハ政府ハ前年度ノ豫算ノ全部ヲ施行スヘキヤ將タ其一部分ノミヲ施行スヘキヤノ點ヲ明言セス然レハ第七十一條ノ目的トスル所ハ畢竟歐米諸國ニ於テ豫算不成立ノ場合ニ假支出ヲ許スト同一ノ効用アラシメンカ爲メナリ換言スレハ次ノ議會ニ於テ豫算ヲ議定スルニ至ルマテ假ニ前年度ノ豫算ヲ施行スヘシト謂フニ過キスト

之ヲ要スルニ此第一説ニ依レハ政府ハ次ノ議會ヲ召集スルヤ直チニ豫算ヲ提出スルノ義務アリ而シテ其議會ニ於テ豫算ヲ議定スルニ至ルマテ假ニ前年度ノ豫算ヲ施行スヘシ是レ憲法第七十一條ノ精神ナリト謂フニ在リ

第二説ニ依レハ曰ク憲法第七十一條ハ其義頗ル汎博ニシテ豫算不成立ノ原因ノ如キハ毫モ之ヲ制限セス故ニ其不成立ハ或ハ議會ヲ解散セラレタルニ因ルコトアラン或ハ兩院ノ議協ハサルニ出ツルコトアラン又或ハ會期中ニ議了セサルニ基クコトアラン而シテ議會ヲ解散セラレタルカ爲メニ豫算成立ニ至ラ

サトキハ必ス次ノ議會アルヲ以テ或ハ第一説ノ如ク其議會ニ再ヒ豫算ヲ提出セサルヘカラサルヤノ疑ヲ生シ得ヘキモ其他ノ原因ニ由テ豫算成立ニ至ラサルトキハ再ヒ豫算ヲ提出スヘキ議會アルコトナシ然レハ第七十一條ニ所謂前年度ノ豫算ヲ施行スヘシトハ其豫算ノ全部ヲ施行スルノ意タルヤ明カナリト

右ノ如ク此點ニ付テハ種々ノ議論アリ蓋シ此問題タル極メテ重大ノ問題ナルヲ以テ須ラク深思熟慮スルヲ要ス決シテ輕卒ニ之カ是非ノ判断ヲ下ス可キモノニアラス故ニ余ハ姑ク右二説アルコトヲ示スニ止メ以テ諸君ノ參考ニ供セント欲ス但シ伊藤伯ノ義解ニ依レハ議會ヲ解散セラレタルカ爲メニ豫算成立ニ至ラサル場合ニ於テハ次ノ議會ニ再ヒ豫算ヲ提出セサルヘカラサルモノノ如シ其論ニ曰ク其他議會未タ豫算ヲ議決セスシテ停會又ハ解散ヲ命セラレタルトキハ其再ヒ開會スルノ日ニ至ルマテ亦豫算成立セサルノ場合トス(憲法三頁十ト是ナリ(政府ニ於テハ第二説ヲ採リ豫算不成立ノ場合ニハ全年度ヲ通シ前年ノ豫算ヲ施行スヘキモノトナシ既ニ廿四年度ノ豫算ヲ廿五年度ニ適用スヘキコトヲ公布セリ)

豫算ニ定メタル各項ノ金額ハ彼此流用スルコトヲ得ス

第二ノ議會ノ協賛ヲ經テ確定シタル豫算ハ政府ニ於テ其各項ノ金額ヲ彼此流用スルコトヲ得ス

此原則ニ關シ外國ノ憲法史ヲ閱ルニ今日ニ至ルマテ種々ノ方法ヲ用非來レリ先ニ佛國ノ實例ニ徴スレハ奈翁第一世ノ頃ニ在リテハ一タヒ議會ノ議決ヲ經タル豫算ハ政府ニ於テ隨意ニ之ヲ使用スルコトヲ得タリ此方法ハ行政部ニ取リテハ極メテ便利ナリト雖モ財政整理上ヨリ論スレハ頗ル不可ナルコト言ヲ俟マス其後千八百十四年ノ憲法ノ下ニ在リテハ豫算ハ各省毎ニ之ヲ議定シタリ故ニ各省ハ其省ノ爲メニ議定シタル豫算額内ニ於テハ之ヲ流用スルコト隨意ナリシナリ降テ千八百二十七年ニ至リ此等ノ方法ニ付キ大ニ物議ヲ生シタルヲ以テ豫算ヲ部別ニ各部ニ付テ表決ヲ爲シ以テ其各部内ニ非サレハ之ヲ流用スルコトヲ得ストモリ當時ノ部別ヲ見ルニ其數實ニ九十四部ニ過キス然ルニ其後千八百三十年ノ革命ニ際シ豫算議定方ニ付テモ亦一大改良ヲ加シ此項ヨリシテ豫算ヲ各項ニ區分シ其各項ニ依リ議定スルコトヲ爲レリ此方法ヲ佛語(Specialite par chapitre)ト云フ即チ行政部ニ於テ一項内ノ金額ハ隨意ニ之ヲ流用ス

ルコトヲ得ルモ各項ノ金額ヲ彼此相流用スルコトヲ得サルノ方法ナリ此方法ノ行ハレタレ當時ニ在テハ佛國人豫算ハ之ヲ百五十項ニ區分シ其後千八百四十七年ニ至リテ更ニ之ヲ三百三十八ニ區分セリ降テ奈翁第三世ノ時代ニ至リテモ尙ホ豫算ハ各項ニ依リテ長決スルノ方法ヲ用非タレトモ其各項ヲ相流用スルコトヲ許セリ故ニ各省ノ長官ハ其省ノ豫算定額内ニ在テハ隨意ニ之ヲ使スルコトヲ得タリ然レトモ千八百六十九年即チ奈翁第三世ノ末ニ及テヤ佛國ニ於テ熾ニ自由主義行ハレ再ヒ千八百三十年ニ行ハレタル各項ニ付テ表決スルノ方法ニ復セリ千八百七十一年以降ノ共和政体ノ下ニ在リテモ今日ニ至ルマテ尙ホ此方法ヲ用非來レリ

其レ斯ノ如ク豫算ヲ或ハ各省毎ニ表決シ或ハ其全体ニ付テ議定シ以テ行政部ニ於テ其金額ヲ隨意ニ使用スルコトヲ許スニ於テハ殆ト豫算ナキニ等シト結果ニ至ルヘシ故ニ豫算ハ必スヤ之ヲ巨細ニ區分シ其區分シタル定額ヲ彼此相流用スルコトヲ許サルノ方法ヲ用非サルヘカラス我邦ニ於テハ此點ヲ會計法ヲ以テ規定セリ其第十二條第一項ニ曰ク「國務大臣ハ豫算ニ定メタル目的ヲ

豫算案ハ
前ニ衆議
院ニ提出
ス

外ニ定額ヲ使用シ又ハ各項ノ金額ヲ彼此流用スルコトヲ得スト而シテ合明治二十四年度ノ豫算ニ付テ其項數ヲ閱ルニ經常部ヲ三百六十六項ニ區分シ其總金額ハ六千七百七十八萬五千四百三十二圓ナリ又臨時部ヲ百八項ニ區分シ其總金額ハ九百二十二萬六千八百十九圓餘ナリ此他尙ホ特別歳出豫算ナルモノアリ之ヲ百八十四項ニ區分シ其總金額ハ二千九百九十二萬三千七百九十四圓ナリ是ニ由テ觀レハ我邦ノ豫算ハ巨細ニ區分セラレ而シテ各省ノ長官ニ於テ隨意ニ各項ノ金額ヲ彼此流用スルコトヲ得サルカ故ニ國民ニ對シ大ニ安全ヲ與フルモノト謂ハサルヘカラス

第三、帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セス又ハ豫算成立ニ至ラザルトモハ政府ハ前年度ノ豫算ヲ用ス

此點ニ付テハ便宜上前段第一原則ニ對スル第四ノ例外トシテ既ニ詳述セシヲ以テ復タ贅セス

第四、豫算案ハ先ノ之ヲ衆議院ニ提出ス

豫算案ノ議定ニ關シテハ上下兩院同一ノ權利ヲ有スルヤ如何此點ニ付テハ外

國ノ憲法種々ノ規定アリ且ツ我帝國憲法ノ規定ニ付テモ多少問題ノ生シ得ル所ナリト信スルヲ以テ後段ニ於テ之ヲ論スヘシト雖モ孰シノ國ノ憲法ニ於テモ皆同一ナルハ豫算案ハ先ツ之ヲ下院ニ提出スヘキコト即チ是ナリ我帝國憲法ニ於テハ其第六十五條ヲ以テ之ヲ規定セリ曰ク
豫算ハ前ニ衆議院ニ提出スヘシ

此規定ハ單ニ儀式上ニ止マルカ如シト雖モ其實大ヒニ然ラス豫算ニ關スル實權ヲ下院ニ歸スルト殆ト同一ナリ縱シヤ上下兩院同一ノ權利ヲ有ストスルモ下院ニ於テ最初議定シタル豫算案ヲ上院ニ於テ動カスハ決シテ容易ノ業ニ非ス故ニ最初議定スル所ノ下院ニ取リテハ實ニ莫大ナル權利ト謂フヘシ然ラハ則チ其他ノ點ニ至リテハ如何先ツ我帝國憲法ノ規定ヲ説明スル前茲ニ聊カ外國憲法ノ規定ヲ論究セサルヘカラス或ル國ニ於テハ豫算議定ニ關シ上下兩院全ク同一ノ權利ヲ有セリ伊太利北米合衆國及ヒ瑞典ノ如キ即チ是ナリ伊國上院ハ憲法上ヨリ論スレバ下院ト同一ノ權利ヲ有スレトモ常ニ下院ノ議ニ從フノ慣習アリ然レトモ千八百七十八年ニハ上下兩院間ニ有名ナル葛藤ヲ

生シタリ是ヨリ先ヅ同國ニ於テハ千八百六十八年麥粉ノ製造ニ稅ヲ課シ毎年凡ツ八千三百萬フランノ歲入ヲ與ヘタルニ千八百七十八年ニ至リ下院ニ於テ此稅ヲ廢除スヘキノ議案ヲ提出シ之ヲ可決シテ上院ニ廻附シタルニ上院ニ於テハ之ヲ否決セリ爾來年々歲々上下兩院間常ニ軋轢セシカ其後千八百八十年ニ及ンテ漸ク調和シ遂ニ此稅ヲ廢止スルニ至レリ北米合衆國ニ於テモ豫算議定ニ關シテハ上下兩院同一ノ權利ヲ有スルカ故ニ同國ノ上院ハ屢々其權利ヲ利用シテ下院ノ議決ニ反對シタルコトアリ殊ニ上下兩院ノ關係ニ付テ最モ有名ナル出來事ハ千八百七十七年陸軍ニ關スル豫算問題ニ付テノ件是ナリ同年下院ニ於テ陸軍ノ費用ヲ非常ニ削減シタルヲ以テ上院ハ之ニ同意セス隨テ豫算成立ニ至ラザリシカ爲メ凡ツ三月間程兵士ニ給料ヲ與ヘザリシカ如キ奇觀ヲ呈シタリ
之ニ反シテ或ル國ニ於テハ豫算議定ニ關シ上下兩院ノ權利ヲ相異ニシ上院ノ豫算議定權ヲ非常ニ制限セリ白耳義荷蘭陀普魯西及ヒ英吉利ノ如キ即チ是ナリ先ツ白耳義ニ於テハ上院ハ如何ナル歲出如何ナル租稅ト雖モ新タニ之ヲ議

定スルコトヲ得ズ次ニ荷蘭院ニ於テハ上院ハ下院ニ於テ議決シタル豫算案ノ全体ヲ或ハ可決シ或ハ否決スルノ權利ヲ有スレドモ之ヲ修正スルノ權利ヲ有セス普魯西及ヒ英吉利ニ於ケルモ亦然リ然レトモ英國ニ付テハ少シク説明スヘキモノアリ他ナシ豫算ヲ議定スル點ト財政上ノ法律案ヲ議定スル點トヲ區別セサルベカラサルコト是ナリ實ニ豫算議定ニ付テハ此ノ如ク今日マテノ習慣ニ依レハ上院ハ下院ヨリ移付セル豫算案ノ全体ヲ或ハ可決シ或ハ否決スル權ナラデハ有セスト雖モ財政ニ關スル他ノ法律案ニ至リテハ聊カ其趣ヲ異ニセリ即チ前示白耳義ノ如キハ新稅ヲ課スル法律案ハ先ツ之ヲ下院ニ下付シ其議決アリタル後ニ非サレハ上院ニ之ヲ移付スルコトヲ得ス然ルニ英國ニ於テハ財政上ノ法律案ハ他人議案ト等シク上院ニ於テ之ヲ修正スルノ權利ヲ有セリ

右ノ如ク英國ニ於テハ財政上ノ法律案ニ付テハ他ノ議案ト等シク上下兩院全ク同一ノ權利ヲ有スル所ヨリシテ千八百六十年ニハ實ニ一大葛藤ヲ惹起シタリ此事ニ關シテ財政學上屢援用セラルル實例ナルヲ以テ茲ニ之ヲ一言セシム同年

下院ニ於テ紙稅ヲ廢除シタルニ上院ニ於テハ之ヲ否決セリ此ニ於テカ下院ハ大ニ激昂シテ主張スラク凡ソ財政ニ關スル事ハ人民ヨリ撰舉セラレタル所ノ下院之カ全權ヲ有スヘキモノナリ下院ノ廢除シタル租稅ヲ上院ニ於テ再興スルカ如キハ抑モ越權ナラスヤト爾來殆ト其歸スル所ヲ知ラサリシカ當時ノ大藏大臣タルシグランドストン氏ハ一ノ方策ヲ發見シ遂ニ下院ノ意見ヲ通過セシメタリ其方策ハ他ナシ紙稅廢止案ヲ豫算ニ編入シ豫算ノ條項ヲ以テ紙稅ヲ廢スル旨ヲ附記シ先ツ下院ヲシテ豫算案全体ヲ通過セシメ而シテ後之上院ニ移付セリ然ルニ上院ニ於テハ奈何セシ前述ノ如ク通常ノ豫算案ニ付テハ其全体ヲ可否スルノ二方法ヨリ有セサルヲ以テ固ヨリ紙稅ノ爲メニ豫算案全体ヲ否決スルノ不可ナル事ヲシテ遂ニ下院ノ意見ノ如ク議決セシコト是ナリ蓋シ豫算案中ニ租稅廢止案ヲ編入スルカ如キハ固ヨリ正當ノ手續ニ非ズ然レトモ英國ニ於テハ豫算ハ法律ト同性質ヲ有ストノ説行ハルニ依リ遂ニ斯ノ如クニシテ紙稅ヲ廢止スルニ至リシナリ

上下兩院ノ豫算議定權ニ付テハ佛蘭西ニ於テモ一大問題ヲ惹起セリ佛蘭今日

ノ憲法ニ於テハ財政上ニ關スル議案ハ豫算案タルト他ノ法律案タルトヲ問ハ
 ス先ツ之ヲ下院ニ提出シ其議決ヲ經サルヘカラス此文面ニ依レハ上下兩院議
 權ノ相異ナル所ハ唯前ニ下院ニ提出スルノ一點ノミニ在ルカ如シ然レトモ下
 院ハ其實財政上ノ事ハ下院之カ全權ヲ有ストノ見解ヲ取レリ殊ニ此問題ニ付
 テ近時最モ有名ナルハ余カ未タ佛國ニ在ルノ頃即チ千八百七十七年下院ニ於
 テ大藏省ノ豫算ニ付テ七十萬フラン以上ノ削減ヲ爲シ同時ニ内務省所管郡長
 ノ俸給全額ヲ廢除シ上院ニ於テハ下院ノ決議ニ反對シ二者共ニ政府ノ原案ニ
 同意シ豫算案ヲ再ヒ下院ニ回付シタルニ下院ハ上院ノ議決ヲ以テ憲法違反ナ
 リト主張セシコト是ナリ然レトモ上下兩院ニ於テハ豫算成立ニ至ラサルヲ恐
 レ一ノ調和策ヲ案出シ互ニ相讓與シ大藏省ノ七十萬フランニ付テハ上院下院
 ノ意見ヲ採用シ之ヲ削減スルコトニ決シ郡長ノ俸給ニ付テハ下院上院ノ説ニ
 以從之ヲ再興スルコトニ議決シタリ蓋シ此問題ニ付テハ今日尙ホ上下兩院
 間各其意見ヲ異ニセリ

今ヤ帝國憲法ノ規定ニ付テ聊カ此點ヲ論究セシニ我帝國憲法ニ於テハ前ニ舉

租稅ニ關
 スル法律
 案ハ總テ
 衆議院
 前ニ提出
 セサルヘ
 カラサル
 ヤ

示セシ第六十五條ノ明文ノ外一モ豫算議定權ニ關シ貴族院ト衆議院トノ間ニ
 相異ナリタル所アルヲ見ス而シテ帝國憲法ニ於テ此條ヲ設ケタル理由ハ前回
 既ニ歐米諸國ノ實例ニ就テ説明シタルカ如ク蓋シ租稅ハ國民ヨリ徵收スルモ
 ノナルヲ以テ先ツ其國民カ直接ニ撰出シタル所ノ代議士ヲシテ豫算ヲ議セシ
 ムルノ精神ニ出ツ此事タル一見スル所其權力上ニ甚シキ差ナキカ如シト雖ト
 モ實際ニ在テハ則チ然ラス之ガ爲メニ殆ト豫算議定ノ全權ヲ掌握スト謂フモ
 敢テ過言ニ非サルナリ是レ各國ノ實例又現ニ我帝國議會ノ實況ニ徴シテ明カ
 ナリ故ニ豫算案ヲ前ニ議定スル所ノ衆議院ニ取テハ實ニ一大權利ナリト謂ハ
 サルヘカラス

此點ニ付キ第一ニ起ル問題ハ豫算案ヲ前ニ衆議院ニ提出スルノ理由ニシテ果
 シテ以上陳ヘタルカ如クナリトセハ凡ソ租稅ニ關スル法律案ハ總テ先ツ之ヲ
 衆議院ニ提出セサルヘカラサルヤノ點即チ是ナリ此問題ニ付テハ今日既ニ世上
 ニ多少ノ議論アリ且外國ニ於テモ又屢々議論ノ起リタル所ナリ然リト雖トモ帝
 國憲法ニ於テハ單ニ右第六十五條ノ明文アルノミナルヲ以テ一般ニ租稅ニ關

スル法律案ヲ必ス先ツ衆議院ニ提出セサル可カラサルヲ理由アリト信スルコト能ハス熟ラ帝國議會ニ關スル憲法中ノ各條ヲ通閱スルニ貴族衆議兩院ノ權力ニ付キ毫モ異ナリタル所アルヲ見ス然ラハ則チ租税ニ關スル法律案モ他ノ事項ニ關スル法律案モ等シク是レ一ノ議案タルニ過キス然ルニ議案ハ政府ヨリ提出スルトキハ豫算ヲ除ク外兩議院ノ内其何レヲ先ニスルモ妨ナク(議院法第五十三條)又議案提出權ニ付テハ兩議院各同一ノ權利ヲ有セリ(憲法第三十八條)故ニ貴族院ニ於テモ衆議院ニ於テモ如何ナル法律案ト雖トモ之ヲ提出スルコトヲ得ヘク且帝國憲法中租税ニ關スル法律案ハ貴族院之ヲ提出スルコトヲ得ストノ條文ナキヲ以テ貴族院自ラ此種ノ議案ヲ提出スルコトヲ得ト謂ハサルヘカラス既ニ貴族院ニ於テ自ラ之ヲ提出シ得ヘクシハ政府ヨリ提出スルニ於テモ何レヲ先ニスルモ固ヨリ其隨意ナリト斷定セサルヘカラスナリ

我帝國憲法第六十五條ノ明文ハ前回ニ於テ一言セシ佛國憲法ノ明文ト畧ホ同一ナリ即チ佛國ニ於テモ豫算ハ先ツ之ヲ衆議院ニ提出シ且議定セシムヘシト規定セリ然ルニ佛國ニ於テハ既ニ說明セシカ如ク此規定ニ付テ種々ノ問題ヲ

貴族院ハ
衆議院カ
廢除削減
シタル豫
算ノ款項
ヲ再興ス
ルコトヲ
得ルヤ

惹起シ且帝國憲法ノ解釋上ニ付テモ亦或ハ之ト同様ノ問題ヲ生スルヤモ知ルヘカラス否現ニ世上往々異說ヲ唱フル者アルヲ以テ茲ニ聊カ之ヲ研究セサルヘカラス

先ツ豫算議定權ニ付テ貴族衆議兩院間ニ生シ得ヘキ問題ハ政府ヨリ豫算案ヲ先ツ衆議院ニ提出シ衆議院ニ於テハ自由議定ノ部分ニ關スル歳出ノ款項ニ對シテ廢除削減ヲ行ヒ而シテ後豫算全体ヲ議定シテ之ヲ貴族院ニ移付シタルトキハ貴族院ハ衆議院カ廢除削減シタル款項ヲ再興スルコトヲ得ルヤ如何即チ是ナリ先ツ之ヲ再興スルコトヲ得ストノ說ハ下ノ如ク立論スルコトヲ得ヘシ其レ豫算ハ前ニ衆議院ニ提出セサルヘカラス否唯之ヲ提出スルノミヲ以テ足レリトモ即チ衆議院ニ提出シ且其議決ヲ經ケルヘカラス然ルニ貴族院ニ移付セシ豫算中ニハ衆議院ニ於テ廢除削減シタル款項ヲ記載セス唯其レ然リ故ニ貴族院ニ於テ之ヲ再興スルハ恰モ豫算ノ新費目ヲ設ケルト異ナラス此ノ如キハ是レ憲法第六十五條ノ精神ニ反スルヲ以テ貴族院ハ唯衆議院ヨリ移付セル豫算案中ニ表示サレタル費目ナラテハ之ヲ討議決定スルコトヲ得スト

然リト雖トモ余ノ見ル所ニ依レハ貴族院ハ衆議院ニ於テ廢除削減シタル費目ヲ再興スルコトヲ得ヘシト信ス蓋シ憲法第六十五條ニ豫算ハ前ニ衆議院ニ提出スヘシトアルハ是レ唯豫算全体ニ付テ謂ヘルノミ決シテ豫算ノ款項ニ付テ貴族院ハ之ヲ修正スルノ權利ナキコトヲ示シタルニ非ス議院法第二十九條ニ依レハ貴族院衆議院共ニ等シク凡テノ議案ニ對シテ之カ修正權ヲ有セリ果シテ然ラハ貴族院ハ豫算案ニ對シテモ亦之カ修正權ヲ有セリト謂ハサルヘカラス然レハ貴族院ニ於テ衆議院ヨリ移付セル豫算案ニ付キ其款項ニ表示サレサル費目ト雖トモ之ヲ一ノ修正案トシテ提出スルトキハ之ヲ以テ敢テ越權ノ所爲ト謂フヘカラス故ニ政府ヨリ提出スル所ノ豫算案ニ對シ衆議院ニ於テ廢除削減ヲ行ヒ更ニ貴族院ニ於テ原案ノ如ク修正ヲ加フルモ毫モ妨ケアルコトナシ

次ニ斯ノ如ク政府ヨリ提出セル豫算案ニ對シ衆議院ニ於テ廢除削減ヲ行ヒタル後之ヲ貴族院ニ移付シ貴族院ニ於テ更ニ原案ノ如クニ修正シタル豫算案ハ之ヲ如何スヘキヤ曰ク如何ナル議案ト雖トモ貴族衆議兩院ノ議決ヲ經ルニ

非サレハ成立セス故ニ此場合ニ於テハ豫算案ヲ再ヒ衆議院ニ回付シ衆議院若シ貴族院ノ議決ニ同意スレハ此ニ豫算ノ議定結了スヘク之レニ反シテ其議合ハサルトキハ先ツ協議會ヲ開キ以テ双方意見ノ合同センコトヲ努メサルヘカラス而シテ協議會尙ホ以テ調和セサルトキハ縱令ヒ如何ナル些細ノ點ニ付テ然ルニモセヨ其豫算ハ成立スルコトヲ得ス是レ豫算不成立ノ一場合ト謂フヘシ

尙ホ豫算議定權ニ關シ貴族院ト衆議院トノ關係ニ付テ起リ得ヘキ問題ハ憲法第六十七條ノ歲出ニ付テノ點是ナリ今其レ此種ノ歲出ニ付テ衆議院ヨリ政府ニ廢除削減ヲ請求シ政府ハ之ニ同意ヲ與ヘサリシト假定セヨ此場合ニ於テ衆議院若シ政府ノ同意ナキニモ拘ハラズ豫算全体ヲ可決シテ之ヲ貴族院ニ移付セシトキハ貴族院ニ於テハ右第六十七條ノ歲出ニ付テハ政府案ヲ以テ豫算ノ原案ト看做サ、ルヘカラス何トナレハ縱令ヒ衆議院ニ於テ廢除削減ノ意ヲ示シタルニモセヨ政府カ之ニ同意セサル間ハ廢除削減ノ修正案ハ未タ成立スルヲ得サレハナリ

衆議院ニ於テ豫算案全体ヲ可決シ之ヲ貴族院ニ移付セントキハ即チ斯ノ如シ然レトモ今若シ憲法第六十七條ノ歳出ニ付キ議院ニ於テハ政府ノ不同意ニモ拘ハラズ其廢除削減シタル豫算案ヲ貴族院ニ移付セントキハ如何(衆議院ハ此ノ如キ議案ヲ貴族院ニ移付スルノ權利ナキモ議長及ヒ多數議員ノ意見ニ因リ之ヲ移付シタリト假定ト)此場合ニ於テ貴族院ハ如何ナル權利アルヤ抑モ亦如何ナル處置ヲ爲スヘキヤ余ノ見ル所ニ依レハ貴族院ハ此ノ如キ議案ハ之ヲ受理スヘキノ限リニ在ラスト信ス蓋シ貴族院ハ衆議院ニ於テ正當ノ手續ヲ經テ議了シタル議案ニ非サレハ之ヲ受理スルノ義務ナシ然ルニ右第六十七條ノ歳出ニ付キ政府ノ同意ナクシテ廢除削減ヲ行ヒタル豫算案ノ如キハ是レ實ニ同條ノ末文ニ違反スルモノナリ違憲ノ議決ニ因テ成立シタル議案ナリ貴族院豈ニ之ヲ受理スルノ要アラシヤ故ニ此ノ如キ議案ハ之ヲ衆議院ニ返戻スヘキモノト斷定セサルヘカラス

豫算ノ性質

立憲諸國ノ實例ニ徴シテ觀察スルニ豫算ノ性質ニ付テハ殆ト議論ナシト謂フ

豫算ノ性質

モ可ナリ即チ英米佛伊獨埃白蘭等其他諸立憲國ノ憲法法律又ハ慣例ニ付テ看ルニ孰レモ豫算ハ法律ヲ以テ之ヲ規定スルコトト爲セリ唯近時ニ至リテ獨逸ノ學者中豫算ノ性質ニ付テ種々ノ說ヲ唱フルモノアリ其說ノ如何ハ國家學會雜誌ニ登載セラル、穂積八束君ノ「豫算ノ法理」ト題スル論文ヲ一讀スレハ略ホ其大意ヲ了解シ得ヘシ然レトモ今ヤ我帝國憲法ノ下ニ在テハ此問題ヲ如何ニ決定スヘキヤ今日普通一般ニ行ハル、所ノ說ニ依レハ曰ク豫算ハ法律ノ性質ヲ有スルモノニアラスト惟フニ此說タル伊藤伯ノ憲法義解ニ起因スルモノナラン今同伯ノ論ヲ見ルニ豫算ヲ以テ法律ニ非スト爲サレタル理由ハ左ノ二点ニ在ルカ如シ(憲法義解百十頁五頁百十六頁)

第一 豫算ハ單ニ一年ニ向テ行政官ノ遵守スヘキ準繩ヲ定ムル者ナルニ過キス故ニ豫算ハ特別ノ性質ニ因リ議會ノ協賛ヲ要スル者ニシテ本然ノ法律ニ非サルナリ

第二 議會ノ承諾ヲ經ルモ其ノ特別ノ一事ニ限リ普通ニ遵守セシムルノ條則ニ非サル者ハ固ヨリ法律ト其性質ヲ殊ニス

余ノ見ル所ニ依レハ若シ果シテ右二個ノ理由ニ過キサラシカ豫算ハ以テ法律ニ非スト謂フコトヲ得ス蓋シ豫算ハ法律ノ性質ヲ有スルヤ否ヤヲ判定センニハ須ラク法律トハ果シテ如何ナルモノナルヤ、法律ハ如何ナル條件ヲ具備スルコトヲ要スルヤ、何ヲ以テ法律ト否トヲ區別スヘキヤ等ノ諸點ヲ研究サルヘカラス

惟フニ帝國憲法ニ於テハ未ク法律ノ定義ヲ下シタル條文アルコトナシ然レトモ今若シ帝國憲法ノ彼此ノ條文ヲ對照シ如何ナルモノヲ以テ法律ト看做シタルヤヲ研究スルニ第一法律ヲ以テ規定スヘキ事項ハ毫モ之ヲ制限セサルナリ伊藤伯モ亦曰ヘリ「法律及ヒ命令ノ區域ハ専ラ各國政治發達ノ程度ニ從フ而シテ唯憲法史以テ之ヲ論斷スヘキノミ但シ憲法ノ明文ニ依リ特ニ法律ヲ要スル者ハ之ヲ第一ノ境界トシ既ニ法律ヲ以テ制定シタル者ハ法律ニ非サレハ之ヲ變更スルコトヲ得サルハ之ヲ第二ノ境界トス此レ乃立憲各國ノ同キ所ナリ」(法義解六)ト第二法律ノ支配ヲ受クヘキ人ニ付テモ亦之ヲ制限セス即チ人民一般ニ下ス所ノ命令ハ法律ニシテ單ニ行政官ニ下ス所ノ命令ハ法律ニ非スト云々

ルカ如キ區別アルコトナシ第三法律ノ有効期限ニ付テモ亦法律ト否トニ因テ制限ヲ設ケス即チ君主ノ命令ニシテ永久ニ効力ヲ有スルモノハ法律ニシテ其期限アルモノハ法律ニ非スト云ヘルカ如キ區別アルコトナシ論シテ此ニ至レハ豫算ハ單ニ一年ニ向テ行政官ノ遵守スヘキ準繩ヲ定ムル者ナルニ過キサルヲ以テ法律ニ非ストノ理由成立スルヲ得サルナリ
又特別ノ一事ニ限り普通ニ遵由セシムルノ條則ニ非サル者ハ固ヨリ法律ト其性質ヲ殊ニスト云ヘル理由ニ至リテモ亦甚ク肯諾シ難シ實ニ豫算ハ特別ノ一事ニ限レリ而モ行政官ハ之ニ遵由セサルヘカラス即チ純然タル命令ノ性質ヲ有セリ若シ其レ伊藤伯ノ此論據ニシテ其當ヲ得タルモノトセンカ曩キニ公布セラレタル會計法補則(明治二十三年八月二日法律第五十七號)ノ如キハ法律ニ非スト謂ハサルヲ得ス其第一條ニ曰ク「明治二十三年度歳出豫算中左ノ費用ハ明治二十四年度ノ豫算ニ於テ憲法第六十七條ニ規定シタル大權ニ基ケル既定ノ歳出トス云々」ト是レ實ニ一年限ノ事項ヲ目的ト爲シタルモノナリ而モ尙ホ法律ノ性質ヲ有セルコト勿論ナリ

之ヲ要スルニ我帝國憲法ニ於テハ法律ヲ以テ規定スヘキ事項其支配ヲ受クヘキ人其効力ノ及フヘキ時期等ニ付テ毫セ制限ヲ設ケス故ニ如何ナル事項ニ付キ如何ナル人ニ對シ如何ナル時期ニ關シテモ凡テ法律ヲ以テ規定スルコトヲ得ヘシ然ラハ則チ法律トハ抑モ何ツヤ余ノ見ル所ニ依レハ曰ク

法律トハ 天皇陛下カ帝國議會ノ協贊ヲ經テ下シ給フ所ノ命令ナリ

若シ此定義ニシテ誤リナクハ豫算ハ實ニ法律ノ性質ヲ有スト斷定セサルヘカラス何トナレハ豫算ハ君主カ議會ノ協贊ヲ經テ行政官ニ對シ下ス所ノ命令ナレハナリ

蓋シ豫算ニ歳入歳出ノ二部アリ而シテ歳入ノ部ニ付テハ憲法第六十三條ノ規定アルヲ以テ命令ノ性質ヲ有スルコト稍々薄弱ナリト謂フヘシ何トナレハ租稅ハ豫算ニ因テ徵收スルニ非スシテ既定ノ法令ニ因テ徵收スルモノナレハナリ然レトモ歳入部未タ必スシモ命令ノ性質ヲ有セスト謂フヘカラス例ヘハ豫算ノ條項ヲ以テ毎年大藏省カ發行シ得ヘキ證券ノ額ヲ限定スル如キハ純然タル命令ノ性質ヲ有スルモノトス更ニ歳出ノ部ニ至リテハ豫算ノ命令ノ性質ヲ

有スルコト毫モ疑ヲ容レズ即チ行政官ハ豫算ニ定メアル金額ヲ超過スルコトヲ得ス又豫算外ノ支出ヲ爲スコトヲ得サルナリ但シ憲法第六十四條第二項ノ規定アレトモ此點ニ付テハ既ニ詳述セシ所ナルヲ以テ亦贅セス

是ニ由テ之ヲ觀レハ豫算ハ實ニ 天皇陛下カ帝國議會ノ協贊ヲ經テ行政官ニ對シ下シ給フ所ノ命令ナリト謂ハサルヘカラス是レ余カ豫算ハ法律ノ性質ヲ有スト斷定スル所以ナリ彼ノ伊藤伯ノ說ノ如キハ豫算ハ法律ニ非スト云フモ然ラハ其性質如何純然タル行政命令ナリヤ否ヤヲ論究セス或ル論者ノ如キハ豫算ハ豫算ナル特別ノ行爲ナリト云フモ是レ固ヨリ取ルニ足ラス否問題ヲ決スルニ足ラサルナリ蓋シ豫算ハ法律ナルモ特別ノ性質ヲ有スルカ故ニ通常ノ法律トハ多少相異ナル所アリ而モ之カ爲メニ法律ニ非スト斷定スルカ如キハ大早計タルノ譏ヲ免ル、能ハサルナリ

終リニ臨ンテ尙ホ一言スヘキモノアリ此問題ノ利益如何是ナリ是レ單ニ法律變更ノ一點ニ在リ換言スレハ豫算ヲ以テ既ニ存在セル法律ヲ變更スルコトヲ得ルト否トニ在リ而シテ余ノ見ル所ニ依レハ實ニ豫算ハ法律ノ性質ヲ有ス隨

テ豫算ヲ以テ既ニ存在セル法律ヲ變更スルコトアルモ敢テ不當ニ非スト信ス
 前ニモ述ヘタル如ク英國ニ於テハ有名ナル一例アリ即チ千八百六十年豫算案
 中ニ紙稅廢止ノ條項ヲ掲ケ之ヲ通過セシメタルコト即チ是レナリ又佛國ニ於
 テモ往々豫算ヲ以テ法律ヲ變更スルコトアリ
 然レトモ豫算ヲ以テ法律ヲ變更スルノ可否如何ニ至リテハ大ニ論議スヘキモ
 ノアリ而シテ余ハ之ヲ以テ不可ナリト斷言セントス蓋シ一ノ法律ヲ制定スル
 ニハ十分ニ其利弊得喪ヲ考究セサルヘカラス然ルニ豫算ヲ議定スルニ當リテ
 法律ヲ變更ルカ如キハ到底完全ナル結果ヲ見ルヘカラス何トナレハ此ノ如
 キ場合ニ於テハ往々法律其物ノ善惡利害ヲ研究スルノ遑ナク單ニ歲出減少ノ
 理由ニ因リ之ヲ變更スルニ至ルコトアレハナリ
 以上豫算ノ事ヲ略述シ了レリ尙ホ茲ニ一言スヘキハ憲法第六章會計ノ事ニ關
 スル第六十二條及ヒ第六十三條ノ規定即チ是ナリ其第六十二條ニ曰ク
 新ニ租稅ヲ課シ及ヒ稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ
 但シ報償ニ屬スル行政上ノ手数料及ヒ其他ハ收納金ハ前項ノ限リニ在ラス

本條中第一項及ヒ第三項ニ付テハ敢テ論辯スヘキモノナシ唯其第二項ニ至リ
 テハ聊カ問題ノ生シ得ヘキ規定ナリト信ス所謂報償ニ屬スル行政上ノ手数料
 トハ果シテ如何ナル性質ノモノナリヤ今伊藤伯ノ義解ニ依レハ曰ク報償ニ屬
 スル行政上ノ手数料及ヒ其他ノ收納金トハ各個人ノ要求ニ由リ又ハ各個人ニ
 利益ヲ予フル爲ノ政府ノ事業又ハ事務ニ對シ上納セシムル者ニシテ普通ノ義
 務トシテ賦課スル所ノ租稅ト其性質ヲ殊ニスル者ヲ謂フ(憲法義解 百七頁)ト此定義ニ
 依レハ國有鐵道ノ切符料官立學校ノ授業料ノ如キハ即チ行政上ノ手数料タル
 ヤ明カナリ

國債ヲ起シ及ヒ豫算ニ定ムタルモノヲ除ク外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ
 爲スハ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘシ
 本條中第一項及ヒ第三項ニ付テハ敢テ論辯スヘキモノナシ唯其第二項ニ至リ
 テハ聊カ問題ノ生シ得ヘキ規定ナリト信ス所謂報償ニ屬スル行政上ノ手数料
 トハ果シテ如何ナル性質ノモノナリヤ今伊藤伯ノ義解ニ依レハ曰ク報償ニ屬
 スル行政上ノ手数料及ヒ其他ノ收納金トハ各個人ノ要求ニ由リ又ハ各個人ニ
 利益ヲ予フル爲ノ政府ノ事業又ハ事務ニ對シ上納セシムル者ニシテ普通ノ義
 務トシテ賦課スル所ノ租稅ト其性質ヲ殊ニスル者ヲ謂フ(憲法義解 百七頁)ト此定義ニ
 依レハ國有鐵道ノ切符料官立學校ノ授業料ノ如キハ即チ行政上ノ手数料タル
 ヤ明カナリ
 唯茲ニ一ノ疑點ノ存スルハ郵便料是ナリ佛國及ヒ英國等ノ例ニ依レハ之ヲ以
 テ一種ノ租稅ト看做セリ蓋シ郵便事務ハ猶ホ警察裁判其他ノ事務ニ於ケルカ
 如ク國家ノ事ニ屬スレハナリ而シテ我邦ニ於テハ右第六十二條第二項ノ規
 定アル以上ハ郵便料ノ如キモ亦行政上ノ手数料ナリト謂ハサルヲ得ス何トナ

レハ彼ノ國有鐵道ノ切符料又ハ官立學校ノ授業料等ト毫モ其性質ヲ異ニセサレハナリ故ニ是レ亦敢テ帝國議會ノ協贊ヲ經ルヲ要セサルベシ(憲法ノ解釋上ヨリ之ヲ論スルトキハ郵便料ハ行政上ノ手数料ノ性質ヲ有スト雖トモ郵便ノ事ヲ規定スル最近ノ命令ハ法律トシテ公布シアルヲ以テ(明治廿二年ノ法律郵便料ノ改正ハ法律ヲ以テ之ヲ行ハサル可カラサルモノ、如シ)

憲法第六十三條ニ曰ク

現行ノ租稅ハ更ニ法律ヲ以テ之ヲ改メサル限リハ舊ニ依リ之ヲ徵收ス

本條ノ規定ハ今日一般歐米各國ニ行ハル、原則トハ稍々相異ナル所アリ英佛白及ヒ北米合衆國等ニ於テハ租稅徵收權ハ豫算ノ議定ニ因テ定マル故ニ豫算ヲ議定セサル間ハ租稅ヲ徵收スルコトヲ得ス然リト雖トモ更ニ實際ノ狀況ヲ觀察スレハ是レ殆ト有名無實ノ規定ニ屬スルカ如シ法律ヲ以テ既ニ定マレル所ノ租稅ハ豫算ノ議定如何ニ拘ハラズ之ヲ徵收シ得ヘキモノトスルハ決シテ不當ノ業ニ非サルナリ蓋シ帝國憲法ハ此實例ト此理由トニ因テ右第六十三條ノ規定ヲ設ケタルモノナルヘシ

政務監督權

第三款 政務監督權

議會ノ職權中重要ナルモノハ法律案議定權、豫算案議定權及ヒ政務監督權ノ三ナリトハ是レ本節ノ劈頭ニ於テ述ヘタル所ナリ而シテ法律案議定權及ヒ豫算案議定權ノ事ニ付テハ上來既ニ之ヲ講了ヒシヲ以テ今ヨリ第三ノ權利即チ政務監督權ノ事ニ論及セントス

現今代議政体ノ行ハレツ、アル國ニ於テ議會カ豫算案ヲ議定スルニ當リ政府ヲ監督スルノ外ニ最モ有力ナル監督權ハ第一種々ノ事件ニ付テ調査ヲ命スルノ權第二、政府ニ質問スルノ權第三、國務大臣ヲ彈劾スルノ權即チ是ナリ此三者ハ實ニ政府ヲ監督スルニ最モ有力ナル權利ト謂フヘシ請フ以下逐次之ヲ論究セン

第一 調査權

茲ニ所謂調査權トハ議會ニ於テ或ハ法律案ヲ提出スル前ニ委員ヲ命シ以テ種々ノ調査ヲ爲サシメ或ハ内外政治上ノ事項ニ關シテ調査ヲ爲サシムル等ノ權

利是ナリ此權利ハ各國多少ノ異同ナキニ非サレトモ大抵何レノ國ノ議會ニモ皆屬スル所ノモノナリ殊ニ佛國ノ如キハ千七百八十九年即チ大革命以降今日ニ至ルマテ常ニ議會ニ於テ調査權ヲ實行シ來レリ

佛國ニ於テ最モ著名ナル二三ノ例ヲ舉クレハ千八百四十八年ニルウ非、ヒ非リツプノ王政ヲ顛覆シタル事實ニ付テ調査ヲ命シタルコト、千八百七十一年三月十八日ノ事件即チ夫ノ社會黨ノ爭亂ニ關シテ調査ヲ命シタルコト及ヒ千八百七十一年奈翁第三世顛覆ノ後共和政府ノ確立スルニ至ルマテ一時政權ヲ掌握セシ「グーヴェルヌマン」ド、ラ、デツフアンズ、ナシオナル「國防政府」ノ行爲ニ付調査ヲ命シタルコト等はナリ此他法律ヲ制定スルニ付テ種々有名ナル實例アレトモ今之ヲ略ス

白耳義ニ於テハ憲法ヲ以テ議會ニ調査權アルコトヲ認メ且ツ千八百八十年五月三日ノ法律ヲ以テ議會ノ調査委員ニ裁判官ト畧ホ同一ノ權利ヲ與ヘタリ即チ調査委員ノ面前ニ召喚セラル、證人ハ恰モ裁判所ニ呼出サレタルトキノ如キ義務ヲ負ヒ且ツ特權ヲ有スルコト是レナリ

英國ニ於テモ亦此調査權ヲ認メ且ツ或ル場合ニ於テハ議院ヨリ裁判官ニ委任シテ調査ヲ爲サシムルコトアリ現ニ千八百八十年ノ選舉ノ際ニハ種々言フヘカラサル腐敗手段ヲ用非タルヲ以テ其事實ヲ調査センカ爲メニ裁判官ニ之ヲ委任シタリ而シテ此調査ノ結果トシテ或ル選舉區ノ如キハ代議士ヲ選出スルノ權利ヲ失ヒタリキ

瑞典ニ於テハ調査權ヨリモ尙ホ一層強大ナル權利ヲ議會ニ與ヘタリ他ナシ同國ノ憲法ニ依レハ議會ニ特別ノ檢察官ヲ置キ以テ或ハ行政官ノ行爲ヲ監督シ時々議會ニ報告ヲ爲シ或ハ裁判官ノ行爲ニ付テ調査ヲ爲シ而シテ若シ不法ノ處分アルトキハ公訴ヲ起スコトヲ得ヘク又國務大臣ニ憲法違反ノ行爲アルトキハ之ニ對シテ公訴ヲ起スコトヲ得ヘキカ如キ是ナリ

今ヤ我帝國憲法ニ於テハ如何ニ之ヲ規定セシヤ曰ク憲法中ニハ調査權ニ關シ明確ナル規定アルヲ見ス然レトモ議院法第十四章ニ於テ聊シ規定セル所アリ其第七十二條ニ曰ク「各議院ハ人民ニ向テ告示ヲ發スルコトヲ得スト同第七十三條ニ曰ク「各議院ハ審査ノ爲メニ人民ヲ召喚シ及ヒ議員ヲ派出スルコトヲ得

ス「同第七十四條ニ曰ク各議院ヨリ審査ノ爲メニ政府ニ向テ必要ナル報告又ハ文書ヲ求ムルトキハ政府ハ秘密ニ涉ルモノヲ除ク外其求ニ應スヘシ」ト同第七十五條ニ曰ク各議院ハ國務大臣及ヒ政府委員ノ外他ノ官廳及ヒ地方議會ニ向テ照會往復スルコトヲ得スト即チ是ナリ

右議院法ノ規定ヲ吟味スルトキハ議會ハ果シテ調査權ヲ有スルヤ否ヤノ點ニ付キ聊カ疑ナキニ非スト雖モ余ノ見ル所ニ依レハ我議院法ハ帝國議會ニ調査權アルコトヲ認メ且ツ之ト同時ニ多少ノ制限ヲ附シタルモノト斷定セサルヲ得ス而シテ余カ議會ニ調査權アリト信スル所以ノモノハ第七十四條ノ規定是ナリ本條ニ依レハ審査ノ事項及ヒ其目的ニ付テハ毫モ制限スル所ナレ爾レハ議會ニ於テハ如何ナル事項ニ關シテモ又如何ナル目的ニ出ツルモ之カ審査ヲ爲スノ權利アリト謂ハサルヘカラス若シ然ラス議會ニ萬般ノ事項ニ付テ審査ヲ爲スノ權利ナクンハ奚ソ政府ハ議會ノ請求ニ應スルノ義務アラシヤ然ルニ本條ハ明白ニ政府ニ此義務アルコトヲ認メタリ是ヲ以テ我帝國議會ハ種々ノ事項ニ關シテ調査權ヲ有スルヤ實ニ爭フヘカラサル所ナリト謂フヘシ

唯其レ帝國議會ノ有スル調査權ト他國ニ於ケル調査權ト較ヤ異ナル所ハ右第七十三條及ヒ第七十五條ノ規定即チ是ナリ佛國其他ノ國ニ於テハ議會ニ十分ノ調査權ヲ與ヘタリ故ニ議會ノ調査委員ハ或ハ國務大臣ヲ召喚シテ説明セシムルコトヲ得ヘク或ハ政府委員ヲ呼出シ又ハ其他ノ官吏ノ出頭ヲ請求シテ調査スルコトヲ得ヘシ又或ハ人民ヲ召喚スルコトヲ得ヘク又議員ヲ派出シ實地ニ就テ調査スルコトヲ得ヘシ然ルニ我議院法ハ之ヲ許サ、ルナリ(第七十三條又帝國議會ハ國務大臣及ヒ政府委員ト照會往復スルコトヲ得ヘキモ他ノ官廳及ヒ地方議會ニ向テハ之ヲ許サス(第七十五條)是レ外國ト聊カ異ナル所ナリ之ヲ要スルニ我議院法ノ規定ニ依レハ帝國議會カ調査權ヲ有スルノ點ニ至リテハ敢テ疑ヲ容レス唯其權利ヲ實行スルニ當リテ多少ノ制限アリト謂ハシノミ而シテ余ノ記憶スル所ニ依レハ今日マテ未タ此點ニ付テノ先例アラス然レトモ一タヒ此問題ノ起ルニ至ラハ帝國議會ハ無論調査委員ヲ命スルノ權利アリト斷定セサルヲ得ス

質問權

第二 質問權

質問權ニ關シテモ亦憲法中ニ其規定ナク之ヲ議院法第十章第四十八條乃至第五十條ニ讓レリ惟フニ議會ニ質問權ヲ附與シタルハ實ニ自由政体ノ精神ニ適合シタルモノト謂ハサルヘカラス今之ヲ佛國ノ實例ニ徵スルニ千八百十四年ノ欽定憲法時代ニ在テハ議會ニ質問權ヲ認メス其後千八百三十年ノ革命ニ當リテ之ヲ許シ又千八百四十八年ノ共和政府時代ニモ之ヲ許セリ降テ奈翁第三世ノ時代ニ於テハ再ヒ此權利ヲ剝奪シ其末世即チ千八百六十七年ニ至リテ之ヲ回復シタリキ蓋シ奈翁三世ノ時代即チ千八百五十二年ヨリ千八百六十二年頃ニ至ルマテハ非常ニ專制主義行ハレタレトモ其後漸ク自由主義國民中ニ行ハレ千八百六十七八年頃ニ及シテ政府ニ於テモ輿論ノ勢力ニ抗敵シ難ク爲メニ種々自由主義ノ法律ヲ設クルニ至レリ議會ニ質問權ヲ回復シタルカ如キモ亦々其精神ヨリ出ツ但シ本邦ノ質問權トハ聊カ異ナル所ナキニ在ラス

質問ニ得
ヘキ事項

第一問 議會ハ質問ニ付キ如何ナル權利ヲ有スルヤ換言セハ議會ハ如何ナル事項ニ付テモ政府ニ對シテ質問スルコトヲ得ルヤ

此點ニ付テハ殆ト疑アルコトナシ即チ議院法第十章ノ規定ニ依レハ毫モ制限スル所ナキカ故ニ議會ハ如何ナル事項ニ付テモ質問スルコトヲ得ヘシ唯其之ヲ質問スルニ付テハ第四十八條ノ規定ニ從ヒ必ス三十人以上ノ贊成者アルヲ要シ又質問手續ハ簡明ナル主意書ヲ作り贊成者ト共ニ連署シテ之ヲ議長ニ提出スル等此他尙ホ詳細ノ事ハ各議院規則ニアリ就テ看ラレヨ

質問ニ對
スル政府
ノ權利義
務如何

第二問 政府ハ議會ノ質問ニ對シテ如何ナル權利如何ナル義務アリヤ此點ニ付テハ議院法第四十九條ニ規定セリ曰ク「質問主意書ハ議長之ヲ政府ニ轉送シ國務大臣ハ直チニ答辯ヲ爲シ又ハ答辯スヘキ期日ヲ定メ若シ答辯ヲ爲サハルトキハ其理由ヲ明示スヘシト故ニ各議院ノ議員ヨリ政府ニ對シテ質問シタルトキハ政府ハ相當ノ答辯セサル理由ナキ限ハ之ニ答辯スルノ義務アリ徒々答辯スルヲ欲セサルノ故ヲ以テ之ヲ拒絕スルコトヲ得ス何トナレハ本條ニ依リ必ス其理由ヲ明示スルヲ要スレハナリ但シ答辯セサル理由ノ當否ヲ判定スルノ權利ハ尙ホ政府ニアルヲ以テ此條件ハ殆ト有名無實ナルカ如シ然リト雖モ議院法ニ於テ既ニ其理由ヲ明示スヘシトアル以上ハ政府ニ於テモ眞ニ

理由ナクシテ漫リニ答辯ヲ拒絕スルカ如キコト勿ルヘシテ若シ斯ノ如キコトアラシニハ議院ハ仍ホ他ノ點ヲ以テ質問ヲ試ムヘク且ツ輿論ノ攻撃アルヘキヲ以テ此規定ハ大ニ議會ニ權力ヲ與ヘタルモノト謂ハサルヘカラス

答辯ノ方
法如何

第三問 國務大臣ハ自ラ議院ニ出テ、答辯ヒサルヘカラサルヤ將タ書面ヲ以テ答辯スルモ可ナルヤ

此點ニ付テハ唯議院法第四十九條ニ質問主意書ハ議長之ヲ政府ニ轉送シ國務大臣ハ直ニ答辯ヲ爲シ又ハ答辯スヘキ期日ヲ定メ若シ答辯ヲ爲サ、ルトキハ其理由ヲ明示スヘシトアルノミニシテ國務大臣ハ必ス口頭ヲ以テ答辯セサルヘカラサルヤ將タ書面ヲ以スルモ可ナルヤノ明文アルコトナシ然ルニ第一期ノ議會ニ於テハ既ニ此問題生シ一二ノ先例ヲ貽セリ東京府選出議員高梨哲四郎氏ヨリ尾去澤鐵山事件ニ關シテ農商務大臣ニ質問セシニ農商務大臣ハ文書ヲ以テ之ニ答辯セラレタリ是ニ於テカ氏ハ更ニ議院ニ出席シテ明答アラシトヲ請求スヘシトノ動議ヲ提出シ又之ト同時ニ福岡縣選出議員末松謙澄氏ヨリ議院法第四十八條ニ依リ提出スル議員ノ質問ニ對シ書面ヲ以テ答辯スルハ

當議院ノ取ラサル所ナリトノ動議ヲ提出セラレタリ然ルニ議院ニ於テハ第一ノ動議即チ高梨氏ノ動議ニ付テハ之ヲ可決シテ更ニ農商務大臣ニ議院ニ出席シテ辯明アラシトヲ請求シ而シテ第二ノ動議ニ至リテハ之ヲ不用ナリトシ終ニ決ヲ採ラスシテ動議提出者末松氏ヨリ之ヲ撤回セリ

右ノ先例ニ依レハ我衆議院ニ於テハ口頭ヲ以テ答辯スルモ將タ文書ヲ以テ答辯スルモノニ國務大臣ノ自由ナリトノ說ヲ取リタルモノ、如シ然レトモ余ノ見ル所ニ依レハ實ニ議院法第四十九條ニハ此點ニ付テ明言スル所ナキモ外國ノ實例及ヒ我議院法ノ精神ヨリ論スルトキハ國務大臣ハ必ス議院ニ出席シテ答辯スルノ義務アルモノ、如シ蓋シ質問ノ趣旨トスル所ハ或ル點ニ關シ國務大臣ヨリ充分ノ説明ヲ得ント欲スルニ在リ然ルニ國務大臣カ議院ニ出席シテ答辯セサルトキハ或ハ答辯ノ意ヲ盡クス能ハス質問者モ其意ヲ了解スル能ハサルコトアラシ此時ニ於テ更ニ反覆質問書ヲ提出スルコトヲ得サルニ非スト雖モ斯ノ如クシハ種々ノ手續ヲ履行スルコトヲ要シ徒ラニ手數ヲ煩ハサ、ルヘカラス是故ニ每次國務大臣自ラ議院ニ出席シテ十分ノ答辯ヲ爲スコトハ極メ

善良ナル方法ナリト信ス殊ニ歐米各國ニ於テハ未タ文書ヲ以テ答辯スルノ例アルヲ聞カサルナリ

政府ノ答辯ニ對スル議院ノ權利如何

第四問 政府カ議院ノ質問ニ對シテ答辯ヲ爲シ又ハ答辯ヲ爲サル場合ニ於テ議院ハ其答辯ニ付キ又ハ答辯セサル事實ニ付テ政府ニ對シ信任不信任ノ動議ヲ起シテ之ヲ討議シ表決スルノ權利アリヤ如何

此點ニ付テハ憲法及ヒ議院法ニ明文ナク唯衆議院規則第四百二十二條ニ質問ニ對スル答辯若クハ答辯ヲ爲サル理由ニ付キ動議ヲ提出スル者アリテ三十人以上ノ賛成アルトキハ之ヲ議題ト爲スコトヲ得トアルノミ而シテ此條ニ依レハ敢テ動議ノ性質ニ付テ區別ヲ爲サルヲ以テ如何ナル動議ト雖モ之ヲ起スコトヲ得ハク隨テ政府ニ對スル信任不信任ノ動議モ亦之ヲ起スコトヲ得サルニ非サルカ如シ然レトモ我憲法ノ精神及ヒ議院法第十章ノ明文ニ依レハ甚タ疑ナキ能ハサルナリ

先ツ議院法ニハ其第四十八條第四十九條及ヒ第五十條ノ三箇條ヲ以テ議院ノ質問權ヲ規定シ殊ニ其第五十條ニ於テ政府ノ答辯ニ關スル議院ノ權利ヲ規定

セリ同條ニ曰ク「國務大臣ノ答辯ヲ得又ハ答辯ヲ得サルトキハ質問ノ事件ニ付議員ハ建議ノ動議ヲ爲スコトヲ得」此條ニ依レハ國務大臣ノ答辯ニ關スル議院ノ權利ヲ大ニ制限シタルモノ、如シ即チ議員ハ質問ノ事件ニ付キ建議ノ動議ヲ爲スノ外更ニ權利ヲ有セサルモノ、如シ若シ其レ立法者ノ精神ニシテ議院ニ十分ノ權力ヲ附與シ國務大臣ノ答辯ニ對シテ信任不信任ノ動議ヲ起スノ權利ヲ附與スルニ在ランカ特ニ明文ヲ以テ建議ノ動議ヲ爲スコトヲ得トノ規定ヲ設クルノ必要アルコトナシ何トナレハ兩議院ノ議員ハ憲法上如何ナル事項ニ關シテモ建議ヲ爲スノ權利ヲ有スレハナリ(憲法第四十條)サレハ此規定ヲ設ケタル所ヨリ推測スレハ議院法ノ精神ハ國務大臣ノ答辯ニ關スル議院ノ權利ヲ制限シタルモノト謂ハサルヲ得ス而シテ前示衆議院規則第四百二十二條ハ議院法第五十條ノ原則ヲ適用シタルモノニシテ即チ茲ニ所謂動議トハ議院法第五十條ノ建議ノ動議ヲ指スモノト解セサルヘカラス且ツ其レ衆議院規則ニ於テ如何ナル事ヲ規定セルニモセヨ議院ノ權利ノ有無ヲ判定センニハ須ラク憲法又ハ議院法ニ遵據セサルヘカラス然ルニ議院法第

五十條ニハ前述ノ如ク規定セルヲ以テ我議院ハ質問事件ニ付キ政府ニ對スル信任不信任ノ動議ヲ爲スコトヲ得サルモノト論決セサルヘカラサルナリ此點ニ付テモ第一期ノ議會ニ於テ一ノ先例アリ即チ明治二十三年十二月二十三日附ヲ以テ井上角五郎氏ヨリ朝鮮事件ニ關シ外務大臣ニ宛テ質問書ヲ提出セラレタルコトアリ而シテ其質問書ノ末項ニ實ニ左ノ如キ文言ヲ附シタリ

前記四箇ノ質問ハ共ニ國民利權ニ關係ヲ有シ之ニ對スル政府ノ處置ハ國民カ政府ヲ信任スルノ當否ヲ判定スヘキモノナレハ議院法第四十八條並ニ同第四十九條ニ依リ政府ノ答辯アラントヲ請求ス

然ルニ政府ハ翌二十四年一月十六日附ヲ以テ外務大臣ヲシテ左ノ如キ答辯ヲ爲サシメタリ

衆議院議員井上角五郎外四十二名ノ發議ニ係ル昨年十二月二十三日附質問趣意書ハ之ニ由テ國民カ政府ヲ信任スルノ當否ヲ判定スヘキコトヲ明言シタリ抑モ政府ハ其處置ヲ以テ國民ノ信任又ハ不信任ノ判定ニ一任スルノ義務ナシト信スルモノナリ仍テ前陳ノ質問ニ答辯セス

其後即チ同年二月九日井上氏ハ前記ノ附言ヲ删除シテ更ニ質問書ヲ提出シタルニ其質問ニ對シテハ同年三月五日外務大臣ヨリ答辯ヲ與ヘラレタリ是ヨリ先キ外務大臣ヨリ衆議院ニ最初ノ通牒到達スルニ當リ同院ニ於テハ此點ニ付テ毫モ異議ヲ唱フル者ナカリシカ如シ加之ス井上氏ハ其通牒ノ意ニ從ヒ附言ヲ删除シテ更ニ質問書ヲ提出セラレタル所ヲ以テ見レハ當時衆議院ニ於テモ亦余ノ上來述ヘタル如キ說ヲ執リタルモノ、如シ

尙ホ質問權ニ付テ一言スヘキモノアリ外國ノ慣例ニ依レハ質問ニ二ノ種類アル所アリ佛國ノ如キ即チ是ナリ而シテ一ヲ *Question* ト謂ヒ一ヲ *Interpellation* ト謂フ其第一種ノ質問ハ議院ヨリ政府ニ對シテ如何ナル事項ニ付テモ又議事ノ始時終時ニ拘ハラズ之ヲ提出スルコトヲ得ヘク且ツ政府ニ於テ其質問ヲ承諾セサルトキハ之ヲ提出スルコトヲ得ス尙ホ此種ノ質問ニ付テハ或ル議員ヨリ國務大臣ニ對シテ質問ヲ提出シ國務大臣ニ於テ之カ答辯ヲ爲シタルトキハ質問者以外ノ議員ハ其討議ニ干與スルコトヲ得ス又政府員ノ答辯ニ對シテ動議ヲ起シ表決ヲ求ムルコトヲ得サルモノナリ之ニ反シテ第二種ノ質問ハ大ニ其性質

ヲ異ニシ政府ノ承諾ノ有無ニ拘ハラズ議院ニ於テハ之ヲ提出スルコトヲ得可ク且ツ此種ノ質問ニ付テハ議院全体ニ於テ之ヲ討論スルコトヲ得ヘシ又國務大臣ノ答辯ニ付テハ必ス表決ヲ爲サ、ルヘカラス隨テ此種ノ質問ノ結果トシテ往々内閣ノ更迭ヲ來スコトアリ

我邦議院法ニ規定セル所ノ質問權ハ佛國ニ於ケル「ケスチヨシ」ニ非ス又「エンテ」ルベラシヨシ」ニモ非ス之ヲ詳言スレハ其權利佛國ノ「ケスチヨシ」ヨリモ重大ニシテ「エンテ」ルベラシヨシ」ヨリモ輕少ナリト謂ハサルヘカラサルカ如シ右唯諸君ノ參考マテニ一言シ置クノミ

彈劾權

第三 彈劾權

今日各國ニ行ハル、所ノ憲法ヲ見ルニ何レノ國ノ憲法ニ於テモ大概大臣ノ責任ノ事ヲ規定セサルモノ莫シ又憲法ノ明文ニ規定ナキ所ニ於テハ其國ノ習慣ニ依リ大臣ノ責任行ハレツ、アリ而シテ此大臣責任ノ制裁トシテ大臣ニ過失アルトキハ之ニ對シテ公訴ヲ起スノ權利ヲ下院ニ與ヘタルコト往々諸國ノ憲法ニ見ル所ナリ所謂彈劾權ナルモノ即チ是ナリ

國務大臣ニ關スル彈劾法ヲ設クルノ利害得失ニ付テハ今日學者間ニ種々ノ議論アリ又今日一般ニ行ハル、所ノ方法ハ果シテ其當ヲ得タリヤ否ヤニ付テモ亦大ニ議論ノ存スル所ナリ故ニ余ハ之ヲ設クルノ利害得失及ヒ其方法ノ當否ヲ論スルニ先タ茲ニ各國ニ於テハ如何ナル方法ノ行ハレツ、アルヤヲ研究セントス

先ツ代議政体ノ最モ古ク行ハル、所ノ英國ニ就テ云ヘハ下院ニ於テ國務大臣ニ過失アリト認ムルトキハ之ヲ上院ニ告訴スルコトヲ得而シテ下院ニ屬スル告訴權ハ單ニ國務大臣ニ對スルノミナラス樞密院顧問官其他高等ノ地位ヲ占ムル所ノ或ル種ノ官吏ニ對シ或ハ憲法違背若クハ國家ニ對スル犯罪等ニ付テ告訴スルノ權利ヲ有セリ之ヲ *Impeachment* (彈劾權) ト稱ス此彈劾權ヲ實行スルニハ先ツ下院ニ於テ之ニ關スル一ノ動議ヲ起シ其動議ニシテ可決セラル、トキハ同院ニ於テ特別ノ檢察官ヲ命ス其檢察官ハ上院ニ於テ宛モ通常ノ檢察官カ司法裁判所ニ於テ行フカ如キ行爲ヲ爲ス即チ檢察官ハ先ツ告訴ノ理由ヲ陳述シ次ニ被告辯護人ハ之カ辯護ヲ爲シ然ル後直チニ投票ヲ以テ其有罪無罪ヲ決

定スルモノトス是レ其大要ナリ

然レトモ英國ニ於テモ百年以來殆ント彈劾權ヲ實行シタルコトナシ千七百八十八年頃迄ハ往々之ヲ實行シタルコトアリ殊ニ同年有名ナル彼ノハーレン、ヘスチングス氏ニ對スルカ如キ其一例ナリ其後千八百四十八年ニ於テアンステ
I代議士カロード、バルメルストーンニ對シテ彈劾權ノ實行ヲ下院ニ請求セシ
モ其動議成立セサリキ之ヲ要スルニ英國ニ於テハ責任内閣ノ原則未タ確定セ
サリシ迄ハ屢、彈劾權ヲ實行セシモ一タヒ責任内閣ノ原則行ハル、ニ及ヒテヤ
下院ノ信用ヲ得サル内閣ハ須臾モ在職スル能ハストノ習慣ヲ生シ爾來彈劾權
ハ實際其効用ヲ見サルニ至レリ

伊國ニ於テハ其憲法第三十六條及ヒ第三十七條ニ依リ上院ヲ以テ高等法院ト
爲シ國家ニ對スル或ル犯罪及ヒ下院ヨリ告發セラレタル所ノ國務大臣ヲ裁判
スルコト、ナレリ此方法ハ曾テ佛國ノ千八百十四年及ヒ千八百三十年ノ憲法
ニ於テ行ハレタル所ノモノト同一ナリ

葡國ニ於テハ上院ノ裁判權ヲ前示ノ各國ヨリモ尙ホ一層擴張セリ即チ同國ノ

上院ハ皇族ノ犯罪、國務大臣、參事院議員、上院議員及ヒ下院議員ノ犯罪ニ付テ裁
判ヲ下スコトヲ得(同國憲法第四十一條)

普國ニ於テハ上下兩院ニ告訴スルノ權利ノミヲ與ヘ而シテ之ヲ裁判スルノ權
利ハ專ラ高等法院ニ屬セリ

此他白耳義、羅馬尼、和蘭等ニ於テハ國家ニ對スル重大ナル犯罪ニ付テハ大審院
ニ於テ之ヲ裁判スルコト、爲セリ然レトモ上下兩院ハ之ニ關シテ全ク干與セ
ザルニアラス例ヘハ白國ノ如キハ始審裁判所長、次長、控訴院及ヒ大審院ノ裁判
官ハ上院及ヒ大審院ヨリ選出スル所ノ候補者中ニ就キ政府ニ於テ之ヲ任命シ
又和國ノ如キハ大審院ニ於テ缺員アルトキハ上院ヨリ五名ノ候補者ヲ出シ其
中ニ就キ政府ニ於テ之ヲ任命スルカ故ニ議院ノ權力間接ニ行ハル、ヲ得
瑞典ニ於テハ國務大臣其他高等官吏ノ犯罪ヲ裁判スル爲メニ特別法院ヲ設ケ
タリ之ヲ Rigsrath ト云フ其組織ハ頗ル煩雜ナルヲ以テ之ヲ略ス

丁抹ニ於テモ亦特別法院ニ於テ右ノ事件ヲ裁判ス而シテ其特別法院ハ大審院
ヨリ若干名、上院ヨリ若干名ノ裁判官ヲ選出シ以テ之ヲ組織スルモノトス

米洲ノ諸共和國ニ於テハ大率テ北米合衆國ノ例ニ倣ヒ上院ニ裁判權ヲ附與セリ故ニ茲ニ合衆國ノ方法ヲ舉示セハ隨テ米洲諸共和國ノ現狀如何ヲ窺知スルニ足ルヘシ合衆國ニ於テハ政治上ノ犯罪ニ付キ告訴權ヲ有スルハ唯下院ノミ其裁判權ハ上院ニ專屬セリ而シテ被告ヲ有罪ト認ムルニハ少クトモ出席議員ノ三分ノ二以上ノ多數ニ依ラサルヘカラス且ツ歐洲諸立憲國ニ行ハル、方法ト異ナル點ハ國務卿ノ政治上ノ犯罪ニ付テハ單ニ政治上ノ無能力ヲ宣告スルニ止マリ通常ノ刑罰ヲ科セス約言スレハ政治上ニ關スル刑罰ハ第一ニ若シ有罪ト認メラレタルトキハ國務卿ハ其官ヲ失フコト第二ニ極重キ場合ニハ永久政治上ノ能力ヲ剝奪スルコト即チ是ナリ又同國ニ於テハ雷ニ國務卿ニ對スルノミナラス其他ノ高等官吏及ヒ大統領ニ對シテモ亦下院之カ彈劾權ヲ有セルナリ

佛國ニ於テハ百年以來屢憲法ヲ改正セシヲ以テ隨テ種々ノ彈劾法行ハレタリ同國ニ於テ一局議院制ノ行ハレタル時代即チ千七百九十一年及ヒ千八百四十八年ノ憲法ノ下ニ於テハ政治上ノ犯罪ヲ裁判スル爲メニ特別ノ高等法院ヲ設

ケタリ又共和三年ノ憲法ノ下ニ於テモ亦然リシナリ而シテ其法院ノ組織ハ大審院ノ判事中心ヨリ五人ヲ選出シテ之ヲ裁判官トシ檢察官モ亦大審院ヨリ選出シ又陪審官ハ各縣ヨリ若干名宛ヲ選出シタリ其後千八百五十二年ノ憲法ノ下ニ於テモ略ホ前ト同一ノ方法ヲ用非一種ノ特別高等法院ヲ設ケ其裁判官ハ大審院ノ判事中ヨリ選ヒ又陪審官ハ縣會議員中ヨリ選ヒタリキ今日行ハル、所ノ千八百七十五年ノ憲法ノ下ニ於テハ上院ニ裁判權ヲ與ヘタリ即チ現行ノ方法ニ依レハ國務卿及ヒ大統領ノ犯罪ニ付テハ下院之カ起訴權ヲ有シ上院ニ於テ其裁判ヲ爲スモノトス加之又或ル場合ニ於テハ國家ノ安寧ニ關スル犯罪ニ付テハ通常人ニ對シテモ上院ニ於テ之ヲ裁判スルコトアリ現ニ先年武將軍ノ事件ニ付キ上院ニ於テ之ヲ裁判シタルカ如キ即チ其一例ナリ但シ其裁判手續及ヒ其他ノ事ニ付テハ未タ確然タル法律アラス故ニ千八百十四年ノ憲法以來行ヒ來レル先例ニ依テ處決セリ彼ノ武將軍ノ時ニ於テモ大審院ノ檢事總長ガ檢察官ノ席ニ在リテ起訴セシナリ又千八百七十七年當時ノ內閣カ共和政府ヲ顛覆セント試ミタル時下院ニ於テ內閣員ニ對シ彈劾權ヲ實行セント發議セ

シモ遂ニ成立セスンテ止ミ又從テ國務卿ニ對スル裁判例ハ今日佛國ニ行ハル
 憲法ノ下ニ在テハ未タ之ナシト知ルヘシ
 上來述ヘタル如ク國務大臣ヲ彈劾スルノ方法ハ各國ノ憲法ニ於テ種々ニ規定
 セラレタリ今ヤ我帝國憲法ニ於テハ如何ト云フニ此點ニ付テハ毫モ規定アル
 フ見ス隨テ世上或ハ此方法ヲ設ケサルヘカラストノ説ヲ抱持スル者アリ然リ
 ト雖モ之ヲ歐米諸國ノ實驗ニ徵スルニ若シ責任内閣ノ習慣行ハル、曉ニハ彈
 劾法ハ實ニ無用ニ歸シ了ラン當ニ無用ナルノミナラス國會ノ一院ニ國務大臣
 ヲ裁判スルノ權利ヲ與フルトキハ往々弊害ノ生スレヲ免レス他ナシ政黨ノ圖
 爭激シクナルニ至レハ或ハ各黨ノ私怨ニ因テ反對黨ノ内閣員ヲ彈劾シ以テ頗
 ル不公平ナル裁判ヲ下タスコト是ナリ蓋シ上院ニセヨ又下院ニセヨ孰レモ一
 ノ政務機關タルヲ以テ政治上種々ノ意見ヲ抱持シ而シテ通常一二ノ政黨カ其
 勢力ヲ占ムルモノナリ故ニ若シ政治上ノ私怨ニ因テ反對黨ヲ裁判スルカ如キ
 ハ到底其公平ヲ望ムヘカラサルナリ又或ハ政治上ノ犯罪ニ付テ特別法院ヲ設
 ケ之ニ大審院判事ヲ加ヘ以テ裁判セハ即チ可ナラントノ説アレトモ政治上ノ

爭ニ純然タル裁判官ヲ參與セシムルカ如キハ是レ亦司法權全体ノ爲メニ決シ
 テ得策ニ非サルナリ
 之ヲ要スルニ責任内閣ノ習慣行ハレ過失アル大臣其職ヲ辭スルノ曉ニハ敢テ
 彈劾法ヲ設クルノ必要ナク而シテ若シ強テ之ヲ設クルノ要アラハ須ラク米國
 ニ行ハル、所ノ方法ヲ多少斟酌シテ用ユヘシ即チ政治上ノ犯罪ニ付テハ政治
 上ノ制裁ヲ加フトシ原則ニ依ルコト是ナリ之ヲ詳言スレハ國務大臣ニ政治上
 ノ過失アリト認ムルトキハ下院ヨリ告訴シ上院ニ於テ之ヲ裁判シ敢テ刑法上
 ノ刑罰ヲ科セス唯其官ヲ失ハシムルノミヲ以テ之カ制裁ト爲シ而シテ若シ一
 般ノ刑法ヲ以テ論スヘキ場合ニ於テハ普通裁判所ニテ之ヲ裁判スヘシ如此方
 法ヲ設クルトキハ或ハ大過ナカルヘキカ但シ外國ニ行ハル、カ故ニ我邦ニモ
 亦之ヲ設ケント主張スルカ如キハ抑モ誤レリト謂フヘシ
 政務監督權ノ事ニ付テハ尙ホ論究スヘキ點ニアリ建議及ヒ上奏ノ權利是ナリ

建議權

其一 建議權

建議權ノ事ニ付テハ憲法第四十條ニ明文アリ曰ク

憲法

兩議院ハ法律及其他ノ事件ニ付キ各其意見ヲ政府ニ建議スルコトヲ得但シ其採納ヲ得サルモノハ同會期中ニ於テ再ヒ建議スルコトヲ得ス

法律案ノ提出權ヲ有スル議院ニシテ尙ホ政府ニ建議スルノ權利ヲ與フルハ抑モ如何ナル必要アリテ然ルヤ議院ニ於テ法律案ヲ提出スルノ權利ナキコト猶ホ佛國ノ千八百十四年欽定憲法ノ下ニ於ケルカ如クナランニハ議院ニ建議權ヲ附與スルハ實ニ必要ナラン何トナレハ議院ニ於テ或ル法律ノ必要アリト信スルモ之ヲ議スルノ手段ナキカ故ニ先ツ政府ニ建議シ政府ヲシテ法律案ヲ提出セシムルノ必要アレハナリ然ルニ法律案ノ提出權ヲ有スル我議院ノ如キニ於テハ建議權ヲ與フルハ宛モ不必要ナルカ如キ感アリ然レトモ其實決シテ然ラス請フ左ニ其必要アル所以ヲ辯セン

ソレ法律ヲ以テ制定スヘキ事項ニ付テハ議會ハ法律案提出權ヲ有スルヲ以テ此場合ニ於テハ建議權ノ必要アルヲ見サルカ如シト雖モ議會カ直接ニ容喙スルコトヲ得サル事項ニ至リテハ大ニ其必要アリト謂ハサルヘカラス例ハハ天皇ノ大權ニ屬スル行政上ノ事項ニ關シ議會ニ於テ或ハ政府ノ方針其當ヲ

得ス或ハ改正スヘキモノト認ムル場合ノ如キ即チ是ナリ又法律ヲ以テ制定スヘキ事項ニ付テモ議會ニ建議權ヲ與フルハ必スシモ不必要ナリト謂フヘカラス例ヘハ實地ニ就キ精密ナル調査ヲ要スル法律案ノ如キ行政部ニ在ル當局者ニ非サレハ之ヲ起草スルコト能ハサルモノアリ此ノ如キ場合ニ於テハ議院ヨリ先ツ政府ニ建議シ政府ヲシテ法律案ヲ提出セシムルヲ以テ大ニ便益ナリトス帝國憲法ニ於テ法律案提出權ノ外ニ尙ホ建議權ヲ認メタルハ蓋シ此等ノ理由ニ外ナラサルヘント信ス

建議ヲ爲ス手續ノ事ニ付テハ議院法ニ於テ規定セリ其大要左ノ如シ

第一 政府ニ建議スルニハ文書ヲ以テ呈出セサルヘカラス(第五十一條)

第二 建議ノ動議ヲ起スニハ三十人以上ノ賛成者アルコトヲ要ス若シ之ナキトキハ建議案ハ議題ト爲スコトヲ得ス(第五十二條)

右ノ如ク鄭重ナル手續ヲ設ケタルハ蓋シ漫リニ建議ノ動議ヲ起サシメス且ツ徒ラニ時間ヲ費ヤサハラシメンカ爲メナラン

又前示憲法第四十條ノ但書ニ議院ヨリ呈出シタル建議ニシテ若シ採納ヲ得サ

ルトキハ同會期中ニ於テ再ヒ建議スルコトヲ得スト規定シタルハ政府ニ於テ採用スヘキモノニ非スト認メタル事項ヲ再三議院ニ於テ討議スルカ如キハ徒ラニ騷擾ノ種子ト爲ルニ過キストノ理由ニ外ナラサルヘシ

上奏權

其二 上奏權

上奏權ノ事ニ付テハ憲法第四十九條ニ規定セリ曰ク
兩議院ハ各々 天皇ニ上奏スルコトヲ得

上奏權ハ立君國ニ於テ代議政体ノ行ハル、憲法ニハ大率子之ヲ規定セサルハ莫シ唯前段建議權ト同シク是レ亦議院ニ法律案提出權アルト否トニ因リ大ニ其効用ヲ異ニス即チ法律案提出權ノ議院ニ屬セサル國ニ於テハ常ニ君主ニ上奏シ以テ議會ノ意思ヲ貫徹スル唯一ノ手段ト爲ヒリ佛國千八百十四年ノ憲法ノ下ニ於テハ上奏案ノ議事ハ常ニ重大ナル影響ヲ及ホシ之ヲ以テ往々内閣ノ進退ヲ決スルカ如キコトアリキ又英國等ノ如キモ今日尙ホ上奏ノ習慣存セリ然レトモ同國ニ於テハ純然タル責任内閣ノ制度行ハル、ヲ以テ君主ニ對シテ上奏スルカ如キハ單ニ一ノ儀式的ニ過キサルカ如シ

我邦ニ於テハ上奏權ハ之ヲ利用スルノ如何ニ因リテ大ニ議院ニ勢力ヲ與フルモノト信ス諸君モ知ラル、如ク憲法第五十五條ニ規定セル國務大臣ノ責任ニ付テハ世上種々ノ議論アル點ナレトモ要スルニ國務大臣ニ責任アルコトハ此條文ニ依テ明カナリ故ニ若シ議院ニ於テ眞ニ政府ニ失當ノ措置アリ國家ノ爲メニ有害ナル内閣ナリト認メタルトキハ其旨ヲ 天皇陛下ニ上奏シ以テ内閣大臣ノ責任ヲ明カニスルコトヲ得ヘク之ヲ爲スハ極メテ必要ナル事ト信ス又議院政治ノ漸次發達スルニ隨ヒ往々些細ナル理由ニ因テ内閣ノ更迭ヲ見ルコトアリ是レ議院政治ニ最モ憂フヘキ弊害ナリ故ニ若シ將來内閣ノ更迭ハ必ス議會ニ於テ國務大臣ヲ斥クヘキ理由アリト信シ以テ上奏ヲ爲シタル時ニ限ルト云フカ如キ習慣ヲ生スルコトアラハ是レ代議政体ノ爲メニ最モ喜フヘキ慶事ナラスヤ

上奏案ヲ議題ト爲スニハ建議ノ動議ト同シク三十人以上ノ賛成アルヲ要ス(議院法第五十二條)其理由ハ前ニ述ヘタル所ニ同シ又上奏案カ議題ト爲リ議院ニ於テ之ヲ可決シタル後上奏ヲ爲スノ手續ハ議院法第五十一條第一項ニ規定セ

リ曰ク各議院上奏セムトスルトキハ文書ヲ奉呈シ又ハ議長ヲ以テ總代トシ謁見ヲ請ヒ之ヲ奉呈スルコトヲ得ト是ナリ

第四款 議院内部ノ整理ニ必要ナル規則ヲ設クルノ權及ヒ請願ヲ受クルノ權

第一 議院内部ノ整理ニ必要ナル規則ヲ設クルノ權

議院ニ最モ貴重ナル最モ必要ナルハ議院ノ獨立是ナリ而シテ其獨立ヲ維持セシムルニハ議院内部ノ整理ニ關シテハ議院自ラ其全權ヲ有セサルヘカラス各國ノ憲法ニ於テ議院ニ其内部ノ整理ニ必要ナル規則ヲ設クルノ權及ヒ議院内ノ警察權ヲ與ヘタルハ蓋シ此意ニ外ナラス帝國憲法ニ於テハ第五十一條ニ明文アリ曰ク

兩議院ハ此ノ憲法及ヒ議院法ニ據タルモハハ外内部ノ整理ニ必要ナル諸規則ヲ定ムルコトヲ得

議院内部ノ整理ニ必要ナル規則ヲ設クルノ一點ニ付テハ何レノ國ノ憲法モ略

議院内部ノ整理ニ必要ナル規則ヲ設クルノ權

ホ同一轍ニ出テタリ然レトモ議院内部ノ整理上最モ必要ナル事務員ヲ組織即チ議長、副議長、書記官ノ任命等ノ點ニ至リテハ各國ノ憲法多少ノ異同ナキニ非ス我帝國憲法及ヒ議院法ノ規定ニ依レハ各議院ノ事務員ハ行政部ニ於テ之ヲ任命スルコト、爲レリ外國ノ憲法ニ於テモ略ホ之ト同様ノ規定ヲ設ケタル所アリ曾テ佛國千八百十四年ノ欽定憲法ノ下ニ於テハ議長ヲ任命スルノ權全ク君主ニ屬セリ其後千八百五十一年ノ憲法ニ於テモ此權利ハ大統領ニ屬セリ(但シ當時ノ大統領ハ後ニ拿破侖翁第三世ト爲レル英傑ナリト知ルヘシ)又今日ニ在リテモ或ル立君國ニ於テハ議長ヲ任命スルノ權君主ニ屬セルモノアリ和蘭、バーデンノ如キ是ナリ此等ノ國ニ於テハ大抵議院ニ於テ若干ノ候補者ヲ選定シ其中ニ就テ之ヲ任命スルコト、爲レリ但瑞典ノ如キハ議長任命ノ權ハ全ク君主ニ屬セリサクセンニ於テモ千八百七十四年頃迄ハ此權利君主ニ屬セシモ同年六月及ヒ十月ノ法律ヲ以テ之ヲ議院ニ與ヘタリ此他今日行ハル、所ノ各國ノ憲法ヲ見ルニ共和國ニ於テハ勿論立君國ニ於テモ普魯西、獨逸帝國、バイエルン、埃地利、白耳義、伊太利、羅馬尼、希臘等ノ如キハ議院ノ事務員ヲ任命スルノ權利

議院ニ屬セリ又英國ノ如キハ議院ニ於テ之ヲ選定シ後君主ノ認可ヲ要スルコト、爲シ居レリ
斯ノ如ク各國ノ例ニ徴スレハ議院ノ事務員ヲ選定スルノ權ハ一ニ國ヲ除ク外悉ク議院ニ屬スト謂ハサルヘカラス又立法上ヨリ論スルモ此權利ハ議院ニ屬セシムルヲ以テ可トスルカ如シ若シ其レ立君國ニ在テハ議長ノ任命ニ付キ多少君主ノ干涉ヲ要ストセハ彼ノ英國ノ如ク唯認可權ノミヲ與フルヲ以テ十分ナリトセン要スルニ議院ハ成ルヘク獨立ヲ維持セサルヘカラス而シテ之ヲ維持センニハ必ス議院自ラ其事務員ヲ組織セサルヘカラサルナリ

第二 人民ヨリ請願ヲ受クルノ權

此事ニ付テハ憲法第五十條ニ明文アリ曰ク

兩議院ハ臣民ヨリ提出スル請願書ヲ受クルコトヲ得

歷史上ヨリ論スルトキハ或ル時代ニ於テハ議院カ人民ヨリ請願ヲ受クルハ大ニ利益アリシ權利ニシテ又或ル國ノ如キハ之ヲ以テ一ノ義務ノ如ク看做シタリキ蓋シ政治上ノ自由未タ行ハレス人民ノ意思十分ニ表彰スルコト能ハサル

人民ヨリ
請願ヲ受
クルノ權

時代ニ在リテハ人民ニ請願スルコトヲ許シ議院ニ之ヲ受クルノ權利ヲ與フルハ極メテ必要ナル事ナリシヤ必セリ然リト雖モ今日全ク集會言論ノ自由ヲ許與スル時代ニ至リテハ請願ヲ受クルノ權利モ大ニ其効用ヲ減シタリト謂ハサルヘカラス但シ今日ト雖モ未タ必スシモ無用ノモノニ非ス唯其効用昔時ニ比シテ微少ナリト言フノミ此點ニ付テハ特ニ論スヘキモノナシ
尙ホ議院ニ屬スル權利ハ議員ノ資格審査權是ナリ此點ニ付テハ便宜ノ爲メ曩日既ニ詳論セシ所ナルヲ以テ復タ贅セス

第三節 立法ニ關スル天皇ノ大權

我帝國憲法第五條ニ依レハ曰ク

天皇ハ帝國議會ハ協贊ヲ以テ立法權ヲ行フ

又同法第三十七條ニ曰ク

凡テ法律ハ帝國議會ハ協贊ヲ經ルヲ要ス

此兩條ヲ對照スレハ我帝國ノ立法權ハ 天皇ト帝國議會ト二者ニ由テ之ヲ實

立法ニ關
スル天皇
ノ大權

行スルモノト謂ハサルヘカラス而シテ余ハ前節ニ於テ帝國議會カ立法ニ關シテ有スル所ノ職權及ヒ之レヨリ生スル所ノ諸般ノ問題ヲ講了セリ仍テ本節ニ於テハ 天皇ノ立法ニ關スル大權ニ付キ聊カ所見ヲ開陳セントス

天皇陛下カ立法ニ關シテ有シ給フ所ノ權利ハ之ヲ二ニ別ツコトヲ得ヘシ曰ク直接ニ有シ給フ所ノ權利曰ク間接ニ有シ給フ所ノ權利直接ニ有シ給フ所ノ權利トハ即チ裁可權ニノ間接ニ有シ給フ所ノ權利トハ帝國議會ヲ召集シ其開會閉會停會及ヒ衆議院ノ解散ヲ命スル如キ權利是ナリ故ニ余ハ本節ヲ二款ニ別チテ講述スヘシ第一款裁可權第二款帝國議會ヲ召集シ其開會閉會停會及ヒ衆議院ノ解散ヲ命スルノ權

裁可權

第一款 裁可權

今ツレ一ノ法律案ヲ政府ヨリ提出シタルニセヨ又議院ヨリ提出シタルニセヨ貴族衆議兩院ヲ通過シ其可決スル所トナルモ之ノミニテハ未タ以テ法律トナラス其法律案ニシテ法律ト成ルニハ兩院可決ノ上尙ホ 天皇ノ裁可アルヲ要

ス憲法第六條ニ 天皇ハ法律ヲ裁可シ云々トアルハ即チ之ヲ謂フナリ然レハ裁可トハ貴衆兩院ニ於テ可決シタル所ノ法律案ニ法律タルハ効カヲ與フル所ハ行爲ナリト謂ハサルヘカラス

帝國憲法ニ於テ此裁可權ナルモノヲ設ケタル理由如何余ノ見ル所ニ依レハ其理由ニアリ

第一 嘗テ詳論シタルカ如ク帝國憲法ノ大原則トスル所ハ主權ハ 天皇ニ存屬スルコト是ナリ主權ニシテ既ニ 天皇ニ存屬スル以上ハ其必然ノ結果トシテ裁可權ハ之ヲ 天皇ニ歸セサルヘカラス如何トナレハ立法ハ主權作用ノ一ニ過キサレハナリ故ニ主權ヲ有スル者カ直接ニ立法事業ニ其權力ヲ及ホスヤ理ノ當ニ然ルヘキ所ニシテ帝國憲法カ 天皇ニ裁可權ヲ認メタルハ蓋シ此理ニ外ナラサル可シ

第二 今若シ帝國議會ニ立法ノ全權ヲ委ネ其可決シタル所ヲ以テ直チニ法律ト爲スノ制度ヲ設クルトキハ議會ニ於テ有害ノ法律ヲ制定スルモ主權者ハ之ニ異議ヲ容ルコト能ハス其結果竟ニ國民ヲシテ苦痛ヲ感セシムルコト

アルヤモ亦知ルヘカラス是レ我憲法制定者カ裁可權ヲ 天皇ニ認メ以テ斯
ノ如キ弊害ナカラシムコトヲ期セシモノナルヘシ
法律ヲ裁可スルノ權既ニ 天皇ニ屬スル以上ハ之ヲ裁可セサルノ權利モ亦當
然 天皇ニ存スルヤ多辯ヲ俟タスシテ明カナリ唯ソレ 天皇ニ於テ不裁可權
ヲ實行シ給フコトハ蓋シ議會カ議決シタル法律案ヲ以テ眞ニ國家ニ有害ナリ
ト認メ給フ場合ノ外ニハ之ナカルヘシ但シ裁可權及ヒ不裁可權ノ 天皇ニ屬
スル以上ハ之ヲ裁可スルト否トヲ判定スルノ權ハ全ク 天皇ニ在リト謂ハサ
ルヘカラス

立法上ヨリ右ノ規定ヲ論スルトキハ其可否如何此問題ヲ決スルニハ須ラク外
國ニ行ハレタル所ノ實例ニ付テ之ヲ研究セサル可カラス今日歐米諸國ニ行ハ
ル、所ヲ觀ルニ此點ニ關スル憲法上ノ規定ハ甚タ區々ニ涉リ且ヤ時代ニ依テ
大ニ相異ナレリ而シテ先ツ第一ニ區別スヘキハ君主國ト共和國トニ是ナリ
君主國ニ於テハ孰レノ憲法モ大抵此裁可權ヲ君主ニ與ヘリ英國ヲ始メ伊太利
獨逸奧地利ノ如キ皆然リ佛國ノ如キモ嘗テ帝政王政ノ時代ニハ亦裁可權ヲ君主

ニ屬セリ唯千七百九十一年ノ憲法ニ於テハ絕對的ノ裁可權ヲ與ヘサリシコト
アルノミ即チ當時ノ君主ハ所謂停止的拒否權(ゲエト、シニスパンシフ)ヲ有シ
タルニ過キス詳言スレハ議會ニ於テ可決シタル法律案ニシテ君主ノ意ニ合ハ
サルトキハ君主ハ一應之ヲ拒絕スルコトヲ得ト雖モ議會ニ於テ更ニ之ヲ可決
シタルトキハ君主ハ再ヒ之ヲ拒絕スルノ權利ヲ有セサルノ規定ナリシナリ其
後ノ王政時代即チ千八百十四年千八百三十二年及ヒ千八百五十二年等ノ憲法
ニ於テハ君主ニ絕對的ノ裁可權ヲ與ヘタリ又今日ト雖モ或ル君主國ニ於テハ
裁可權ヲ君主ニ屬スルモ或ル條件ノ之ニ附帶スルコトアリ例ヘハ瑞典ノ憲法ニ
依レハ君主ハ參事院及ヒ大審院ニ諮詢シタル後ニ非サレハ不裁可權ヲ行フ能
ハサルカ如キ其一ナリ

共和國ニ於テハ裁可權不裁可權ヲ大統領ニ與ヘタルモノアルヲ見ス然レトモ
大統領ハ議會ニ於テ可決シタル法律案ニ付キ異議アルトキハ之ヲ議會ニ返附
シテ再議ヲ求ムルコトヲ得亞米利加諸共和國ノ憲法佛蘭西共和國ノ憲法ノ如
キ皆同シ唯米國ト佛國ト相異ナル點ハ再議ニ於ケル表決ノ方法はナリ佛國ニ

在テハ議會ニ於テ再度議スルトキモ最初之ヲ議シタルトキト同シク過半数決ニ依ル而シテ若シ再ヒ之ヲ可決シタルトキハ大統領ハ更ニ異議ヲ申立ツルコトヲ得ス必ス之ヲ頒布スルノ義務アリ然ルニ米國ニ於テハ大統領ヨリ再議ニ附シタルトキハ其法律案ハ上下兩院ニ於テ孰レモ三分ノ二以上ノ多數ヲ得ルニ非サレハ法律トナルコトヲ得ス

右佛米兩國ノ憲法ヲ比較スルトキハ米國ノ規定ヲ以テ之ニ優レルモノト謂ハサルヘカラス佛國ノ如キ前議ト同一ノ多數ヲ以テ可決シタルニ於テハ再議ニ附スルノ權ハ殆ト有名無實ニ歸シ去ルヘシ如何トナレハ再ヒ同數ニ依テ同案ヲ議スルモノナルヲ以テ十中ノ八九ハ前同一ノ議決ヲ爲スヲ免レサレハナリ之ニ反シテ米國ノ如ク最初ノ議事ニ於テハ過半数ヲ以テ決シ再議ニ付テハ必ス三分ノ二以上ノ多數ニ依ルニ非サレハ可決スルコト能ハスト爲ストキハ最初議院ノ大多數ヲ以テ可決シタル議案ニ非サレハ容易ニ再ヒ通過スルコト勿ルヘシ現ニ北米合衆國ニ於テハ其建國以來再議ニ附セラレタル議案ニシテ三分ノ二ノ多數ヲ得兩院ヲ通過シタルモノ千八百六十五年ニ唯一アルノミト云

フ而シテ今日ニ至リテモ同國ノ大統領ハ屢再議ニ附スルノ權ヲ實行スルコトアリ

却說行政部ノ首長ニ絕對的ノ裁可權ヲ與フルト單ニ再議ニ附スルノ權ヲ與フルトノ利弊得喪如何此點ニ付テハ歐米ノ學者間大ニ議論ノ存スル所ナリ然ルト雖モ各國ノ實驗上ヨリ論スレハ絕對的ノ裁可權ナルモノハ或ハ無用ノ長物ニ歸シ或ハ非常ノ有害物トナルノ虞アルコトハ亦學者ノ往々認ムル所ナリ何ヲカ無用ノ長物ニ歸スト曰フ絕對的裁可權ハ單ニ一ノ儀式ニ過キササルコトアリ現ニ英國ノ如キ其憲法上裁可權ノ君主ニ屬スルハ毫モ疑ヲ容レスト雖モ千七百七年以來今日ニ至ルマテ殆ント二百年間不裁可權ヲ實行シタルコトナシ此他ノ君主國ニ於テモ亦君主カ不裁可權ヲ實行シタル事ハ未タ多ク見聞セサル所ナリ又何ヲカ非常ノ有害物トナルト曰フ若シソレ裁可權ヲシテ毫モ制限スル所ナク濫リニ之ヲ行用スルコトアラシカ如何ニ國民全般ノ舉テ希望スル法律ト雖モ君主ハ一意ヲ以テ之ヲ裁可セス法律ト爲サハルヲ得ヘキコト是ナリ

之ニ反シテ彼ノ米國憲法ニ於ケルカ如ク唯再議ヲ請求スルノ權利ニ止メ而シテ再議ニ付テハ大多數ヲ以テ可決スルニ非サレハ法律トナラストセハ實ニ良結果ヲ見ルヘシ之ヲ詳言スレハ今若シ一法律案ノ再議ニ付キ議會ニ於テ大多數ヲ占ムルコトナキカ未タ以テ眞ニ國家ニ必要アルモノト斷定スルコト能ハス故ニ上下兩院ニ於テ之ヲ否決スルモ敢テ悔ニ可キニ非ス之ニ反シテ大多數ヲ以テ兩院ヲ通過スル以上ハ其法律案ヲ以テ國家ニ必要アルモノト斷定セサルヘカラス果シテ然ラハ斯ノ如キ法律案ヲシテ當然法律ヲラシムルハ國家ノ爲メ甚タ有益ナルヘキヲ以テナリ

之ヲ要スルニ米國憲法ノ制定者カ斯ノ如キ規定ヲ設ケタルハ實ニ見ル所アリテ然カセシモノト評セサルヘカラス願テ帝國憲法ニ於テハ前ニ述ヘタル如ク天皇ニ絶對的裁可權ヲ認メタリ是レ我國々体ノ然ラシムル所ト議會ノ幼稚ナルトニ職由セスンハアラス

第二款 帝國議會ヲ召集シ其開會閉會停

會及ヒ衆議院ノ解散ヲ命スルノ權

立法上ニ關シ天皇カ直接ニ有シ給フ權利ハ前段ニ於テ既ニ述ヘタル所ノ裁可權即チ是ナリ天皇ノ裁可ナケレハ上下兩院ノ議決アルモ法律案ハ決テ法律トナルヲ得サルナリ然レトモ此外ニ尙天皇カ立法上ニ關シ間接ニ有シ給フ所ノ權利アリ帝國議會ヲ召集シ其開會閉會停會及ヒ衆議院ノ解散ヲ命スルノ權即チ是ナリ而シテ議會ノ召集開會及ヒ閉會ノ事ニ付テハ特ニ論スヘキモノナキヲ以テ唯議會ノ停會及ヒ衆議院ノ解散ニ付テ聊カ論述セントス

其一 議會ノ停會

議會ノ停會トハ議會ヲ中止スルノ謂ヒナリ蓋シ外國ノ憲法ヲ通觀スルニ或ハ此權利ヲ認ムルアリ或ハ之ヲ認メサルアリ而シテ憲法ヲ以テ此停會ヲ命スルノ權利ヲ君主又ハ大統領ニ與ヘタル理由ハ或ハ議會ノ景狀騷擾ヲ極メ或ハ議會ト政府トノ衝突ヲ來タスヘキ虞アル場合又二局議院制ノ國ニ於テハ上下兩

議會ノ停會

院間ニ不和ヲ生シ又ハ議會ノ動靜國安ヲ妨害スル虞アル場合等ニ於テ一時人心ヲ鎮定センカ爲メ又ハ議會ト政府トノ間ニ調和ヲ試ムルノ猶豫ヲ與ヘンカ爲メ若クハ兩院間ノ不和ヲ調停セシムルノ猶豫ヲ與フルカ爲ナリ我帝國憲法ニ於テ此權利ヲ認メタルモ亦實ニ此等ノ理由ニ出テタルモノナルヘシ帝國憲法ニ規定セル停會ノ事ニ付テ論究スヘキ點二三アリ請フ之ヲ述ヘン

第一 政府ハ隨意ニ停會ノ期間ヲ定ムルコトヲ得ルヤ

此點ニ付テハ議院法第三十三條第一項ニ政府ハ何時タリトモ十五日以内ニ於テ議院ノ停會ヲ命スルコトヲ得ト規定セルヲ以テ十五日以上ノ停會ヲ命スルコト能ハサルハ固ヨリ論ヲ俟タスト雖モ十五日以内ニ在テハ政府ハ隨意ニ停會ノ期間ヲ定ムルコトヲ得ルハ是亦敢テ多辯ヲ要セサルナリ

第二 一會期中數回停會ヲ命スルコトヲ得ルヤ

此點ニ付テハ憲法及ヒ議院法中一モ規定スル所ナシ故ニ政府ニ於テハ幾回停會ヲ命スルモ妨ナキモノト謂ハサルヘカラス然リト雖モ立法上ヨリ論スルトキハ此點ニ付キ毫モ制限ヲ設ケサリシハ聊カ缺典タルカ如シ何トナレハ帝國

議會ノ通常會期ハ單ニ三ヶ月ニ過キサルヲ以テ其間ニ數バ停會ヲ命セラルトキハ三ヶ月ノ會期モ殆ト有名無實ニ歸スレハナリ佛國ニ於テハ此等ノ點ニ付キ明確ナル規定ヲ設ケタリ其現行ノ憲法ニ依レハ通常會期ヲ五ヶ月トシ一會期中二回以上ノ停會ヲ命スルコトヲ得ス且ツ停會ハ毎回三十日ヲ超ユルコトヲ得ストセリ

第三 停會ノ日數ハ會期中ニ算入スヘキモノナルヤ

本問題ハ帝國憲法ノ解釋上ヨリ既ニ起リタル一問題ナリ而シテ余ノ見ル所ニ依レハ憲法及ヒ議院法ニ於テ毫モ規定スル所ナキヲ以テ停會ノ日數ハ會期中ニ算入スヘキモノト信ス此點ニ付テハ佛國ニテハ停會ノ日數ヲ會期中ニ算入セサルモノトセリ故ニ行政官カ隨意ニ憲法ニ定メタル會期ヲ短縮スルカ如キ恐アルコトナシ

第四 停會ハ議事ニ如何ナル影響ヲ及ホスカ

議院法第三十五條ニ依レハ帝國議會閉會ノ場合ニ於テ議案建議請願ノ議決ニ至ラサルモノハ後會ニ繼續セス但第二十五條ノ場合ニ於テハ此限ニ在ラスト

規定セリ故ニ閉會ノ場合ニ於テハ例ヘハ衆議院ニ於テ可決シ貴族院ニ回付シタル議案ト雖モ若シ貴族院ニ於テ閉會前ニ議了セザルトキハ次ノ會期ニ繼續セズ即チ消滅シタルモノト看做サハルヘカラス今日マテノ先例ニ依レハ亦實ニ斯ノ如ク爲シ來レリ然レトモ停會ノ場合ニ於テハ聊カ區別シテ論セサルヘカラス通常停會ノ場合及ヒ衆議院解散ノ場合是ナリ其第一即チ第三回議會ニアリタルカ如キ通常停會ノ場合ニ於テハ前ノ議事ヲ繼續スルモノトス是レ議院法第三十三條第二項ノ規定スル所ナリ曰ク衆議院停會ノ後再ヒ開會シタルトキハ前會ノ議事ヲ繼續スヘシト

其第二即チ衆議院ノ解散ニ因テ貴族院カ停會ヲ命セラレタル場合ニ於テハ前ノ議事ヲ繼續セズ故ニ停會前ニ議了セザリシ議案ハ悉ク消滅スルモノトス是レ議院法第三十四條ノ規定スル所ナリ曰ク衆議院ノ解散ニ依リ貴族院ニ停會ヲ命シタル場合ニ於テハ前條第二項ノ例ニ依ラヌト

衆議院ノ解散

其二 衆議院ノ解散

衆議院ヲ解散スル權利モ亦帝國憲法第七條ニ於テ規定セル所ナリ今本邦ノ規

定ヲ論スルニ先チ聊カ外國ノ長狀如何ヲ探究セサルヘカラス今日外國ニ於テ行ハル、所ヲ觀ルニ其規定甚々區々ナリト雖モ立憲君主國ニ於テハ熟レモ議院ヲ解散スルノ權利ヲ君主ニ與ヘタリ唯通例ノ場合ニ於テハ國民ノ選舉ニ成ル所ノ下院ノミニ付テ然リ唯二三ノ國ニ於テハ上院ヲモ解散スルコトヲ得ヘキノ規定ヲ設ケタリ白耳義、瑞典、丁抹等ノ如キ即チ是ナリ又西班牙ノ如キハ上院議員中民選ニ係ル部分ノミニ之ヲ解散スルコトヲ得余ノ記憶スル所ニ依レハ立君國ニ於テ君主ニ解散權ヲ與ヘサリシハ唯佛國千七百九十一年ノ憲法アルノミ其後ノ憲法即チ路易十八世ノ時代、ルウ井フ井リツプノ時代及ヒ奈翁第三世ノ時代ノ憲法ハ皆君主ニ解散權ヲ與ヘタリ之ニ反シテ共和國ニ於テハ大抵議會解散權ヲ大統領ニ與ヘス北米合衆國、瑞西等ノ如キ皆然リ又佛國今日ノ憲法ニ於テハ大統領ハ下院ヲ解散スルノ權利ヲ有スルモ其之ヲ行ハントスルトキハ必ス先ツ上院ノ同意ヲ得ルヲ要ス而シテ此現行憲法實施以來佛國ニ於テ下院ヲ解散シタル實例ハ唯千八百七十七年ニ一回アリシノミ請フ以下聊カ立法上ヨリ議會ヲ解散スルノ權利ヲ君主又ハ大統領ニ與フルノ

君主ニ解
散權ヲ與
フル理由

可否如何ヲ論セム先ツ共和國ノ大統領ニ此權利ヲ與フルノ可否ニ付テハ種々
 議論アレトモ立君國ニ於テ之ヲ君主ニ與フルニ至リテハ殆ト異論ナキカ如シ
 昔時モンテスキューノ如キハ君主ニ議會解散權ヲ與フルハ立君國ニ於テ最モ
 必要ナリト論セリ又近時ミルノ如キモ略同一ノ説ヲ唱ヘタリ而シテ君主ニ解
 散權ヲ與フルヲ以テ至當ナリトスル學者ノ説ヲ聞クニ其理由トスル所ハ蓋シ
 左ノ二點ニ在ルモノ、如シ

其一 立憲君主國ニ於テハ政府ト議會トノ協力ニ依テ國務ヲ處理スルモノナ
 リ故ニ議會ト政府トノ間ニハ必スヤ一致調和ヲ爲シ得ルノ方法ナクシハ國
 家ノ進歩國民ノ福利得テ期スヘカラス又二局議院制ヲ採用セル憲法ノ下ニ
 在テハ上下兩院ノ一致モ亦甚タ必要ナリ何トナレハ兩院ノ意見一致スルニ
 非スンハ法律案モ豫算案モ其成立ヲ見ル能ハサレハナリ故ニ政府ト議會ト
 ノ間又ハ上下兩院間ニ不和ノ生シタル場合ニ於テ議會ヲ解散シ以テ更ニ國
 民ノ意思ヲ問フハ即チ不和ヲ調停スル最終ノ方便ナリトス

其二 議會ハ成ル可ク國民全体ノ意思ヲ代表セサル可カラス然ルニ議會ニシ

衆議院解
散ニ關ス
ル問題

テ若シ眞ニ國民全体ノ意思ヲ代表シ居ラサルトキハ君主ハ議會ヲ解散シ以
 テ國民ノ意思果シテ那邊ニ在ルヤヲ確ムルノ必要アリ

我帝國憲法ニ於テ衆議院ヲ解散スルノ權利ヲ 天皇ニ歸シタルモ亦實ニ上述
 ノ理由ニ外ナラサルヘシト信ス却説帝國憲法ニ規定セル衆議院解散ノ事ニ付
 テ論究スヘキモノ種々アリ

第一 衆議院ノ未タ成立セサル以前ニ於テ之ヲ解散スルコトヲ得ルヤ
 詳言スレハ政府ニ於テ選舉ノ結果眞ニ國民ノ意思ヲ代表スヘキ議員ヲ選出セ
 サリシト認ムルトキハ議會ノ開クルヲ俟タス直チニ之ヲ解散スルコトヲ得ル
 ヤ如何是ナリ此問題ハ一見スル所徒々坐上ノ空論、一ノ假想ニ過キサルカ如シ
 ト雖モ然ラス外國ノ歴史ヲ緝ケハ是レ實際ニ起リタル所ニシテ千八百三十年
 佛國ニ於テ議員ノ選舉ヲ行ヒ未タ之ヲ召集セサル前ニ解散ヲ命シタル事アリ
 タリ然レハ我邦ニ於テモ將來斯ル問題生セストハ必スヘカラサルヲ以テ聊カ
 茲ニ之ヲ研究セサルヘカラス而シテ余ノ見ル所ニ依レハ未タ議會ヲ召集セス
 若クハ其成立セサル以前ニ於テハ決シテ之ヲ解散スルコト能ハサルモノト信

ス其理由ハ左ノ如シ

其一 憲法ノ明文ヨリ論スルモ「天皇ハ……衆議院ノ解散ヲ命ス」第七條トアリ故ニ衆議院ナル一ノ集合体ノ組成セラレタル後ニ非スンハ之ヲ解散スルコト能ハス選舉ヲ結了スルヤ此ニ衆議院議員アルモ未タ衆議院ナル集合体成立セス果シテ然ラハ選舉後直チニ衆議院ヲ解散スト云フハ爲シ能ハサル所ナリ

其二 君主ニ解散權ヲ與ヘタル理由ニ反スト謂ハサルヘカラス衆議院ヲ解散スルノ權利ヲ君主ニ歸シタルハ前述ノ如ク或ハ政府ト衆議院トノ間或ハ衆議院ト貴族院トノ間ニ意見ノ合致セサル場合ニ於テ國民ノ意思果シテ那邊ニ在ルヤヲ試ミンカ爲メナリ然ルニ衆議院未タ召集セラレス未タ議事ニ着手セサル以前ニ在テハ衆議院ノ意思如何ヲ確認スヘカラス故ニ衆議院ノ未タ成立セサル以前ニ其解散ヲ命スルハ憲法ノ精神ニ背クモノト謂ハサルヘカラス

第二 政府ニ於テ衆議院ノ解散ヲ命スルニハ必ス一定ノ理由アルヲ要スル

ヤ

政治上ヨリ論スルトキハ政府ニ於テ漫リニ解散ヲ命スルノ不當ナルヤ勿論ナリト雖モ憲法ノ法理上ヨリ論スルトキハ敢テ特別ノ理由アルヲ要セス衆議院ヲ解散スヘキヤ否ヤヲ判定スルノ權利ハ全ク 天皇ニ屬スルヲ以テ理由ノ如何ニ拘ラス解散ヲ命スルコトヲ得ヘント斷定セサルヘカラス唯其レ不當ニ解散ヲ命スヘキ旨ヲ奏請シタル所ノ時ノ内閣大臣ハ其責ニ任セサル可カラサルノミ

第三 政府ハ一ケ年内ニ又ハ一任期内ニ數回衆議院ノ解散ヲ命スルコトヲ得ルヤ

此點ニ付テハ帝國憲法中一モ規定スル所ナキヲ以テ政府ニ於テ解散ス可キ理由アリト認ムルトキハ解散ノ後選舉ヲ行ヒ其召集シタル衆議院ヲ更ニ解散スルコトヲ得ト謂ハサルヘカラス但シ此點モ亦寧ロ政治上ノ問題ニ屬スルヲ以テ解散ノ當否ニ關スル責任ハ時ノ内閣大臣ニ於テ之ヲ負ハサルヘカラサルナリ

第四 衆議院ノ解散ヲ命シタルトキハ一定ノ期間内ニ其改選舉ヲ行ハサル
ヘカラサルヤ

此點ニ付テハ憲法第四十五條ノ規定アリ此條ニ依レハ衆議院ノ解散ヲ命セラ
レタルトキハ勅命ヲ以テ新タニ議員ヲ選舉セシメ解散ノ日ヨリ五ヶ月以内ニ
之ヲ召集セサルヘカラス故ニ政府ニ於テハ必ス此五ヶ月内ニ選舉ヲ行ヒ更ニ
衆議院ヲ召集スルノ義務アリ此規定ハ甚タ必要ノモノトス何トナレハ政府ト
議會トノ間ニ或ル緊要問題ニ付キ不利ノ生シタルトキ若シ政府ニ於テ衆議院
解散後永久之ヲ召集セサルコトヲ得ハ往々行政部ニ專横ノ處置アルヲ免レサ
レハナリ佛國現行ノ憲法ニ依レハ解散後三ヶ月以内ニ選舉ヲ行フヘキ旨ヲ規
定シ更ニ議會ヲ召集スルノ點ニ至テハ毫モ規定スル所ナレ是ヲ以テ千八百七
十七年ノ解散ノ時ノ如キ太甚キ弊害ヲ生シタリ然ルニ我帝國憲法ニ於テハ右
ノ規定アルヲ以テ解散後長ク議會ヲ召集セシテ過去ルカ如キ虞ナカルヘシ
第五 衆議院解散後憲法第四十五條ニ依テ召集サレタル議會ノ性質如何
此點ニ付テハ會テ世上ノ一問題ト爲リタル所ニシテ本問題ニ關スル學說三ア

第一說 解散後ノ議會ハ臨時會ナリト此說ハ殊ニ探ルニ足ラサルモノト信ス
如何トナレハ臨時會ノ事ハ憲法第四十三條ニ規定スル所ニシテ臨時緊急ノ

必要アル場合ニ於テ召集スヘキモノナレハナリ且ツ其レ臨時會ノ性質ヨリ
論スルモ臨時會ハ政府ニ於テ之ヲ召集スルモ將タ召集セサルモ全ク其權内
ニ在リテ必スシモ之ヲ召集セサルヘカラサルノ義務アルニ非ス然ルニ解散
後ノ議會ハ憲法第四十五條ニ依リ政府ニ於テ必ス五个月内ニ召集セサルヘ
カラサルノ義務アリ縱シヤ臨時緊急ノ必要ナキモ亦然リ然ラハ則チ憲法第
四十三條ノ臨時會ト第四十五條ノ議會トハ其性質上相異ナルモノト斷定セ
サルヘカラス

第二說 憲法第四十五條ノ議會ハ特別會ナリト此說ハ政府部内ニ於テ行ハレ
亦現ニ實行シ來リタル所ナリ而シテ此說ヲ主張スル論者ノ言ニ曰ク帝國憲
法ハ其第四十五條ヲ以テ通常會ト臨時會ノ外ニ尙ホ一種特別ノ議會ヲ設ケ
タリ解散後ノ議會ハ實ニ特別ノ性質ヲ有スルモノナリ故ニ之ヲ特別會ト爲

シ其會期ノ如キモ憲法第七條ニ依リ 天皇ニ於テ隨意ニ之ヲ定ムルコトヲ得ヘシト

第三說 解散後ノ議會ハ通常會ナリト此說ヲ主張スル論者ノ曰ク帝國憲法ニ於テハ通常會ト臨時會ノ外ニ特種ノ會議アルコトヲ規定セス 天皇ノ大權ニ依テ召集スル所ノ會議ハ必スヤ此二者中其一ヲラサルヘカラス然ルニ解散後ノ議會ハ決シテ臨時會ノ性質ヲ有スル者ニ非サルヲ以テ之ヲ通常會ト看做スヨリ他ニ策アルコトナシ或ル論者ハ解散後ノ議會ヲ以テ一種特別ノ性質ヲ有スルノ、如ク唱道スルモ憲法第四十五條ノ規定ハ單ニ行政部ノ專恣ヲ防クカ爲メニ召集スヘキ期限ヲ定メタルノミニシテ議會其物ノ性質ニ付テハ毫モ規定セサル所ナリ而シテ議會ノ性質ニ付テハ第四十三條ニ規定セルノミナルヲ以テ必ス通常會及ヒ臨時會ノ二者ニ出テサルヘカカラス又通常會ハ通例十一月ニ開クヲ以テ常トスル所ヨリシテ其以前ニ開クトキハ通常會ニ非サルカ如キ感アルモ帝國憲法中何レノ處ニ於テモ通常會ヲ開クヘキ月日ヲ規定スルコトナシ故ニ之ヲ以テ十一月以前ニ開ク會議ハ通常會

ニ非ストノ說モ亦價值ナキモノタルヤ知ルヘシト

余ノ見ル所ニ依レハ解散後更ニ開ク所ノ會議ハ通常會ナリト信ス前ニ述フルカ如ク憲法第四十五條ハ單ニ解散後更ニ議會ヲ召集スヘキ期間ヲ定メタルノミニシテ會議ノ性質ニ付テハ毫モ規定セサル所ナリ然ルニ會議ノ性質ハ第四十三條ノ外ニ一モ規定スル所ナキヲ以テ必ス此條ニ依テ其性質ヲ論定セサルヘカラス而シテ此問題ノ利益ハ單ニ會期ノ長短ノミニ關スルモノト信ス今若シ之ヲ特別會若クハ臨時會トスルトキハ行政部ノ隨意ヲ以テ會期ヲ短縮スルコトヲ得之ニ反シテ通常會トスレハ必ス三個月間開會セサルヘカラス但シ今日ニ於テハ議會モ政府ノ意見ニ對シテ甚シキ異議ナク先例ヲ作りシヲ以テ殆ト無益ノ議論トナレリ然レトモ憲法ノ解釋上ヨリ論下スルトキハ決シテ特別會ト云フカ如キ性質ヲ付スヘキモノニ非サルナリ

第六 衆議院ノ解散ハ議事ニ關シテ如何ナル影響ヲ及ホスヘキヤ

例ヘハ貴族院ニ於テ可決シタル議案ヲ衆議院ニ回付シ衆議院ニ於テ未タ之ヲ議了セサル前ニ解散サレタルカ如キ此場合ニ改選ニ依テ成立シタル衆議院ハ

其議案ヲ更ニ議スルコトヲ得ルヤ此點ニ付テハ憲法及ヒ議院法中ニ明定スル所ナキカ如シ然リト雖モ議院法第三十四條及ヒ第三十五條ヲ參照スルトキハ無論衆議院ノ解散前ニ未タ議了セザリシ議案ハ悉ク消滅スルモノト斷定セサルヘカラス又前段ノ講義ニ於テ朗讀セシカ如ク其第三十五條ニ依レハ帝國議會閉會ノ場合ニ於テ其未タ議決ニ至ラザリシ議案ハ後會ニ繼續セス又第三十四條ニ依レハ衆議院ノ解散ニ依テ貴族院ニ停會ヲ命シタルトキハ等シク前會ノ議事ヲ繼續セサル旨ヲ規定セリ斯ノ如ク通常閉會ノ場合及ヒ衆議院解散ノ爲メニ貴族院ノ停會ヲ命セラレタル場合ニ於テスラ尙ホ前會ノ議事ヲ繼續セサル以上ハ解散ノ場合ニ至リテハ無論然リト謂ハサルヘカラス立法者カ此點ニ付キ特別ノ規定ヲ設ケザリシハ蓋シ當然ノ事ナルヲ以テナリトナシタルニ依ルヘシ

行政權

第三章 行政權

本章ヲ區別シテ總論及ヒ三節ト爲ス第一節政府第二節行政官廳第三節裁判所

總論

總論

帝國憲法ノ原則ニ依レハ主權ハ天皇ニ屬シ國家ヲ支配スル總テノ權力ハ天皇之ヲ總攬シタマフ而シテ其主權ヲ實行スルカ爲メニ種々ノ機關ヲ設ク即チ立法權ヲ行フニハ帝國議會ヲ設ケ行政權ヲ行フニハ政府其他ノ行政官廳及裁判所ヲ置ケリ但我憲法ニ於テハ行政權ニ關シテハ明細ナル特別ノ規定ヲ設ケス唯纔ニ帝國議會ト政府トノ關係ニ關スル一二ノ規定及國務大臣ノ責任ニ關スル規定並ニ司法權ニ關スル規定ヲ設ケタルノミ然レトモ日本帝國ハ憲法制定ノ後ニ始メテ建設セラレタルモノニ非サルヲ以テ憲法上特別ノ規定アラサルモノト雖モ憲法ノ規定ト抵觸セサルモノハ古來ノ法律若クハ慣例ニ依テ之ヲ決セサルヲ得ス彼行政權ニ關スル事ノ如キ憲法上明細ノ規定ナシト雖モ我國憲法上自ラ其法規ノ存スルモノアリ是ヲ以テ今行政權ノ大体ヲ說クニ當リテハ憲法ノ條項以外ノ事モ亦併ヒテ説明セサルヲ得ス

主權ハ君主之ヲ掌握シ之ヲ實行スルニ付キ法律ヲ制定スルニハ帝國議會ノ協

贊ヲ經又行政權ヲ實行スルニハ此憲法其他ノ法令ヲ以テ設ケタル機關ニ依リ
 テ之ヲ行フ可キモノトセリ夫レ主權ノ作用ヲ分テ立法及行政ノ二ト爲スコト
 ハ前段ニ於テ既ニ詳説シタル所ナリ
 蓋シ立法權ハ臣民ノ遵奉ス可キ一般ノ規定ヲ設クルモノニシテ其規定帝國議
 會ノ協贊ヲ經ルトキハ之ヲ法律ト云ヒ君主單獨ノ意思ヲ以テ之ヲ規定スルト
 キハ緊急勅令又ハ行政命令ト稱ス法律又ハ行政命令ヲ發布シタルノミニテハ
 未タ以テ國家ヲ治ムルニ足ラス主權者ノ定メタル法律命令ヲ執行ス可キ機關
 ナクハ則チ法律命令モ唯一ノ死文タルノミ加之或ハ外國トノ關係ヨリシテ或
 ハ内國ノ安寧秩序ニ關シテ種々ノ事變ノ生シタル場合ニ之ヲ處分スルノ機關
 具備ヒサレハ以テ國家ヲ統御シ其治安ヲ保ツコト能ハサルナリ
 行政權トハ法律命令ノ執行ヲ司リ及萬般ノ國務ヲ處理スルノ權力ヲ云フ而シ
 テ法律命令ヲ執行シ及萬般ノ國務ヲ處理スルニハ之ヲ司ル所ノ機關ナカル可
 カラス帝國憲法其他ノ法律命令ノ規定スル所ニ依リ其最モ主タルモノヲ舉ク
 レハ政府即チ内閣及各省等是ナリ此等ノ官廳中ニモ純然タル行政上ノ事務ヲ

取扱フモノ有リ或ハ裁判事務ヲ執ルモノ有リ裁判ノ制度ハ憲法上之ヲ區別セ
 リ故ニ或學者ハ司法權ト行政權トハ異別ノ性質ヲ有スルモノ、如ク論スト雖
 モ既ニ詳論シタル如ク司法權ハ行政權ノ一部分ニ過キス然ルニ我憲法上其組
 織ニ關シテ特別ノ規定ヲ爲シタル所以ハ蓋シ司法權ハ他ノ行政權ト特別ノ制
 ヲ設クルノ必要アルヲ以テナリ
 政府ハ其職務ノ大体上ヨリ之ヲ論スレハ國家ノ重要ナル事務ヲ處理スルノ官
 府ナリ政府ト行政官廳トハ同一ナルカ如キ外形ヲ存スト雖モ其司ル所ノ事務
 ニ付テ之ヲ觀察セハ自ラ之ヲ區別セサルヲ得ス政府ナル語ヲ廣義ニ解スルト
 キハ總テノ行政官廳及裁判所モ亦之ヲ包含スト雖モ帝國憲法ニ使用スル所ノ
 政府ノ字義ハ決シテ此ノ如キ廣汎ナルモノニ非スシテ行政官廳ノ上ニ立チテ
 國務ヲ處理スル所ノ或人員ノ集合体ヲ指シタルモノナリ我憲法中ニハ所謂内
 閣ナル文字ヲ使用セスト雖モ我國法上内閣ナルモノハ一ノ特別ナル行政機關
 タルコトハ内閣官制ニ依ルモ明カナリ尙此點ニ關スル詳細ノ事ハ政府ノ事ヲ
 説クニ當リテ説明ス可シ

行政官廳ハ現行官制ニ依レハ之ヲ種々ニ區別セリト雖モ要スルニ法律命令ノ範圍内ニ於テ政府ノ命ニ從ヒ行政事務ヲ執行スルモノヲ云フ其事務ハ或ハ内國ノ臣民ニ關スルモノアリ或ハ外國ニ關スルモノアリ

憲法上特別ノ規定ヲ設ケタル裁判所トハ一私人相互ノ間ニ起リタル争及一私人ト行政官廳トノ間ニ起リタル争ニ關シテ法律命令ノ適用ヲ司ル官府ヲ云フ其一人相互ノ間ニ起リタル訴訟ヲ裁斷スルモノヲ司法裁判所トシ一私人ト行政官廳トノ間ニ起リタル訴訟ヲ裁斷スルモノヲ行政裁判所ト稱ス

政府、行政官廳及裁判所ノ構成ニ關シテハ種々ノ問題ヲ生ス可シ即チ或ハ立法上ニ關シ或ハ憲法條章ノ解釋ニ關シテ起ル所ノ問題タル多々ナル可シ此等種々ノ問題ニ付テハ政府、行政官廳及裁判所等ノ事ヲ説クニ當リテ詳説ス可シ

政府

第一節 政府

本節ハ更ニ細別シテ三款ト爲ス第一款政府ノ組織、第二款政府ノ職權、第三款國務大臣ノ責任

政府ノ組織

第一款 政府ノ組織

政府ノ組織ニ關シテハ帝國憲法中特別ノ規定アルヲ見スト雖モ從來ノ慣例及法律規則ニ於テ定ムル所ヲ見ルニ日本帝國ノ政府ハ天皇及內閣ヲ以テ成立スルモノト謂ハサル可カラス憲法ハ屢々政府ナル語ヲ使用セリ此語中ニハ天皇ヲモ包含スルヤ否ヤニ付テハ多少疑ナキニ非スト雖モ政府ノ語ヲ廣義ニ解スルトキハ天皇ト內閣トヲ以テ成立スルモノト謂フモ不可ナキナリ

憲法ノ規定ニ依レハ天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シタマヒ又其行政權ニ關シテハ特ニ制限ヲ設ケサルカ故ニ天皇ハ行政各部ノ首長トシテ政治上ノ全權ヲ有シタマフハ固ヨリ論ヲ俟タス

行政各部ノ首長ト云フコトニ付キ之ヲ論理上ヨリ觀察スレハ多少論究ヲ要スルモノアリ凡ソ行政部ノ首長ハ世襲ノ君主ヲ以テ之ニ當ツルヲ適當トスルカ若クハ人民ノ選舉ニ出テタル者ヲ以テ之ニ任スルヲ可トスルカ若クハ數人ノ集合体ヲ以テ國政ヲ調理セシムルヲ可トスルカノ問題即チ是レナリ古來各國

ノ實例ヲ按スルニ或ハ世襲ノ君主ヲシテ行政部ノ首長ヲシムル者アリ立君國ニ於テハ皆然リトス然レトモ立君國ニ於テモ必スシモ世襲ノ君主ニ限ラス歐洲ノ歴史ニ徴スルニ人民ノ選舉シタル者ヲ以テ一代限ノ君主ト爲シタルコトハ往々之ヲ見ル所ナリ又或特別ノ場合ニ於テハ議院君主ヲ選舉スル旨ヲ規定スル憲法アリ即チ白耳義、西班牙、希臘、リユクサンブル、和蘭、羅馬尼、セルヴィー、瑞典等ノ各國ニ於テハ皇位ニ即ク可キ者ノ絶エタル場合ニ於テハ議院之ヲ選舉ス可キモノトセリ又白耳義、希臘、諾威、羅馬尼等ニ於テハ君主其相續人タル者ヲ指名シタルトキハ上下兩院ノ承諾ヲ要スルモノトセリ殊ニ攝政ノ組織ニ關シテハ白耳義、西班牙、希臘、和蘭、羅馬尼、セルヴィー、ヴェニルタン、ペール等ノ諸國ニ於テハ議院ニ多少ノ權力ヲ與ヘタリ

共和政治ノ行ハル、國ニ於テハ或ハ一人ノ大統領ヲシテ行政部ノ首長ヲシメ或ハ數人ノ集合体ヲシテ行政權ヲ行ハシムルコトアリ今日行ハル、所ノ憲法ニ依レハ共和國ニ於テハ各國概シテ人民又ハ其代表者ノ選舉シタル一人ノ大統領ヲシテ行政部ノ首長ヲシム即チ佛國ノ如キ北米合衆國其他南米諸共

和國ノ如キ皆是ナリ然レトモ其選舉ハ或ハ人民ヲシテ直接ニ之ヲ爲サシメ或ハ國會議員ヲシテ之ヲ選舉セシム又數人ノ集合体ヲシテ行政權ヲ執行セシムルノ制ハ今日ニ於テハ唯瑞西共和國アルノミ今該國行政部ノ組織ヲ見ルニ上下兩院ヨリ選舉セラレタル七人ノ人員ヲ以テ行政部ヲ組織シ其中ヨリ議長及副議長ヲ選任スルモノトセリ又佛國ノ歴史ニ徴スルニ大革命ノ時ニ當リ集合体ノ行政部ヲ組織シタルコトアリ即チ其第一ハ千七百九十二年八月十日ノ法律ヲ以テ假ニ行政權ヲ國務大臣ニ委任シタルモノ是ナリ又其後革命中屢數人ノ委員ヲシテ行政權ヲ執ラシメタルコト有リシカ最後ニ組織シタルハ共和三年ノ憲法ヲ以テ「ダレクトリール」ト稱スル行政委員ニ行政權ヲ委任シタルモノ是ナリ

斯ノ如ク行政首長ノ事ニ關スル規定ハ今日行ハル、憲法ニ付テ之ヲ見ルモ又曾テ行ハレタル憲法ニ付テ之ヲ見ルモ其規定區々一樣ナラス從テ理論上如何ナル方法カ最モ國家ノ政ヲ爲スニ適當ナルカノ問題ヲ生ス可シ

第一ニ數人ノ集合体ニ行政權ヲ委ヌルヲ以テ最モ適當ナリト論スル者ノ說ヲ

按スルニ曰ク共和政体ニ於テモ又君主政体ニ於テモ實際行政部ノ事務ヲ執ル者ハ數人ノ有力ナル國務大臣ニシテ君主ノ如キ或ハ大統領ノ如キハ唯無用ノ長物タルニ過キス縱令君主又ハ大統領ナシト雖モ天下ノ政ヲ爲シ得サルモノニ非ス加之實際事務ニ當ル者ニ十分ノ權力ヲ有セシムルヲ却テ國家ノ利益トス且又立法院ヲシテ此等數名ノ行政委員ヲ選舉セシメ之レニ行政權ヲ委ヌルトキハ立法部ト行政部トノ衝突ナキヲ得ルカ故ニ國家ノ政務圓滑ナルヲ得可シト然レトモ今日マテ歷史上ノ實驗ニ徴シテ之ヲ見ルニ數人ノ集合体ニ行政權ヲ委ヌルノ結果甚タ良好ナラス佛國革命時代ノ歴史ヲ知ル者ハ彼コムミツテ、ド、サルニブユブリツク(公安委員)又ハ「デレク」トワール」ノ時代ニ徴シテ集合体ノ制度ノ行ハル可カラサルヲ知ラン行政部ト立法部トノ間ヲシテ圓滑ニ調和セシムルコトハ或ハ之ヲ爲シ得可シト雖モ立法部ヲシテ行政委員ヲ選舉セシムルニ於テハ行政部ハ常ニ立法部ニ壓倒セラレ行政權ノ獨立ハ得テ期ス可カラス又立法部ノ跋扈ノ盛ナルニ從ヒ其反動トシテ立法部ヲ蹂躪ス可キ人物ヲ行政部ニ養成スルニ至ル可シ且又君主又ハ大統領ヲ以テ行政部ノ首長ト爲

スハ有害ナリト云フモ是亦事實ヲ度外視シタル説ト云ハサル可カラス君主ニセヨ大統領ニセヨ行政上一般ノ事項ハ之ヲ國務大臣ノ處理ニ委ヌルモ内外ニ對シ國家ヲ代表シ又ハ國家重大ノ事件ニ關シテハ君主又ハ大統領ハ其權力ヲ以テ大ニ國務ヲ處理スルモノナリ又行政上ノ事務ヲ取扱フニ當リ之ヲ統一スルモノナクシハ責任自ラ薄ク行政上ノ作用機敏ナル能ハス又從テ其事務自ラ緩漫ニ流ル、ニ至ル可シ凡ソ行政上ノ事ハ殊ニ統一機敏ヲ尊フヲ以テ必ス行政ノ中樞ト爲ル可キモノナカル可ラス而シテ此事タル之ヲ集合体ノ制ニ求ム可カラサルナリ故ニ其結果良好ナルヲ得サルナリ

第二ニ一人ノ大統領ヲ選舉シ之ニ行政權ヲ委ヌルヲ以テ可トスル論者ノ説ニ曰ク凡ソ行政首長ノ任タル極メテ重ク決シテ之ヲ天運ニ放任ス可キモノニ非ス世襲ノ君主ヲシテ行政首長タラシムルトキハ其暗愚ナルモ賢明ナルモ必ス之レニ委ヌルニ國家最上ノ權ヲ以テセサル可カラス是決シテ其當ヲ得タルモノニ非ス行政首長タル資格ヲ有スルニハ政治上ノ經驗ヲ要シ又才學ヲ備ヘサル可カラス然ルニ世襲ノ君主ヲシテ之ニ當ラシムルトキハ或ハ幼

者ヲシテ之レニ當ラシメサル可ラサルコトアルヘク或ハ不適任ノ者ヲシテ君位ニ即カシメサルヲ得サルコトアル可シ從テ種々ノ弊害ヲ生ス可シ即チ或ハ君主ヲ擁シテ私慾ヲ逞ウスル者アルニ至ル可ク或ハ之ヲ廢シテ君位ヲ覬覦スル者出テ、國家ノ亂ヲ來スニ至ルモ未タ知ル可カラス故ニ眞ニ行政部ノ首長タル可キ資格ヲ有スル者ヲ以テ之ニ任セサルヲ得スト

今論理上ヨリ之ヲ觀察スルトキハ大統領ヲ選舉シ之ヲ以テ行政部ノ首長ト爲スハ極メテ善美ナル方法ナルニ似タリ何トナレハ國家ノ首長タル者ハ才學經驗ニ富ムヲ要シ選舉ハ其目的ヲ達スルニ一良法タルヲ得ケレハナリ然リト雖モ今日マテ行ハレタル所ニ依テ之ヲ視ルニ大統領ニセヨ君主ニモセヨ之ヲ選舉スルトキハ往々弊害ヲ醸シタルコトハ其實例ニ乏シカラス君主ヲ選舉シタル實例ハ波蘭及匈牙利等ノ歴史ニ於テ見ル所ニシテ又大統領ヲ選舉スルノ制ハ今日各共和國ノ皆採用スル所ナリ而シテ選舉ヲ以テ行政部ノ首長ヲ任スル制ニ於テ生ス可キ最大弊害ハ其選舉セラレタル大統領カ往々公平無私ナルコト能ハサルコト是ナリ蓋シ選舉ノ制ハ必ス黨派ヲ生スルモノニシテ時トシ

テハ各黨派一致ノ選舉ニ出ツルコト無キニ非サルモ通常ノ場合ニ於テハ比較的多數ヲ有スル黨派ニ依テ選舉セラレ、例トス從テ一國行政部ノ首長タルモノニシテ往々國民全体ノ利害ヨリモ寧ロ一黨一派ノ利益ヲ計リ或ハ自己ノ選舉ニ援助シタル黨派ノ刺撃ヲ受ケテ施政上ニ公平ヲ失スルノ嫌ナキ能ハス加之大統領ヲ選舉スルトキハ其任ニ期限ヲ定ムルヲ以テ例トスルカ故ニ滿期ノ前ニ至レハ自然國事ヲ等閑ニ附スルノ傾向アリ又其選舉ノ爲メニ屢國民ヲ馳テ政事ニ奔走セシメ商工業其他萬般ノ事業ヲ抛擲セシムルハ勞免ル可カラサル所ナリ要スルニ行政首長選舉ノ主タル弊言ハ其首長タル者代表者タル任務ヲ盡サス一黨一派ノ代表者ナルカ如ク黨派ノ利害ヲ先ニシ國家全体ノ利害ヲ後ニスルノ恐アルコト是ナリ

第三ノ方法ハ世襲ノ君主ヲシテ行政權ヲ有セシムルニ在リ此方法ヲ熱心ニ主張スル者ノ說ニ曰ク凡ソ一國ノ制度ニハ必ス獨立不羈ニシテ其根本ト爲ス可キ機關ナカル可カラス其機關タルニハ世襲ノ君主ニ若ク者ナカル可シ蓋シ世襲ノ君主アルトキハ内亂外寇ニ際スルモ國民ヲシテ其適從スル所ヲ知ラシム

ルニ足ル可ク又大統領選舉ノ爲メニ屢々國民ヲ騷擾セシメ或ハ一時ノ感情ニ制セラレテ利慾心ヲ懷ケル冒險者ヲシテ政權ヲ握ラシムルノ憂ナク殊ニ代議政治ノ行ハル、國ニ於テハ世襲君主ノ制ハ最モ善美ナル結果ヲ得可シ何トナレハ君主ハ自己ノ地位ニ關シテハ毫モ顧慮スル所ナキヲ以テ黨派ノ利害ニ牽カル、コトナク政務ハ一ニ國家臣民ノ利害ヲ以テ之ヲ判斷シ之ヲ行フコトヲ得可ケレハナリ

以上論スル如ク何レノ方法ニ於テモ必ス利害ノ相伴フモノニシテ時ト所トヲ論セズ絕對的ニ或方法ヲ善良ナリト斷言スルコトヲ得ス其國ノ成立歴史及其進歩ノ程度等ハ行政部ノ組織ニ大ナル關係ヲ有スルモノニシテ今日マテ歐米各國ノ實驗シタル方法ヲ以テ之ヲ視レハ代議政体ノ行ハル、國ニ於テハ世襲ノ君主ニ行政權ヲ委ヌルヲ以テ最モ良好ナル結果ヲ生シタルモノ、如シ日本帝國ノ政府ハ天皇ト内閣トヲ以テ之ヲ組織スルモノナルコトハ既ニ之ヲ論シタリ而シテ天皇ノ事ニ付テハ既ニ之ヲ詳悉シタルヲ以テ今復之ヲ論スルノ要ナカル可シ故ニ以下内閣ノ事ニ付キ少シク説ク所アラントス

現行内閣ノ制ハ明治二十二年十二月勅令第三百三十五號ヲ以テ制定シタル内閣官制ヲ以テ之ヲ定メタリ而シテ此内閣官制ニ依レハ内閣ハ各國務大臣ヲ以テ之ヲ組織スルモノト爲セリ法令ノ明文ヲ以テ内閣ノ組織職權ヲ規定スルハ他國ニ多ク其例ヲ見サル所ナリ蓋シ憲法政治ノ行ハル、國ニ於テハ實際必ス内閣及内閣員ナルモノアリト雖モ法令ヲ以テ其組織及其職權ヲ規定シタルモノハ殆ント之アルヲ見ス唯單ニ或點ニ付テ内閣員ハ云々ノ職權アリ等ノコトハ適シ法令中ニ散見スルコトナキニアラス即チ瑞典國ニ於テ多少憲法ヲ以テ之ヲ規定シ又リニグサンプール、諸威サキソン、ポルテンベール、葡萄牙、羅馬尼、和蘭等ニ於テモ亦多少ノ規定ナキニアラス然レトモ皆漠然タル一二ノ規定ニ過キサルナリ又其内閣員ノ數モ各國一定セズ英國ハ十四人ヲ以テ組織シ普魯西ハ八人、埃地利希臘ハ七人ヨリ成立セリ又一省ノ長官ニアラス單ニ國務大臣タル資格ノミヲ以テ内閣員タルコトヲ得ルハ埃地利ノミ尤モ佛國ニ於テハ嘗テ千八百三十年及千八百五十二年ノ憲法ノ下ニ於テハ諸官廳ノ長官ニ非スシテ内閣員タルモノアリキ我國ニ於テハ内閣總理大臣及樞密院議長ハ諸官廳ノ長官ニ

非スシテ内閣員ナリトス

斯ノ如ク特ニ内閣ノ制ヲ設ケスト雖モ暗ニ内閣ノ存立ヲ認ムルコトハ各國皆然リトス殊ニ白耳義、西班牙、羅馬尼セルヴィヤ、瑞典等ニ於テハ行政部ノ首長ニ缺員アルトキハ行政權ハ内閣之ヲ行フトノ規定ヲ設ケテ、瑞典、挪威、和蘭、ビュルゲン、ベール等ニ於テハ國家重要ノ事件ニ付テハ必ス内閣ノ意見ヲ諮フコト、セリ又白耳義、希臘、伊太利、諸威、普魯西、羅馬尼等ニ於テハ君主未成年又ハ無能力ナルトキハ内閣ノ命令ヲ以テ議院ヲ召集スルコトヲ得可キ旨ヲ規定シ法律上内閣ナルモノヲ認ムト雖モ其組織權限等ハ之ヲ規定セス佛國ニ於テモ亦内閣ナル特別ノ官府ノ組織ニ付キ特別ナル法律ノ規定アルヲ見サルナリ

我國ニ於テ内閣ニ關シテ特別ノ規定アル所以ノモノハ由來ナキニ非ス今其由來ヲ按スルニ明治元年四月官制ヲ定メ太政官ヲ置キ總裁、議定、參與等ノ官ヲ設ケ翌年官制ヲ改革シ大寶令ニ依リ太政官ノ官制ヲ確定シタリ而シテ大寶令ノ制ハ專ラ唐ノ制ニ模擬シタルモノナリトス此大寶令ニ依リテ制定シタル太政官ノ制ハ明治十八年マテ實行セラレ其間多少ノ改定アリ殊ニ六年五月ニ大納

言、中納言、少納言等ノ官ヲ廢シ太政大臣、左大臣、右大臣及參議等ノ官ヲ設ケテ内閣ヲ組織シタリ蓋シ内閣ナル語ハ此官制改革ノ時ニ始マルト云ヘリ而シテ今日ノ内閣ハ實ニ當時ノ太政官ノ遺制ナリトス

明治十八年十二月ノ改革ニ於テ太政大臣、左大臣、右大臣、參議及各省卿ノ職制ヲ廢シ始メテ内閣總理大臣及宮内、外務、內務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、逓信ノ諸大臣ヲ置キ内閣總理大臣及九大臣(宮内大臣ヲ除ク)ヲ以テ所謂内閣ナルモノヲ組織セリ而シテ明治二十三年十二月ニ至リ勅令第百三十五號ヲ以テ其官制ヲ制定シタリ

内閣組織ノ沿革ハ以上述ヘタルカ如シ而シテ内閣組織ニ關シテハ尙多少研究ヲ要スルモノ有リ即チ内閣ハ如何ナル種類ノ人物ヲ以テ之ヲ組織セサル可カラサルヤ是レナリ詳言スレハ代議政体ノ行ハル、國ニ於テハ内閣ハ必ス兩院議員ヲ以テ之ヲ組織スルヲ可トス可キヤ或ハ兩院外ノ者ヲ以テ之ヲ組織セサル可カラサルカ又内閣員ハ全ク國家首長ノ選任ニ放任ス可キカ或ハ其他ニ内閣員撰定ノ方法アリヤ是レ聊カ研究ヲ要スル所ノ問題ナリトス

蓋シ帝國憲法ハ此點ニ關シ特別ノ規定ヲ爲サス官吏ヲ任命スル大權ハ一ニ之ヲ君主ニ屬シ殊ニ内閣員ノ如キハ如何ナル人ヲ以テ之ニ充ツルモ君主ノ權内ニアリテ法律上官吏タル資格ヲ禁セラレタル者ヲ除クハ勿論ナリ何等ノ制限ヲモ設ケス故ニ之ヲ議員ヨリ舉グルモ議院外ヨリ任スルモ可ナリ今日マテノ實例ヲ見ルニ衆議院議員ニシテ入テ内閣員ト爲リタル者ナキモ貴族院議員ニシテ國務大臣ヲ兼テタル者アリ斯ノ如ク我憲法上内閣員タル人ニ付テ敢テ制限ヲ設クルコトナシト雖モ外國ノ憲法ニ於テハ此事ニ關シテ多少ノ制限ヲ設ケタルモノ有リ請フ左ニ一二外國ノ例ヲ示サム

英國ニ於テハ格別制限アルニアラスト雖モ議會議員ニシテ内閣員ニ舉ケラレタルトキハ當然議員ノ資格ヲ失フカ故ニ必ス再選舉ヲ行ハサル可カラズ但シ再選舉ニ當選シタルトキハ議員ト内閣員トヲ兼ヌルコトヲ得佛國ニ於テハ之ニ反シ議員ト内閣員トヲ兼ヌルハ全ク自由ニシテ爲メニ再選舉ヲ行フコトナク又議員外ノ者ヲ以テ内閣員トナスモ大統領ノ自由ニアリ西班牙ニ於テハ特ニ上下兩院議員ヨリ内閣員ヲ採ルコトヲ許ストノ明文ヲ掲ゲ又或國ニ於テハ

内閣員ト爲ル年齢ニ制限ヲ附セリ即チ諾威ハ三十歳以上墨西哥ハ二十五歳以上タルヲ要ス又サウセン等ニ於テハ國教ヲ信スル者タルコトヲ要シ墨西哥葡萄牙瑞典等ニ於テハ生レナカラニシテ國民タル分限ヲ有スル者タルヲ要シ歸化人ヲ以テ國務大臣ト爲スコトヲ許サス之ニ反シテ白耳義ノ如キハ大歸化ニヨリ國民ノ分限ヲ得タル者ハ國務大臣タルコトヲ許シ又歸化後若干ノ年數ヲ經タル者ニ非サレハ國務大臣タルコトヲ得ストノ制限ヲ設ケルモノアリ或國ニ於テハ皇族ハ國務大臣ト爲ルコトヲ得スト爲セリセルヴヤ、白耳義、希臘、羅馬尼等はナリ之ニ反シテ丁抹、諾威、和蘭、瑞典ニ於テハ皇太子ハ當然内閣ニ列スルモノトシ(但其表決ノ數ニ加ハルコトヲ得ス)諾威、瑞典ニ於テハ親子同時ニ内閣員タルコトヲ得スト規定セリ今又佛國ニ於テ古來行ハレタル例ヲ案スルニ亦區々トシテ一定ナラス或ハ君主ノ意ニ放任シテ之ヲ其自由ト爲シタルコト有リ或ハ必ス議院外ノ者ヲ以テ之ニ任ス可キモノトシタルコト有リ又或ハ其年齡ヲ制限シタルコト有リ

論理上ヨリ觀察ヲ下セハ内閣員ハ必ス議院内ノ者ヲ以テ之ニ充ツ可キヤ又ハ

必ス議院外ノ者ヲ以テス可キヤ若クハ之ヲ行政首長ノ隨意ノ選擇ニ放任スルヲ適當トス可キヤ

或論者ノ説ニ依レハ内閣員ハ必ス議院外ノ者ヲ以テ之ニ任スルヲ可トスト云ヘリ此説ハ彼ノモンテスキュー氏ノ三權分立説ニ起因シ行政部ト立法部トハ互ニ分離孤立セシムルヲ要ストノ意ニ出テタルモノニシテ佛國ニ於テハ千七百八十九年ノ大革命ノ時ニ當リ此問題ニ付激論ノ末遂ニ議院外ノ者ヲ以テ之ニ充ツ可キヲ議決シタルコトアリ然レトモ必ス議院外ノ者ヲ以テ内閣員ト爲サシムル可カラストノ説ハ實際弊害ヲ醸生スルノ虞アリ何トナレハ代議政体ノ行ハルニ國ニ於テ選舉ノ法其宜ヲ得ハ國內最モ有爲ノ人物ハ擧テ之ヲ議院内ニ蒐集セルモノト假定スルコトヲ得可シ然ルニ必ス議院外ノ者ヲ以テ内閣員ト爲ス可シトセハ如何ニ才學ニ富ミ有爲ナル人物ナルモ之ヲ議院ヨリ擧テ國政ヲ執ラシムルコト能ハス從テ善美ナル政ヲ施スコトヲ得サルヘク又常ニ議院外ノ者朝ニ立ツトキハ議會ト政府トノ關係上圓滑ナル能ハサルノ恐アリ國民ノ意思ヲ探知スルコトモ自ラ困難ナラサルヲ得ス佛國革命ノ當時種々ノ情

實ヨリ議員ハ内閣員ヲ兼ヌルコトヲ得ストノ議決ヲ爲シタルヲ以テ言フ可カラサル害毒ヲ貽シタリ蓋シ當時ノ議院ハ有爲ノ人物ヲ網羅シ殊ニミラボー氏ノ如キハ當時第一流ノ人傑タリシナリ故ニ若シ此等ノ人物ヲ擧ケテ政務ヲ執ラシムレハ爾後ノ大亂モ恐クハ惹起サ、リシナラン然ルニ種々ノ情實ト一種ノ學説ニヨリ斯ル議決ヲ爲スニ至リタリ千八百五十二年ナポレオン第三世ノ憲法ノ下ニ於テモ亦之ト同一ノ規定ヲ設ケタリト雖モ未タ數年ヲ出テスシテ種々ノ弊害ヲ生シタルヲ以テ千八百六十年以後ハ之ヲ改メタリ

或論者ハ又之ニ反シ内閣員ハ必ス議院内ヨリ之ヲ任用ス可シト主張ス蓋シ其理由ヲ按スルニ凡ソ議院政治ノ行ハルニ國ニ於テハ多數ノ政黨カ入テ内閣ヲ組織スルヲ當然トス故ニ内閣員ハ多數ノ政黨員ヨリ任用ス可シト云フニ在リ此説モ亦一理アルニ似タリト雖モ未タ弊害ヲ免ル能ハス何トナレハ此説ノ如クセハ議院外ニ有爲ナル人物アルモ之ヲ擧テ内閣員ト爲スコトヲ得サレハナリ夫レ選舉ノ法如何ニ完全善美ナルモ國內有爲ノ人物ヲ悉ク議院ニ網羅スルハ到底絶望ノコトニシテ或ハ自ラ議員タランコトヲ欲セサルモノアリ或ハ之

ヲ欲スルモ選舉ニ漏ル、コトアリ故ニ内閣員ハ必ス議院内ヨリ之ヲ舉クルコトヲ要セハ此等ノ人物ヲ舉テ政務ニ當ラシムルコトヲ得ス殊ニ陸海軍々人ノ如キハ身ヲ政治ノ外ニ置クモノナレハ此說ノ如クセハ有爲ノ人物ヲ舉テ陸海軍ノ長官ト爲スコト能ハサルニ至ル可シ
以上論スル如ク内閣員ハ必ス議院外ノ者ヲ以テ之ニ任スルモ又必ス議院内ノ者ヲ以テ之ニ任スルモ共ニ弊害アルヲ免カレヌ故ニ我憲法ノ如ク其任用ハ一ニ之ヲ君主ノ撰擇ニ任シ敢テ之ヲ制限セサルヲ最モ優レリトス

第二款 政府ノ職權

政府ノ職權

我國ノ政府ヲ組織スルモノハ天皇及内閣ノ二ニシテ而シテ天皇ニ屬スル行政上ノ大權ハ既ニ第一章ニ於テ之ヲ詳悉シタルヲ以テ此ニ之ヲ再說セス唯内閣及内閣ヲ組織スル所ノ國務大臣ノ職權ヲ說クニ止メントス
明治二十二年勅令第三百三十五號ヲ以テ規定シタル内閣官制ニ依レハ内閣ハ國務大臣ヲ以テ之ヲ組織シ又別ニ内閣總理大臣ナルモノヲ置キ之ニ特別ノ職權

内閣ノ職權

ヲ與ヘヌリ又該官制ニ依レハ内閣全体ニ屬スル職權ト内閣總理大臣及各國務大臣ニ屬スル職權トヲ規定セリ各國務大臣ハ各省長官トシテ各特別ナル職權ヲ有スレトモ此等ノ職權ヲ詳說スルハ行政法ノ範圍ニ屬スルヲ以テ此ニハ唯國務大臣トシテ一般ニ有スル所ノ職權ノミヲ說ク可シ

第一 内閣ノ職權

内閣ナル一種特別ノ政務機關全体ニ屬スル職權ニ付テハ憲法中特ニ明文ヲ掲ケス其組織ト共ニ明治二十二年勅令第三百三十五號ヲ以テ之ヲ規定セリ該勅令ニ依レハ政府ノ事務ニシテ必ス内閣ノ議ニ附セサルヲ得ケルモノト主務大臣ノ意見ニ從ヒ内閣ノ議ニ附スルコトヲ得ルモノトニアリ第一ニ屬スルモノハ即チ内閣全体カ開議ニ附セシムルノ權ヲ有スルモノニシテ其事項ハ内閣官制第五條ニ列記セリ即チ(第一)法律案及豫算決算案(第二)外國條約及重要ナル國際條件(第三)官制又ハ規則及法律施行ニ係ル勅令(第四)諸省ノ間主管權限ノ爭議(第五)天皇ヨリ下附セラレ又ハ帝國議會ヨリ送致スル人民ノ請願(第六)豫算外ノ支出(第七)勅任官及地方長官ノ任命及進退等ニシテ其他各省主任ノ事務ニ付キ

高等行政ニ關係シ事体稍シ重キモノハ亦閣議ヲ經ヘキモノトセリ此等ノ事項ニ付テハ必ス閣議ヲ經可キモノナルカ故ニ主任大臣之ヲ提出セス又ハ總理大臣之ヲ閣議ニ付セサルトキハ内閣大臣ハ其閣議ニ附ス可キコトヲ請求スルヲ得可シ

國家重大ノ事件ヲ國務大臣全体ノ會議ニ附スルコトハ各國共ニ然リ然レトモ法律上明文ヲ以テ斯々ノ事項ハ必ス閣議ニ附ス可シトシタルハ外國ニ於テ稀ニ見ル所ニシテ余ノ記憶スル所ニ依レハ之ニ類似セル制度ノ行ハルハ唯瑞典ノ一アルノミ該國ニ於テモ我國ノ如ク内閣ト稱スルモノアルニ非ス唯之ニ類似セル政務機關アリテ之ヲ「コンセイユ、デター」(參議院)ト云ヒ(佛國ニテ「コンセイユ、デター」ト稱スルモノハ通常參事院ト譯スレトモ瑞典ノ「コンセイユ、デター」ハ參議院ト譯スルヲ適當トス)十人ヲ以テ之ヲ組織シ其内七人ハ國務大臣ヲ以テ之ニ充テ他ノ三人ハ高等官其他適當ノ者ヨリ君主之ヲ選任シ重要ナル國務ハ悉ク之ヲ此院ノ議ニ附スルコトヲ要スルモノトセリ但外交及軍事ハ之ヲ除ク此等ハ君主ノ大權トシテ君主之ヲ親裁スルモノナレハナリ(該國憲法第七條

第二 内閣總理大臣ノ職權

内閣總理大臣ノ職權ニ關シテハ明治二十二年勅令第三百三十五條第二條乃至第五條ニ之ヲ規定セリ即チ第二條ニハ内閣總理大臣ハ各大臣ノ首班トシテ機務ヲ奏薦シ旨ヲ受ケテ行政各部ノ統一ヲ保持ストアリテ唯其大体ノ職權ヲ規定シタルノミ又第三條及第四條ハ其重大ノ職權ヲ認メ即チ内閣總理大臣ハ必要ト認ムルトキハ行政各部ノ處分又ハ命令ヲ中止セシメテ親裁ヲ待ツコトヲ得又法律及一般ノ行政ニ關スル勅令ニハ必ス副署セサル可カラストセリ副署ハ内閣總理大臣ノ義務ナレトモ一面ヨリ之ヲ見レハ又其職權ト謂ハサルヲ得ス何トナレハ憲法上内閣總理大臣ノ副署ナキトキハ其法律勅令ハ無効ノモノナレハナリ

第三 國務大臣ノ職權

國務大臣トシテ有スル職權ニ憲法上ニ關スルモノト行政上ニ關スルモノ及立法上ニ關スルモノトノ三種アリ
國務大臣ノ憲法上ノ職權トハ憲法カ國務大臣ニ與フル所ノ職權ヲ云フ今憲法

内閣總理大臣ノ職權

國務大臣ノ職權

憲法上ノ職權

ヲ通讀スルニ國務大臣ニ關スル規定ニアリ第五十四條及第五十五條是ナリ第五十四條ニ依レハ國務大臣ハ何時タリトモ各議院ニ出席シ及發言スルコトヲ得ト規定セリ此規定ニ依レハ何時ニテモ議院ニ出席シ及發言スルコトヲ得ルニハ唯國務大臣タルヲ以テ足レリトシ議員ヲ兼ヌルコトヲ要セス國務大臣ニ此ノ如キ特權ヲ與フルハ各立憲國普通ノ例ナリト雖モ或ハ又此權利ヲ國務大臣ニ與ヘサルモノアリ北米合衆國ノ如キ即チ是ナリ又或國ニ於テハ議院ノ要求アルトキハ國務大臣ハ必ス出席セサル可カラサルモノトセリ澳地利、白耳義、希臘、匈牙利、リノ、サ、ン、プ、ール、普魯西、羅馬尼、ヒ、ル、ビ、ヤ等皆是ナリ

又第五十五條ニ曰ク「國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其責ニ任ス、凡テ法律勅令其他國務ニ關ル詔勅ハ國務大臣ノ副署ヲ要ス」ト是國務大臣ノ責任ヲ規定シタルモノナレトモ亦其職權ヲモ規定スルモノト謂フ可シ即チ第一項ハ天皇ヲ輔弼スル權利ヲ規定シ國務大臣ノ責任ノ事ハ特ニ重要ナルヲ以テ次節ニ之ヲ説明ス可シ第二項ハ法律勅令及詔勅ニ副署スル權利ヲ規定スルモノニシテ此副署ノ權ハ其最モ重大ナルモノトス何トナレハ若シ其副署ナキトキハ法律勅令其

行政上ノ職權

他國務ニ關ル詔勅ト雖モ憲法上有効ナラサレハナリ

國務大臣副署ノ制ハ外國ノ憲法モ亦概シテ之ヲ認ムト雖モ或ハ之ヲ認メサルモノアリ又或ハ特ニ之ヲ省キタルモノアリ佛國ノ憲法ヲ按スルニ現行憲法ニ依レハ大統領ノ命令其他ノ行爲ニハ必ス國務大臣ノ副署ヲ要スルモノトシ又大革命ノ初千七百八十九年十月一日ノ法律及其後ノ憲法モ亦多クハ此例ヲ認メタルモ千八百十四年及千八百三十年ノ欽定憲法ニハ之ヲ認メタル明文ナシト雖モ實際ニ於テハ之ヲ行ヒタリナボレオン第三世ノ憲法ニ於テハ特ニ之ヲ削除シタリ蓋シ當時國務大臣ハ唯君主ニ對シテノミ其責ニ任スルモノトシタルヲ以テ敢テ其副署ヲ要セサリシナリ然レトモ其他ノ各國ノ憲法ハ皆此制ヲ認メリ

國務大臣ノ行政上ノ職權ニ付テハ憲法中唯第五十五條ノ規定アルノミ即チ天皇ヲ輔弼シ其責ニ任スルコト是ナリ又國務大臣ハ官制ノ規定ニ從ヒ各省ノ長官トシテ職權ヲ有セリ此他國務大臣ノ行政上ノ職權ハ(第一)内閣ノ一員トシテ閣議ニ參與スルコト(第二)法律又ハ勅令ノ範圍内ニ於テ其主任ノ行政上ノ事務

ヲ處理スルコトノ二トス外國憲法ニ徵スルニ國務大臣ノ行政上ノ職權ヲ明ニ規定セルモノ稀ニシテ唯國務大臣ハ法律勅令ノ執行ニ任スト云フカ如キ漫然ナル規定アルニ過キス

立法上ノ職權

ハ其職權ニ依リテ
ハ其職權ニ依リテ
ハ其職權ニ依リテ
ハ其職權ニ依リテ

國務大臣ハ又立法上ノ職權ヲ有セリ立法上ノ職權トハ或ハ立法者ノ委任ヲ受ケテ命令ヲ發シ又ハ勅令ニヨリ或特別ノ命令ヲ發スルヲ云フ明治二十三年三月勅令第五十號各省官制通則第四條ニ各省大臣ハ其主任ノ事務ニ付其職權若クハ特別ノ委任ニ依リ法律勅令ノ範圍内ニ於テ法律勅令ヲ施行シ又ハ安寧秩序ヲ保持スル爲メニ省令ヲ發スルコトヲ得ト規定スル即チ是ナリ而シテ此ニ所謂立法權トハ法律ヲ制定スルノ意ニ非スシテ法律ノ字義ヲ廣ク解釋シ總テ人民ニ遵由ノ義務アル命令ヲ發スルノ權ヲ指シタルナリ

國務大臣ノ責任

第三款 國務大臣ノ責任

憲法第五十五條ニ曰ク國務大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其責ニ任スト是國務大臣ノ責任ヲ規定シタルモノニシテ其責任ノ性質及何人ニ對シテ之ヲ負フモノナルカ

責任ノ性質

何人ニ對シテ責任ヲ負フヤ

ニ付テハ大ニ疑義ノ存スルモノアリ蓋シ學者間ノ一大論點タリ國務大臣其人ノ負フ可キ責任ノ種類タルニニシテ止マラス若シ刑事上ノ犯罪アルトキハ刑事上ノ責任ヲ負フ可ク國務大臣タルノ界限ヲ以テ不法ノ處爲ニ依リ一箇人ニ損害ヲ蒙ラシムルトキハ民事上ノ責任ヲ負ハサル可カラス此他尙ホ政事上ノ責任ナルモノアリ政治上ノ責任トハ國務大臣政治上ノ失策アルトキ即チ其職權内ノ行爲ニ因リテ國家ニ損害ヲ蒙ラシメタルトキニ負フ所ノ責任ヲ云フ國務大臣ハ此等種々ノ責任ヲ負フト雖モ第五十五條ニ規定スル所ノ責任ハ右何レノ種類ニ屬スルモノナルカ憲法ハ之ヲ明言セスト雖モ其政治上ノ責任ヲ規定シタルモノナルハ蓋シ疑ヲ容ル可カラス何トナレハ國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其責ニ任スト記スルヲ以テ之ヲ視レハ其責任ノ輔弼ニ關スルモノナルコト明カナレハナリ伊藤伯ノ憲法義解モ亦說テ曰ク大臣ノ責任ハ政務上ノ責ニシテ刑事及民事ノ責ト相關涉スルコトナク又相牴觸シ及乘除スルコトナカルヘキナリト

ハ何人ニ對シテ其責ニ任ス可キカ今日一般ニ行ハル、說ニ依レハ天皇ニ對シテ其責ニ任ス可キモノナリト云ヘリ伊藤伯ノ憲法義解ニ曰ク「我カ憲法ハ左ノ結論ヲ取ルモノナリ第一大臣ハ其ノ固有職務ナル輔弼ノ責ニ任ス而シテ君主ニ代リ責ニ任スルニ非サルナリ第二大臣ハ君主ニ對シ直接ニ責任ヲ負ヒ又人民ニ對シ間接ニ責任ヲ負フ者ナリ第三大臣ノ責ヲ裁判スル者ハ君主ニシテ人民ニ非サルナリ何トナレハ君主ハ國ノ主權ヲ有スレハナリ云々ト而シテ其理由ハ畢竟大臣ヲ任免スルハ一ニ主權者タル天皇ノ大權ニ屬シ天皇之ヲ任命スルニ由ルト云フニ在リ然レトモ此說果シテ當ヲ得タルモノト謂フ可キカ夫レ國務大臣ハ爾他ノ官吏ト均シク天皇之ヲ任命シ天皇ノ一官吏タリ故ニ官吏トシテハ之ヲ任命シタル天皇ニ對シ責任ヲ有スルハ固ヨリ論ヲ俟タスト雖モ憲法上特ニ明記スル所ノ責任ハ果シテ此ノ如キ單純ナルモノタルニ過キサルカ立憲政体ノ各國ニ行ハル、ニ至リシ歴史上ノ理由及論理上ヨリ之ヲ視レハ國務大臣ノ責任ハ決シテ伊藤伯ノ云フカ如キモノナラサルヲ知ル大臣任命ノ權ハ各立憲國共ニ之ヲ君主又ハ大統領ニ屬セリ然レトモ之カ爲メ

英國ノ原則

ニ君主又ハ大統領ニ對シテノミ政治上ノ責任ヲ有スルモノトセス必ス議院ニ對シテモ亦之ヲ負フモノト爲セリ蓋國務大臣ノ責任ヲ以テ單ニ君主又ハ大統領ニ對スルモノトセハ則チ國務大臣ハ責任ヲ有セサルトモ異ナルコトナカル可シ何トナレハ國務大臣カ特ニ首長ノ命ニ因テ行ヒタル事ニ關シテハ自ら其責ニ任ス可キ理由ナカル可ク而シテ國務大臣カ國家重大ナル政務ヲ處理スルニ當リテハ必ス國家ノ首長ニ奏請シテ其裁可ヲ仰カサルヲ得ス是亦其命ニ因テ事ヲ行フト理ニ於テ異ナルコトナク而シテ國務大臣責任問題ノ生スルハ常ニ此等ノ場合ナリ然ルニ第五十五條ニ依レハ君主ノ命ニ因ルト否トヲ問ハス國務大臣ハ其責ニ任ス可キモノトセリ以テ此說ノ論理ヲ貫カサルヲ知ル可シレ代議政体ノ母國タル英國ニ於ケル國務大臣責任ノ原則ヲ按スルニ國務大臣ハ國務大臣タル資格ニ於テ責任ヲ有スルニ非ス國務大臣トシテ爾他ノ官吏ト同シク責任ヲ有スルノ外特ニ政事上ノ責任ヲ負フ所以ノモノハ君主ノ輔弼者ナルニ由ルモノトセリ政府ニシテ若シ不法ノ行爲若クハ國家ニ損害ヲ與フハキ行爲ヲ爲スニ於テハ何人カ其行爲ニ付テ責任ヲ負フ者ナカル可カラス而シテ

其責任ハ君主ヲシテ之ヲ負ハシム可キカ又ハ君主ニ此ノ如キ不法行為ヲ爲サシメタル大臣ヲシテ之カ責ニ任セシム可キカノ問題ヲ生ス而シテ此政治上ノ責任ハ君主自ラ其行為ヲ爲シタルト各大臣ノ之ヲ爲シタルトヲ問ハス國務大臣ヲシテ之ヲ負ハシムルヲ原則トス蓋シ大臣ヲシテ其行為ニ付自ラ之カ責ニ任セシムルハ固ヨリ當然ノ事ニシテ特ニ説明ヲ俟タス又君主親ラ爲シタル事ニ付テモ亦國務大臣ヲシテ之カ責ニ當ラシムル所以ノモノハ畢竟君主ヲシテ國民ノ總府ヲラシメサルニ在リ夫レ君主ノ國務ニ當ルヤ事細大トナク悉ク國務大臣ニ諮詢シ而後之ヲ行ヒ敢テ自ラ決シ自ラ之ヲ行フヲナシ然ルニ其事ニ付キ君ヲシテ主自ラ其責ニ任セシムルトキハ即チ君主ハ臣民ニ對シテ直接ニ其責ヲ負ヒ常ニ國民ノ總府ト爲ルノ虞アリ是國務大臣ヲシテ君主ノ行為ニ付テモ亦其責ニ任セシムル所以ナリ又君主ハ神聖ニシテ侵ス可カラサルモノナルカ故ニ假令君主ハ責任ヲ有スルモノトスルモ殆ト無責任ナルト異ナラス依テ若シ國務大臣ハ唯君主ニ對シテノミ其責ニ任スルモノトセハ則チ亦殆ト無責任ニ歸シ監督ナキ專制政府ト爲ルナキヲ保セス是ヲ以テ英國ノ如キ立憲國ノ

はれ上ノ但ト
ナニトシテス

大臣責任
ノ原則ノ
由來發達

原則トシテ國務大臣ハ唯君主ニ對シテノミナラス君主ニ代リ一般國民ニ對シテ亦其責ニ任スルモノトシタルナリ蓋シ君主獨裁政体ト立憲政体トノ重要ナル差異ハ實ニ此ニ在テ存スルナリ
今又各國憲法史ニ就テ大臣責任ノ原則ノ由來及發達ノ沿革ヲ考フルニ英國ニ於テ國務大臣カ君主ニ代リ其責ニ任スルノ原則ハ第十四世紀ノ頃ヨリ既ニ行ハレタリ然レトモ當時ハ未タ今日ノ如ク絶對的ニ行ハレタルニ非スシテ十七世紀ノ頃ヨリ漸次此原則確立スルニ至リタルモ其完全ナル原則ト爲リタルハ第十八世紀以後ニアリトス
又佛國ニ於テ大革命ノ頃ヨリ學者政治家往々大臣責任ノ原則ヲ唱ヘタリシモ未ダ之ヲ實行スルニ至ラス殊ニナポレオンノ時代ニ在テハ唯君主ニ對シテノミ責ニ任スルノ原則行ハレタリ千八百十四年ノ欽定憲法ニハ國務大臣ハ責任ヲ有ストノ原則ヲ規定シタリシモ何人ニ對シテ責任ヲ有ス可キモノナルカヲ明記セサリシカ其實際ハ國民ニ對シテモ責任ヲ負ヒタリシナリ千八百三十年及千八百四十八年ノ憲法ノ下ニ於テモ國務大臣ハ國民ニ對シテ責任ヲ負フノ原

大臣責任ノ原則ノ由來發達
ハレ上ノ但ト
ナニトシテス

合衆國ニ於テハ國務大臣ノ責任ナルモノナシ蓋シ合衆國ノ國務卿ハ議院ニ出

入スル權ナク唯大統領ノ補助タルニ過キス故ニ大統領ニ對シテハ責任ヲ有ス

則行ハレタリ千八百五十二年ノナポレオン第三世ノ憲法ニ於テハ國民ニ對シテ責任ヲ有セス唯君主ニ對シテノミ其責任任スルモノトセシカ現行憲法千八百七十五年制定ハ明文ヲ以テ國務大臣ハ議會ニ對シ責任ヲ有スルコトヲ規定セリ

合衆國ニ於テハ國務大臣ノ責任ナルモノナシ蓋シ合衆國ノ國務卿ハ議院ニ出入スル權ナク唯大統領ノ補助タルニ過キス故ニ大統領ニ對シテハ責任ヲ有スルモ國民ニ對シテハ何等ノ責任ヲモ負ハサルナリ但大統領ハ直接ニ國民ニ對シテ責任任スルモノトス合衆國各洲ニ於テモ亦之ト同一ノ制ヲ行フモノ多シ

帝國憲法ノ解釋

シタル所ノ如シ願ミテ我帝國憲法カ國務大臣ノ責任ノ原則ニ付テ特ニ第五十五條ニ規定シタルハ歐米各國一般ニ行ハル、原則ヲ採用シタルモノナルカ又ハ從來我國ノ獨裁國タリシトキノ原則ヲ認メタルモノナルカ若シ從來ノ原則ヲ認メタルモノトセハ即チ第五十五條ハ殆ト無用ノ條文タル可シ然レトモ特ニ此原則ヲ明記シタルヲ以テ之ヲ見レハ歐米各國ニ行ハル、立憲政体ノ主義ヲ採リテ國務大臣ノ責任ヲ規定シタルモノト謂ハサル可カラス余カ然ク斷言スル所以ノモノハ該條第二項ニ國務大臣副署ノ制ヲ定メタルニ由ル夫レ法律勅令又ハ國務ニ關スル詔勅ニ國務大臣ノ副署ヲ必要トシタルハ何ソヤ若シ國務大臣ノ責任ヲ以テ單ニ君主ニ對スルノミノ責任トセハ則チ副署ヲ要セサル可シ然ルニ憲法カ敢テ此制ヲ採リタルハ即チ國務大臣ヲシテ其所爲ニ付キ國民ニ對シテ責任任セシムル爲ニ之ニ干與シタル國務大臣ノ何人タルヤヲ明カニスルニ在リト云ハサルヲ得ス若シ然ラスシテ國民ニ對シテハ責任ナキモノトセハ則チ國務大臣ノ副署ハ果シテ何ノ必要カアル單ニ君主ト大臣トノ關係ニ過キストセハ國務大臣ノ過誤ハ君主自ラ之ヲ裁斷ス可ク決シテ之ヲシテ法

大臣責任ノ制裁

律勅令其他國務ニ關スル詔勅ニ副署セシムルコトヲ要セサル可シ又之ヲ沿革ニ徵スルニ大臣副署ノ制ハ全ク其責任ヲ明カニスルニ外ナラス是余カ憲法第五十五條ノ國務大臣ノ責任ヲ解シテ國民ニ對スルモノナリト斷言スル所以ナリ若シ夫レ君主ニ對シテモ亦責任ヲ有スルハ固ヨリ當然ニシテ憲法上之ヲ特記スルコトヲ要セサルナリ

國務大臣ハ果シテ國民ニ對シテ責任ヲ有スルモノトセハ其制裁ハ如何ナル可キ乎語ヲ易テ之ヲ言ハ、國務大臣カ國民ニ對シテ損害ヲ來ス可キ行爲ヲ爲ストキハ如何ニ之ヲ處置ス可キ乎憲法ハ此制裁ニ付テ何等ノ規定ヲモ爲サズ又他ノ法律ノ之ヲ規定スルモノアラズ蓋シ外國ノ例ヲ按スルニ希臘ニ於テハ國務大臣ニ犯罪アリト認ムルトキ議會之ヲ彈劾スルノ權ヲ有シ普魯西、ヴェルタムベール、埃地利ニ於テハ上下兩院共ニ彈劾權ヲ有シ英國、バーデン、西班牙、佛蘭西、墨西哥、葡萄牙、匈牙利等ニ於テハ下院ノミ彈劾權ヲ有シ丁抹ニ於テハ彈劾權ヲ君主ト下院トニ屬シセルピヤニ於テハ君主及議院之ヲ彈劾スルモノトセリ(セルビヤ)故ニ一局議院制ヲ執(リ)又國務大臣ハ如何ナル場合ニ責任ヲ負フヤニ付テハ或

ハ明確ニ之ヲ規定スルモノアリ或ハ之ヲ規定セサルモノアリバーデン、葡萄牙、普魯西、セルビヤ、埃地利、匈牙利等ニ於テハ彈劾ヲ行フ可キ場合ヲ規定セリ又國務大臣ノ責任ヲ認ムル各國ニ於テモ之ヲ裁判スル法廷一様ナラス普魯西、西班牙、佛蘭西、伊太利、墨西哥等ニ於テハ上院之ヲ裁判シ白耳義、バーデン、葡萄牙、普魯西、羅馬尼、セルビヤ、ヴェルタムベール等ニ於テハ或ハ司法裁判所又ハ高等行政裁判所之ヲ裁判シサクセン埃地利、瑞典ニ於テハ特別ノ裁判所ヲ設クルモノトセリ國務大臣ノ刑事上ノ責任ニ付テハ斯ノ如ク種々ノ規定アリト雖モ其政治上ノ責任ニ付テハ之ヲ規定セルモノ稀ナリ千八百六十七年ノ埃地利大臣ノ責任法ニハ大臣ノ政治上ノ責任ヲモ規定シ又希臘ニ於テ千八百七十六年ニ制定シタリシ大臣責任法ニモ亦其制裁ヲ規定セリ此他尙ホ多少ノ規定ナキニ非ル可シト雖モ此ニハ最モ著シキモノトス我國憲法ハ大臣ノ責任ニ付テハ明カニ規定セルモ其制裁ニ及ハサリシヲ以テ將來大臣責任法ヲ制定スルニ非レハ其責任ニ付テ明確ヲ缺クノ憾ナキ能ハサルナリ

大臣ノ政治上ノ責任ニ關スル制裁ノ最モ一般ニ行ハル、ハ大臣議會ニ信用ヲ

失フニ當リテ其職ヲ辭スルコト是ナリ大臣カ議會ニ對シテ責任ヲ有ストノ明カナル規定アルハ唯佛國ノ一アルノミナレトモ白耳義伊太利西班牙希臘等ノ各國皆此原則ヲ實行シ英國ニ於テモ國務大臣議會ニ信用ヲ失フトキハ其職ヲ辭スルヲ以テ政治上ノ制裁トシテ古來之ヲ慣行セリ

行政官廳

第二節 行政官廳

行政官廳ノ組織ニ關シテハ各國其規定ヲ異ニシ又各種々ノ變遷ヲ經ルモノニシテ我國ノ如キモ古來種々ノ制度ヲ設ケタリ今茲ニ其沿革ヲ詳説スルハ徒ラニ煩雜ヲ極ムルノミナラス又本講義ノ目的トスル所ニアラサルヲ以テ余ハ唯現行行政官廳ノ組織ニ就キ聊カ之ヲ説カム
我行政官廳ノ組織權限ハ總テ天皇ノ大權ニ依リテ之ヲ定ムルモノニシテ明治維新以來今日ニ至ルマテ幾多ノ變遷ヲ經タリ而シテ現行ノ制度ハ明治十八年十二月太政官達第六十九號ヲ以テ定メタル內閣ノ制度及同十九年二月勅令第二號ヲ以テ定メタル各省官制通則及之ニ次テ制定シタル所ノ各省官制等ニ起

各省主管事務ノ大要

因ス爾後多少ノ改正ヲ經タリト雖モ其基本トスル所ハ實ニ明治十八年ノ改革ニアリ而シテ今日現ニ行ハル、所ノ組織ハ明治廿六年勅令第二百二十二號以下ヲ以テ定メタル各省官制通則及各省官制ニ基クモノトス請フ左ニ其概要ヲ述ヘ
右諸官制ニ依レハ帝國中央ノ行政官廳ヲ分テ外務、內務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、逓信ノ九省トシ（此他ニ宮內省アレトモ此ハ純然タル行政事務ヲ處理スル官廳ニ非ス故ニ宮內大臣ハ內閣ニ列セサルヲ例トス）各省ニハ其省ノ首長タル大臣一人ヲ置キ法律又ハ勅令ヲ以テ規定セル主管事務ニ關シ其責ニ任ス（通則第二條）而シテ主任ノ明瞭ナラサル事務ニシテ兩省以上ニ關涉スルトキハ閣議ニ提出シテ其主任ヲ定ムルモノトス又各省ノ組織及其主管事務ハ勅令ヲ以テ其大体ヲ規定シ各省大臣ハ其範圍内ニ於テ省内ノ各局課及其所轄官廳ノ處務細則ヲ定ム
各省ニハ大臣次官各一人及局長、參事官、秘書官、書記官及屬ヲ置キ其員數ハ各省多少ノ差アリ左ニ各省主管事務ノ綱要ヲ述ヘン
第一 外務省外務大臣ハ外國ニ關スル政務ヲ施行シ及外國ニ於ケル帝國ノ商事ノ保護ニ關スル事務ヲ管理シ外交官及領事官ヲ監督スルノ任務ヲ有ス故ニ

憲法

外交ニ關スル諸般ノ事務ハ勿論通商航海及移民等ニ關スル事務ハ外務大臣ノ所管スル所ナリ

第二 内務省 内務大臣ノ管掌スル事務ハ地方行政、議員選舉、警察、監獄、土木、衛生、地理、社寺、出版、版權、戶籍、賑恤及救濟等ニシテ中央衛生會、警視總監及地方官ヲ監督ス又此等ノ事務ヲ處辨スル爲メニ省内ニ各種ノ局課ヲ設ケ事務ヲ分掌セシメ地方行政ノ施行ニ付テハ全國ヲ三府四十三縣ニ分割シ各府縣ニ知事ヲ置キ之ヲ監督シ以テ内治ニ關スル諸般ノ事務ヲ管掌ス

第三 大藏省 大藏大臣ハ政府ノ財務ヲ總括シテ會計、出納、租稅、國債、貨幣、預金、保管物及銀行ニ關スル諸般ノ事務ヲ管理シ又府縣郡市町村及公共組合ノ財務ヲ監督ス即チ政府ノ事務中最モ重要ナル財政事務ハ舉テ之ヲ管理シ毎年歲出入ノ總豫算ハ大藏大臣之ヲ編制ス勿論各省ノ豫算ハ其主務省ニ於テ豫メ編制スルト雖モ大藏大臣ニ於テ之ヲ總括シ以テ之ヲ帝國議會ニ提出スルモノトス

第四 陸軍省 陸軍大臣ハ陸軍々政ヲ管理シ軍人軍屬ヲ統督シ及所轄諸部ヲ監督スルニ在リテ陸軍一般ノ編制及軍隊ノ編制、配置、出師準備、戒嚴、徵發、軍隊ノ

教育、演習、檢閱、軍紀等ヲ掌ルモノトス而シテ時ニ出師、國防、作戰ノ計畫ヲ掌ラシムル爲メニ參謀本部ヲ置キ又國防ノ爲メニ各地ニ師團ヲ置ケリ(廿六年八月勅令第九十一號)

第五 海軍省 海軍大臣ハ海軍々政ヲ管理シ軍人軍屬ヲ統督シ及所轄諸部ヲ督ス故ニ海軍々務ハ舉テ海軍省ノ管掌スル所ニシテ國防ノタメニ全國ヲ五海軍區ニ分チ各區ニ鎮守府ヲ置キ又海軍々令部ヲ置キ作戰沿岸防禦ノ計畫ヲ掌リ鎮守府及艦隊ノ參謀將校ヲ監督ス(廿六年五月勅令第三十六號同三十七號)

第六 司法省 司法大臣ハ各裁判所及檢事局ヲ監督シ檢察事務ヲ指揮シ恩赦復權ニ關スル事項其他諸般ノ司法行政事務ヲ管理ス然レトモ司法大臣ノ裁判所ヲ監督スルハ單ニ行政事務ニ付テノミニシテ裁判所ノ職權ニ關シテハ特ニ法律ヲ以テ規定セルヲ以テ別ニ説明スル所アルヘシ

第七 文部省 文部省ハ教育學問ニ關スル事務ヲ管理スルモノニシテ大中小ノ各學校ハ悉ク文部大臣ノ管理ニ屬ス

第八 農商務省 農商務大臣ノ管理スル事務ハ農商工、水產、林野、鑛山、發明、意匠

商標及地質等ノ事トス

第九 遞信省 遞信省ハ郵便、電信、鐵道、航路、航路標識及船舶海員郵便爲替及郵便貯金ニ關スル事務ヲ司ルモノナリ

以上ノ外尙ホ種々ノ官廳アリト雖モ行政官廳ノ大体ハ右ノ如シ而シテ其事務ノ分掌ハ時ト場合トニヨリテ種々ノ變更ヲ要シ學理上一定ノ理論アルコトナレ

將來最モ世人ノ注意ヲ要シ且最モ慎重ナル可キハ行政官廳ト議院トノ關係ナリ現行法ニ依レハ議院ト各行政官廳トノ間ニ直接ノ關係ヲ認メス議員各省ニ出入シテ其事務ヲ取調フルコトヲ得ス又行政官廳ノ書類ヲ取調ヘントスルトキハ必ス主務大臣ヲ經由シ大臣之ヲ通牒スルコトヲ要スルモノトセリ是大ニ議院ノ權力ヲ減殺シタルモノ、如シト雖モ極メテ緊要ノ事ニシテ今日代議政體ノ行ハル、國ニ於テ最モ其弊害ヲ感スルハ議院カ行政又ハ司法事務ニ干涉シ行政司法ノ獨立ヲ侵害スル傾向アルコト是ナリ殊ニ佛國伊國及希臘等ニ於テ最モ甚タシトス佛國其他ノ國ニ於ケル此弊害ハ法律制度ヨリモ寧ロ慣習ニ

行政官廳ト議院トノ關係

由來スルモノニシテ行政部及司法部カ漫ニ立法部ニ屈下シタルニ職由ス故ニ法令制度ヲ以テ之ヲ防遏スルコトヲ得サルニ非サルモ政治上ノ習慣ヲ以テ此ノ如キ弊害ヲ醸生セサルコトニ注意セサル可カラス是今日行政司法ノ職ニ在ル者ノ最モ注意スヘキ所ナリ

第三節 裁判所

第一款 裁判所ノ組織

裁判所ノ組織

裁判所ノ組織裁判所構成法及ヒ訴訟法ノ講義ニ於テ詳述スヘキモノナレハ此ニハ唯其大原則ヲ説クニ止メントス

憲法第五十七條ノ規定ニ依レハ「司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ」トアリテ司法權ハ裁判所ニ於テ之ヲ實行スヘキ意義ヲ明ラカニシ又憲法上裁判所ノ種類ヲ區別シタルモノハ司法裁判所ト行政裁判所トノ二トス此他尙ホ特別裁判所會計検査院、軍事裁判所等アリト雖モ憲法上明ニ其種類ヲ區別シタルハ司法行政兩裁判所ナルヲ以テ茲ニ聊カ其組織ヲ説クヘシ

蓋シ外國ノ例ヲ案スルニ或ハ司法裁判所行政裁判所トノ區別ヲ爲スモノ有リ
 ハ之ヲ區別セサルモノアリ英國、白耳義、丁抹、希臘、匈牙利、伊太利、諾威、和蘭、羅馬
 尼、露西亞、セルヴィヤ、瑞典ニ於テハ行政裁判所ナルモノヲ特設セスト雖モ佛蘭西、
 獨逸、西班牙、葡萄牙ニ於テハ司法裁判所ノ外行政裁判所ヲ置ケリ又埃地利ニ於
 テハ一種特別ノ行政裁判所アリテ行政事項ノ適法ナルト否トヲ審判スルコト
 ヲセリ

司法裁判所ト行政裁判所トヲ區別スルノ利害得失ニ付テハ大ニ議論アリ請フ
 左ニ甲乙丙論者ノ所説ヲ示サン

行政裁判所ヲ不棄ナリトスル論者ハ曰ク凡ソ裁判ヲ爲スノ職ハ其事項ニヨリ
 テ異ナル可キモノニ非ス故ニ司法裁判所ノ外特ニ行政裁判所ナルモノヲ設ク
 可キ原則上ノ理由アルコトナク又便宜上ノ理由モ存スルモノニ非ス加之行政
 裁判所ヲ設クルトキハ却テ弊害アルヲ免カレス何トナレハ行政裁判所ノ管轄
 スル訴訟ハ一私人ト行政官廳トノ間ノ訴訟ニシテ行政裁判所ハ常ニ行政官廳
 ニ左袒シ一私人ノ權利ヲ侵害スルノ傾向ナキ能ハサレハナリ彼ノ行政裁判所

設置ノ説ヲ唱フル者ハ公益ト私益ノ相衝突スルニ當リテハ私益ハ必ス公益ニ
 一步ヲ讓ラサルヲ得ス故ニ公益ト私益トノ争ハ宜シク特別ノ裁判所ヲシテ之
 ヲ裁判セシムヘント云フト雖モ凡ソ訴訟ハ決シテ公益又ハ私益等ノ利益上ノ
 争ニアラスシテ權利上ノ争ナリ即チ行政訴訟ハ一私人ノ權利ト官廳ノ權利ト
 ノ争ニシテ一私人ノ權利ハ必スシモ行政官廳ノ權利ニ對シテ讓歩セサルヲ得
 サルノ理ナシ論者又曰ク若シ司法裁判所ヲシテ行政官廳ノ處分ヲ是非セシム
 ルニ於テハ司法權カ行政權ヲ監督スルニ至ル可シ故ニ行政處分ノ當否ヲ審理
 スル爲メニハ特別ノ裁判所ヲ設ケサルヲ得スト然レトモ是一ノ杞憂ナルノミ
 司法裁判所ノ組織ニシテ其宜ニ適セス決シテ司法行政二權ノ分立ヲ破フルコ
 トヲ憂フルニ足ラスト

之ニ反シテ行政裁判所ヲ設クルノ必要アリト主張スル論者ハ曰ク訴訟ト爲リ
 タル事項ノ種類ニ因リテ異別ノ裁判所ヲ設クルコトハ決シテ不當ニ非ス今日
 文明諸國ノ人事複雜ナル國ニ於テハ萬般ノ事項ヲ舉テ悉ク之ヲ司法裁判所ノ
 審理ニ委ヌルトキハ適々以テ裁判事務ヲシテ澁滯セシメ從テ一私人ノ權利保

護ニ十分ナルコトヲ得サルノ恐アリ而シテ司法裁判所ノ審理ス可キ訴訟ト行政訴訟トハ其性質ヲ異ニスルモノナルカ故ニ行政訴訟ノ爲メニ特種ノ裁判所ヲ設ケサルヲ得ス論者ハ行政裁判所ヲ設クレハ行政裁判所ハ常ニ行政官廳ニ左祖シ一私人ヲ保護スルニ薄キノ弊アリト云フモ是レ其組織ノ如何ニ關スルモノニシテ某國ノ如ク純然タル行政官ヲシテ行政裁判所ノ評定官ヲ兼テシムルトキハ或ハ論者ノ憂フルカ如キ弊害ナキヲ得サル可シト雖モ行政裁判官ヲ獨立セシメ之ニ與フルニ司法裁判官ト同一ノ特權ヲ以テスレハ決シテ論者ノ憂フルカ如キ弊害ヲ生セサル可シト

之ヲ要スルニ行政裁判所設置ノ利害得喪ハ繫リテ其組織ノ如何ニ在リ若シ其組織ニシテ當ヲ得ハ則チ司法裁判所ヲシテ之ヲ兼テシムルニ優ルコト萬々ナシ人民ノ權利ヲ蹂躪スルノ具タランノミ

司法裁判所ノ組織

第一 司法裁判所ノ組織

憲法第五十七條ニ曰ク「裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム」ト而シテ裁判所構

成法ハ明治二十三年二月二十日ニ公布セラレ同年十一月一日ヨリ之ヲ實施シタリ該法第一條ニ依レハ裁判所ヲ區裁判所、地方裁判所、控訴院及大審院ノ四級ニ分テリ此等各裁判所ノ組織ハ裁判所構成法ニ於テ詳ニ之ヲ規定セルヲ以テ特ニ説述セス然レトモ茲ニ宜シク研究スヘキ問題ハ裁判官選任ノ方法及ヒ裁判官ノ獨立ヲ保護スルノ方法はナリ

第一 裁判官選任ノ方法

裁判所ノ構成如何ハ固ヨリ重要ナル問題ナリト雖モ若シ裁判官選任ノ方法ニシテ其宜シキヲ得サレハ即チ裁判所ノ構成ハ如何ニ善良ナルモ司法權ノ目的ヲシテ充達セシムルコト能ハサルヘシ故ニ裁判官選任ノ方法ハ立法者ノ最モ注意ヲ要スル所ナリ今從來各國ニ行ハレタル方法ヲ類別スルトキハ第一國家首長ノ隨意ニ任命スル方法、第二選舉ノ方法、第三候補者ヲ限定シ其中ヨリ選ニスル方法ノ三ト爲ス

(一) 國家首長ノ隨意ニ任命スル方法 裁判官ノ獨立ヲ維持スルニ足ル可キ相當ノ方法ヲ用非スシテ此方法ヲ採用スルトキハ恰モ他ノ行政官ト同シク全ク

政府ノ隨意ニ任免スルコトヲ得或ハ單純ナル政治上ノ理由ニ基キ其人物ヲ問ハス其勳功ヲ論セス之ヲ黜陟スルニ至ル可シ然レトモ若シ此方法ト裁判官ヲ終身官ト爲ス方法トヲ混用シ任命ハ國家首長ノ隨意トスルモ法律上裁判官ノ獨立ヲ保護スル爲メニ一タヒ任命セラレタル裁判官ハ君主ト雖モ隨意ニ免黜スルコトヲ得スト爲サハ此ノ方法モ政テ甚タシキ弊害ヲ生スルニ至ラサル可シ

(二) 選舉ノ方法 此方法ハモンテスキュー氏ノ三權分立說ヨリ出テタルモノニシテ司法權ヲ以テ三大權ノ一ト爲ス以上ハ司法權ニ十分ノ獨立ヲ與フル爲メニ裁判官ハ人民ヲシテ之ヲ選舉セシムルニアリ然レトモ今日ニ至ルマテ米國瑞典及ヒ革命時代ノ佛國ニ於テ實行シタル經驗ニ依レハ此方法ハ害有リテ益ナキヲ知ル可シ米國ニ於テハ曾テ合衆國及ヒ各州ノ裁判官ハ悉ク大統領又ハ各州知事ノ任命スル所ト爲シタリシカ爾後選舉說漸ク盛ニシテ遂ニ勝ヲ占メ今日ニ於テハ一般ニ一年二年四年八年十年等ノ期限ヲ定メテ之ヲ選舉スルコト、爲セリ然レトモ今日マテノ經驗ニ依レハ此方法ヲ以テ選舉セラレタル裁

判官ハ全ク不羈獨立ヲ失ヒ或ハ苞苴請託ヲ受ケテ法ヲ曲ケ或ハ選舉人ニ阿諛シテ不法ノ裁判ヲ爲ス等其弊害舉テ數フ可カラス故ニ千八百六十七年中以來合衆國ニ於テモ大ニ此法ヲ非難スル者アルニ至レリ今日未タ之ヲ改正スルニ至ラスト雖トモ其任期ヲ延長シテ以テ其弊害ヲ救治センコトヲ務メ居レリ又瑞西ニ於テハ古來選舉ノ方法ヲ行ヒ因襲ノ久シキ今日復タ奈何トモスヘカラサルニ至レリ而シテ該國ニ於テハ米國ニ於ケルカ如ク弊害ノ太甚タシキモノアルニアラスト雖モ尙ホ種々ノ弊害アルヲ免カレス又佛國ニ於テハ千七百八十九年以來共和八年ニ至ルマテ選舉ノ方法ヲ行ヒタリシカ恰モ代議士選舉ニ於ケルカ如ク裁判官選舉ノ事ト黨派問題ニ歸シ從テ裁判モ亦訴訟人ノ黨派ニ因リテ其勝敗ヲ決スルノ弊ヲ生スルニ至リタリ故ニ佛國ノ如キ共和政治ノ國ニ於テモ裁判官ノ任命ハ一ニ大統領ニ委テ唯其進級其他ノ事ニ付テ特別法ヲ設ケルノミ

(三) 候補者ヲ限定シ其中ヨリ選任スル方法 此方法ハ例ヘハ區裁判所ノ判事タルニハ云々ノ資格ヲ具備スルヲ要シ地方裁判所控訴院又ハ大審院ノ判事タ

ルニハ云々ノ資格ヲ具備スルヲ要スト爲スカ如ク其任命ヲ受クヘキ者ニ制限ヲ設ケ其中ヨリ之ヲ任命スル方法ナリ英國ニ於テハ「ウエストミニスター、コート」ノ判事ハ君主之ヲ任命スト雖モ君主ノ之ヲ任命スルニハ心ヲス十個年以上辯護士タリシ者ヨリセサル可カラズ而シテ該裁判所ノ判事ハ少數ニシテ僅ニ二十五人ニ過キサレハ辯護士ノ最モ有力ニシテ學識經驗ニ富ム者ニ非サレハ選任セラル、コトヲ得ス從テ常ニ善良適當ナル判事ヲ得ト云ヘリ又其他ノ下級裁判所ノ判事ニ付テハ多少司法大臣ヲシテ之ヲ認定セシムルコト、爲セリ若シ此方法ヲ嚴密ニ實施スルニ至ラハ政府ノ隨意ニ裁判官ヲ任免躡陟スルカ如キ弊ナキコトヲ得ル敢テ難シトセサルナリ

我國現行ノ裁判所構成法ニ依レハ判事ト爲ルニハ二回ノ競争試験ヲ受クルコトヲ要スルノミナラス大審院、控訴院、地方裁判所ノ判事ト爲ルニハ亦多少ノ制限アリ(第五十七條以下及第六十七條以下)

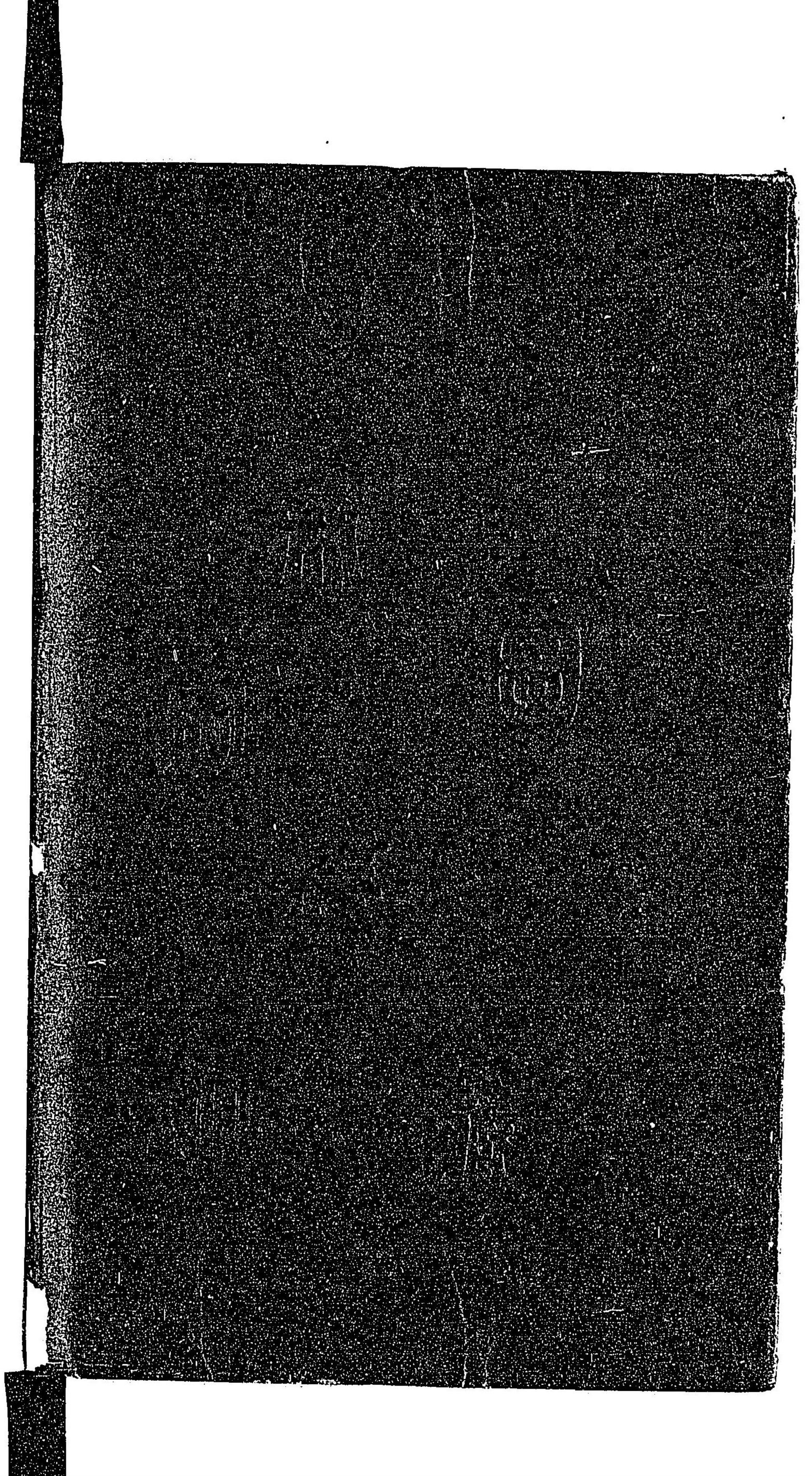
何レノ方法ヲ以テ任命シタルニモセヨ裁判官ノ獨立ヲ保護スルコト十分ナラサレハ眞ニ裁判ノ公正ヲ得ルコト能ハス蓋シ裁判制度ノ沿革ヲ案スルニ當初

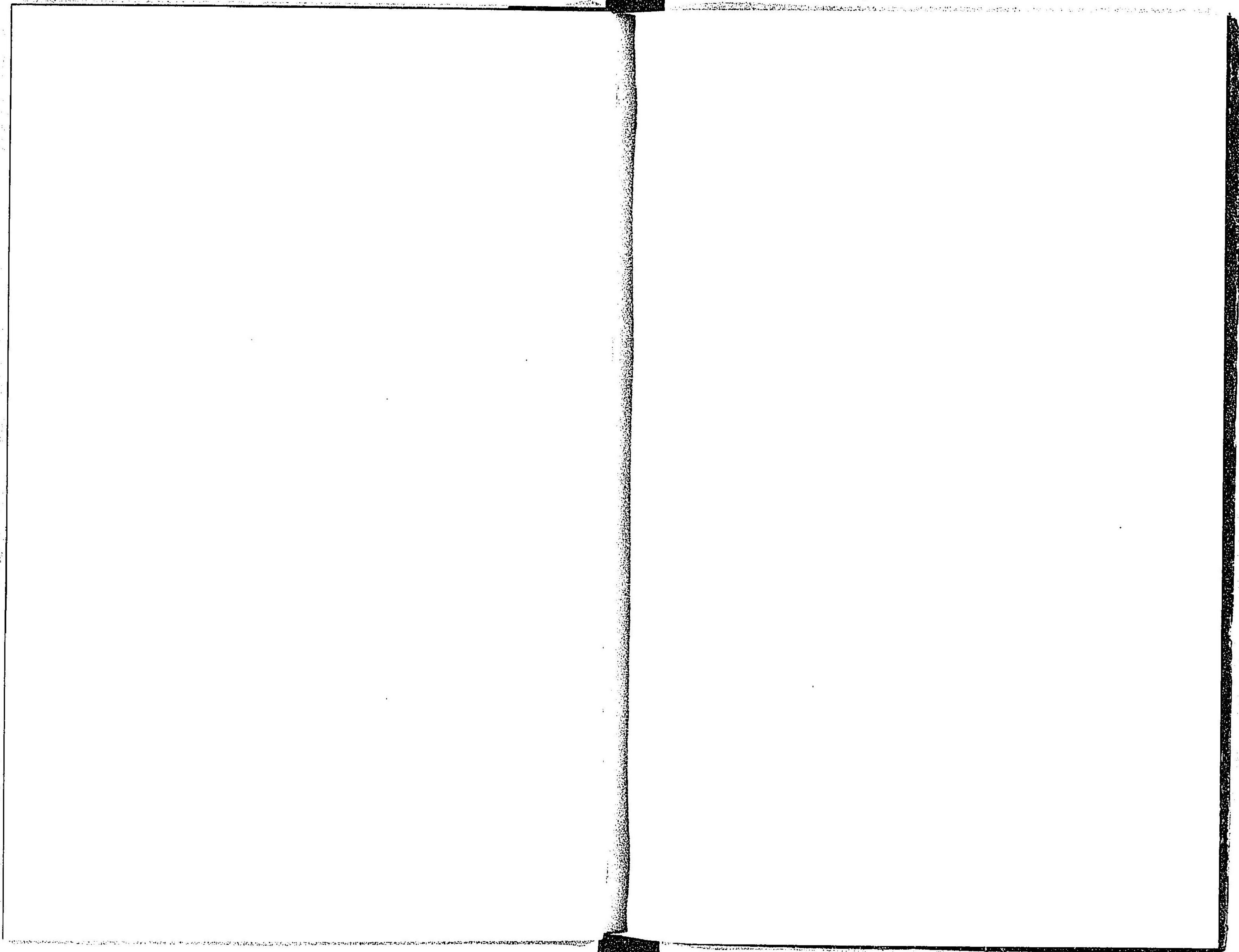
何レノ國ニ於テモ裁判官ハ爾他ノ官吏ト均シク終身官タル性質ヲ有セス從テ種々ノ弊害ヲ生シタリシヲ以テ遂ニ各國共ニ終身官ト爲スノ原則ヲ認ムルニ至タレリ今日英國、白耳義、埃地利、獨逸、伊太利、西班牙其他ノ諸國ハ皆裁判官ヲ終身官トセリ我國モ亦憲法ヲ以テ裁判官ノ獨立ヲ確保セリ而シテ裁判官ヲ獨立ノ終身官ト爲ス理由ハ第一、政府行政官ノ支配ヲ受ケサラシムル爲メ第二、裁判官ヲシテ十分ノ經驗ヲ得セシメ且其位地ニ安シテ公正ナル裁判ヲ爲サシメンコトヲ欲スルニ在リ此制ハ近世ニ至リテ始メテ行ハレタルモノニシテ英國ハ千六百六十八年、瑞典ハ千八百九年、和蘭ハ千八百十五年、ハイエルンハ千八百十八年、ブラジルハ千八百二十四年、葡萄牙ハ千八百二十六年、白耳義ハ千八百三十一年、伊太利ハ千八百四十八年、普魯西ハ千八百五十年、露西亞ハ千八百六十四年、埃地利ハ千八百六十七年、愛爾蘭ハ千八百七十四年以來之ヲ行ヘリ佛國ハ久シ以前ヨリ裁判官ヲ終身官トスルノ制ヲ行ロタリシモ革命ノ時裁判官選舉ノ法行ハレ一時終身官ノ制ハ廢止セラレタリシカ千八百八年以來再ヒ之ヲ行ヘリ

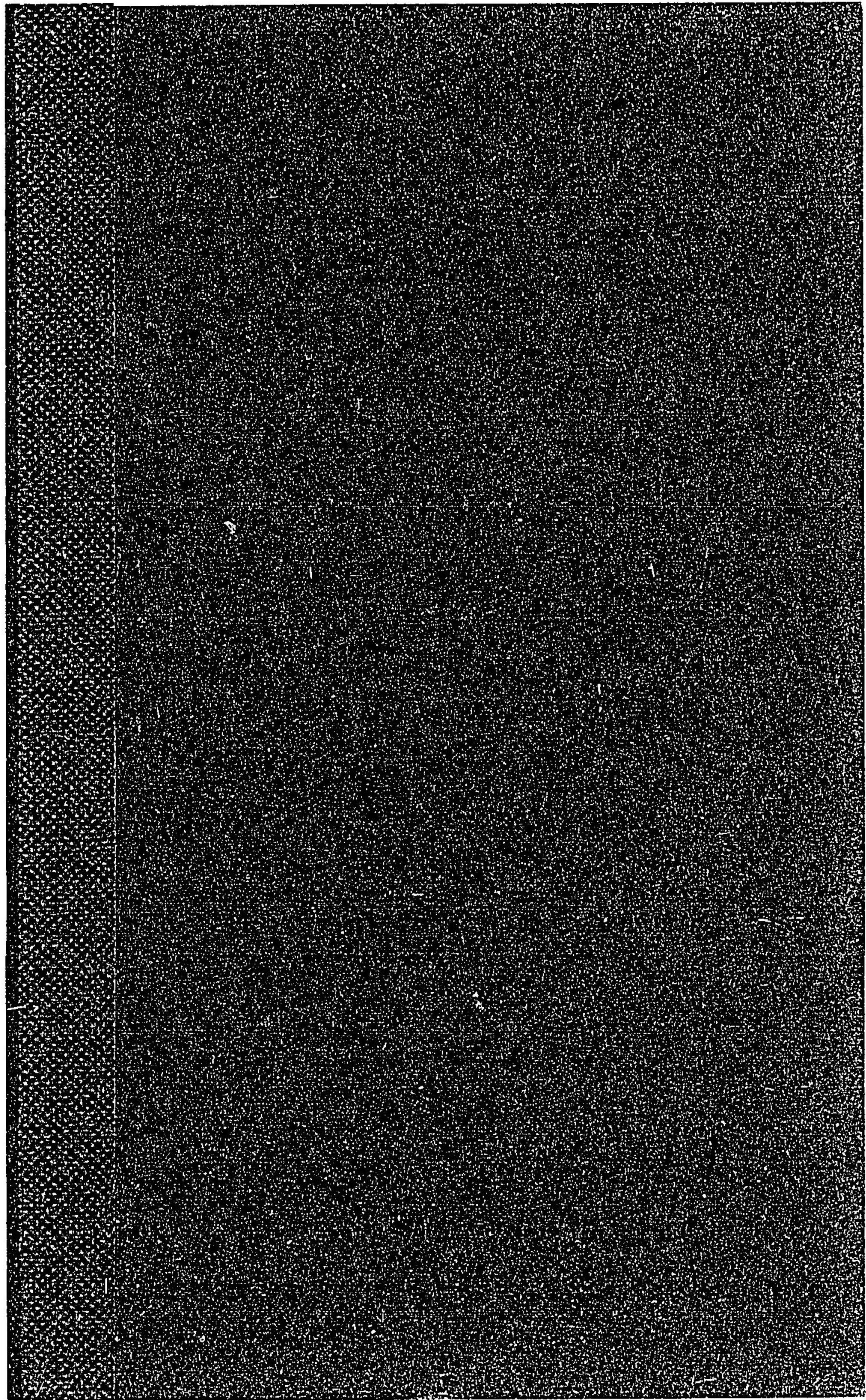
14
3500

憲法講義

本野講師觀近劇職ニ在リテ出講ノ暇ナキカ故ニ本講義ハ假ニ茲ニ終了スルコト、ン尙ホ來學期ニ至リ共出講ヲ俟テ特ニ續編ヲ發刊スヘシ

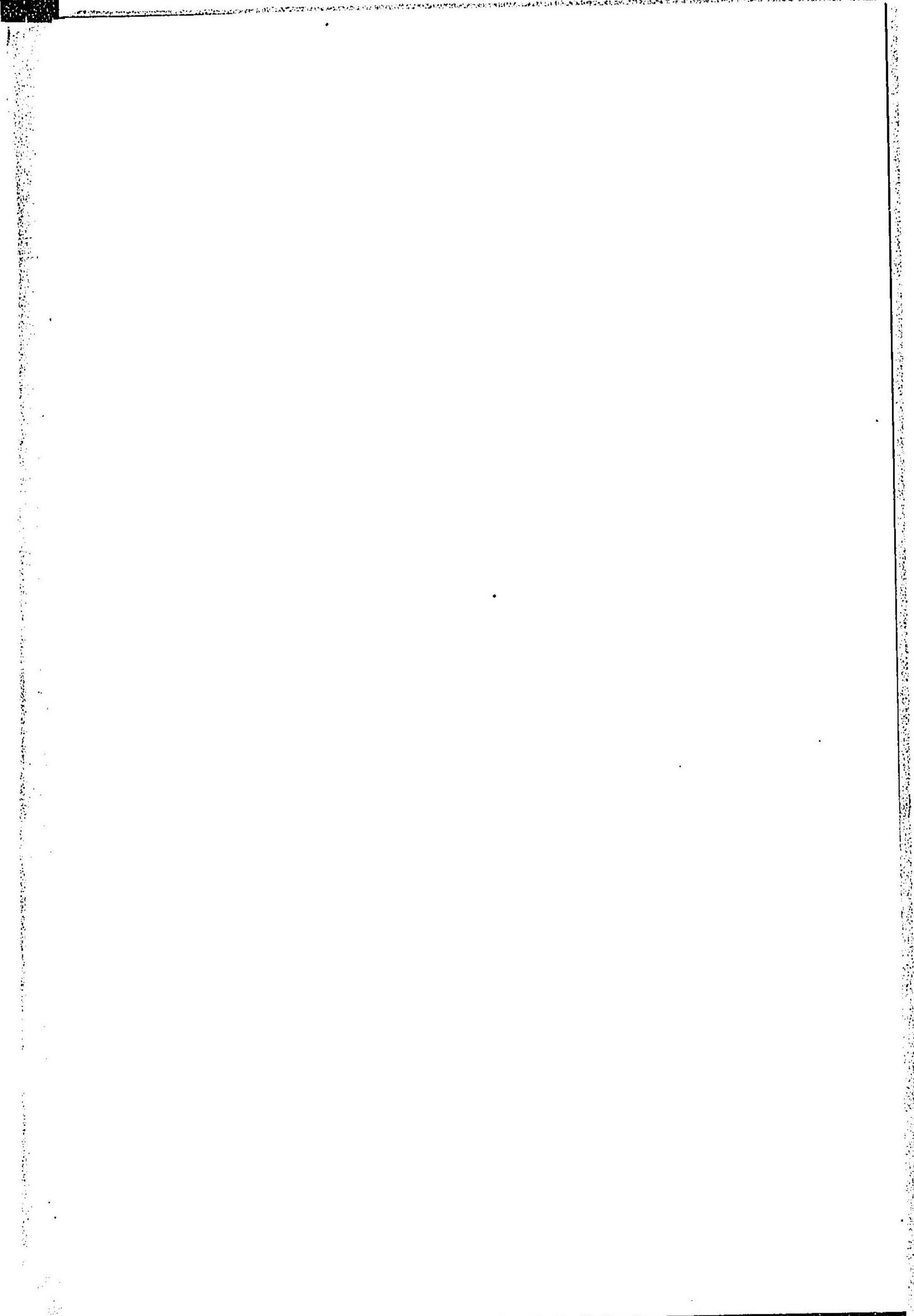






14

250



14

250

和佛法律儀
下三
斯
律
儀
卷
第
一
部
不
野
部